

ク
リ
ス
マ
ス
・
キ
ヤ
ロ
ル

はしがき

わたしは、この小さな幽霊物語において、読者がご自身にも、おたがい同士にも、クリスマス季節にも、あるいは作者のわたしにもご機嫌を損ねることのないような、ある観念の幽霊を呼び起こそうと努めました。願わくは、その幽霊が読者の家楽しく現れて、どなたもそれを退散させたいと思うことがありませんように。

読者の誠実な友人にしてしもべ

チャールズ・デイケンズ

一八四三年十二月

目次

第一章	マーレイの亡霊
第二章	第一の精霊
第三章	第二の精霊
第四章	第三の精霊
第五章	むすび
訳注	
解説	

第一章 マーレイの亡霊

まず第一に、マーレイは死んでいた。それについては、一点の疑いもない。マーレイの埋葬登録簿には、牧師も、教会書記も、葬儀屋も、それから喪主も署名している。スクールジが署名したのだ。そして、スクールジの名前は、王立取引所では、およそかれが署名する気になった文書なら、どんなものにも効き目があった。

マーレイ老人は、ドアの鋳釘のように死にきっていた。

おっとご用心！ わたしはなにも、鋳釘にはどこか格別に死んだところがあるということを自分の経験から知っている、などと言うつもりはない。わたしとしては、むしろ、棺桶の鋳釘こそ、売買されている金物のうちでいちばん死んでいるものとみなしたいところなのだ。

しかし、この譬えには、わたしたちの祖先の知恵が宿っている。だから、わたしの汚れた手で、それをかき乱したりしてはいけない。そんなことをしたら、この国が滅びてしまう。だから、わたしがもう一度、語気を強めて、マーレイは、ドアの鋳釘のように死にきってい

た、とくりかえして言うのをお許しいただきたい。

スクルージは、マーレイが死んだことを知っていただろうか？　むろん、知っていた。知らないはずがないではないか？　スクルージとマーレイは、何年ともわからないくらい長いあいだ、パートナーだった。スクルージは、マーレイの唯一の遺言執行人で、唯一の遺産管理人で、唯一の財産譲り受け人で、唯一の残余財産受遺者で、唯一の友人で、唯一の会葬者であった。

そして、そのスクルージでさえ、この悲しい出来事にひどく心痛することもなく、葬式の当日でも卓抜な商才を発揮して、葬儀をとりしきり、まちがいなく黒字を出したのだ。

ここでマーレイの葬式の話が出たので、いきおい、物語の発端にたち返らなければならぬ。マーレイが死んだことには疑いはない。このことは、はっきりと理解してもらわないことには、これから話そうとする物語から、何も不思議なことが出てこないのである。

もしも、ハムレットの芝居がはじまるまえに、かれの父親が死んでいたということ、わたしたちがとことん確信していなければ、その父親が、夜な夜な東風に吹かれて、自分の居城の城壁の上をぶらぶら歩いたとしても、だれか中年の紳士が日が暮れてから、そよ風の吹くところ——たとえば、セント・ポール寺院の境内——に無分別に出かけていって、息子の

文字どおり薄弱な心を驚かすのと同様に、なにも驚くべきことではなくなってしまうのだ。

スクルージは、マーレイ老人の名前をペンキで塗りつぶすようなことは決してしなかった。それは、何年ものちまでも、問屋のドアの上に残っていた——スクルージ・アンド・マーレイ商会と。会社は、スクルージ・アンド・マーレイ商会として知られていた。ときどき、この商売に新規に参入したひとびとは、スクルージのことをスクルージと呼んだり、マーレイと呼んだりしたが、スクルージは、どちらの名前を呼ばれても返事をした。かれには、どちらでも同じことだったのだ。

ああ！ それにしても、まったく血も涙もない男だった、このスクルージは！ しぼり取る、ねじり取る、つかみ取る、こすり取る、かじりつく、業突くばりの、ばちあたり爺さんだった！

火打石のように、硬くて角張っているくせに、どんな火打ち金でたたいても、ついぞ豊かな火を出したこともないのだ。牡蠣かきのように、秘密主義で、ひととうち解けず、ひとりぼっちだった。心のなかの冷たさは、年老いた顔だちを凍らせ、とがった鼻をこごえさせ、ほおをしなければ、足取りをぎくしゃくさせていた、また、そのために、目は血走り、薄い唇は青くなっていた。そして、耳ざわりな声で、とげとげしい口をきいた。

凍った白い霜が、頭の上にも、眉毛にも、また、針金のように筋ばったあごにも降りていた。スクルージは、持ちまへの低い体温をどこにでも持ってまわった。真夏の土用にも自分の事務所を凍らせ、クリスマスの子供たちになっても、一度だつてやわらげることはなかった。

外部の暑さも寒さも、スクルージにはほとんど影響しなかった。どんな暖かさもかれを暖めることはできなかったし、どんな冬の寒さもかれを凍こえさせることはできなかった。どんなに吹きすさぶ風も、かれほどに厳しくはないし、どんなに降りしきる雪も、かれほど一途いちずではなかったし、どんなに降りの雨も、かれほど情け知らずではなかった。

悪天候も、スクルージのどこに隙を見つけたらよいかわからなかった。この上なくひどい雨も、雪も、霰あられも、霰みぞれも、たった一つの点でスクルージよりもまきっていた。つまり、こういうものは、気まえよく「降りそそぐ」ことがままあるけれど、スクルージは、気まえよく金を出すことなど一度もなかった。

通りでかれを呼び止めて、うれしそうな顔つきで、「やあ、スクルージさん、こんにちはいつ遊びにきていただけますか？」などと言うひとは、一人もいなかった。スクルージに、「なにとぞお恵みを」とねだる乞食も、一人もいなかったし、「いま何時ですか」とたずねる子どもも、一人もいなかったし、これこれの場所に行くには、どの道をとればよいか、と

聞いたひとは、男であれ女であれ、いまでの生涯で一人もいなかった。

盲導犬でさえ、スクルージのことを知っているらしく、かれがやって来るのを見ると、主人を家の戸口や路地の奥へ引つ張っていくのだった。それから、あたかも「まるつきり見えなくなつて、邪眼（1）をもっているよりもましですよ、目の見えないご主人さま」とでも言うように、尻尾を振るのだった。

しかし、スクルージが何を気にかけたらうか？ それこそ、かれの望むところだった。およそ人情なんでものは控えている、と警告しながら、人生の混み合った道押しわけながら進んでいく、それこそ、スクルージにとっては、通人のいわゆる「喜びの種」であった。

さて、あるとき——一年じゅうのすべてのよい日のなかでもいちばんよい日のクリスマス・イブに——スクルージ老人は、自分の事務所で忙しく仕事をしていた。冷たく、寒々とした、身を切るような寒さの天気だった。そのうえ、霧が深かった。

そのの路地ではひとびとがハ―ハ―言いながら往き来し、手で胸をたいたいたり、舗道で足を踏み鳴らしたりして、全身を温めようしているのが、スクルージの耳にも聞こえてきた。

ついさつき、シティーの時計台が三時を打ったばかりなのに、もうすっかり暗くなっていた——もつとも、一日じゅう明るくはなかったのだ——近所の事務所の窓に、まるで手でさ

われそうに濃い褐色の大気につけられた赤いしみのように、ロウソクがゆらめいて燃えている。

霧は、隙間という隙間、鍵穴という鍵穴から流れこんできた。そして、外ではあまりにも濃くたれこれているので、路地はこの上もなく狭いのだけれど、向かいの家なみは、ぼんやりと幻^{まぼろし}のようにしか見えない。

黒ずんだ雲が低くたれ下がってきて、あらゆるものをおぼろにしてしまうのを見ると、まるでへ造物主^ヘがすぐ近くにいて、大仕掛に雲をまき起こしているのではないか、と思われるくらいだった。

スクルージの事務所のドアは、あけ放しにしてあった。向こうの陰気な小部屋、いわば水槽のような小部屋で、手紙の写しを作っている事務員を始終見張っていられるようにという寸法だ。

スクルージの暖炉には、ごくわずかな火が燃えていたが、事務員の火ときたら、それよりもはるかに小さくて、まるで石炭のひとつかけらのように見えた。しかし、事務員は、それを補給することができなかつた。スクルージが石炭箱を自分の部屋にかかえ込んでいるからだ。事務員がシャベルをもってはいってくるたびに、ご主人は必ず、どうやら暇を出すよ

り仕方がないようだね、と予告するのだった。

そこで、事務員は、自分の白い毛糸のえりまきを首に巻きつけて、ロウソクの火で暖をとろうとするのだった。しかし、豊かな想像力のもちぬしではないので、そういう試みも何の役にも立たなかった。

「クリスマスおめでとう、伯父^{おじ}さん！ 神さまのお加護がありますように！」

と、呼ぶ元気な声が出た。それは、スクルージの甥の声だった。甥は、あまりにも足早にスクルージのところへ現れたので、スクルージは、その声を聞いてはじめて、甥が来たのに気がついたのだった。

「フン！」

スクルージは言った。

「ばかばかしい！」

霧と霜のなかを早足で歩いてきたので、スクルージのこの甥は、全身がほてっていた。顔は赤らんで、ハンサムだった。目はキラキラと輝き、吐く息はものすごい湯気になっている。

「クリスマスがばかばかしいんですって、伯父さん！」

スクルージの甥は言った。

「まさか、本気でおっしゃってるんじゃないでしょうね？」

「本気だとも」

スクールジが言った。

「クリスマスおめでとうだつて！　どんな理由があつて、おまえがめでたがるんだよ？　おまえは、じゅうぶん貧乏じゃないか」

「それじゃあ、いいですか？」

甥は、陽気にやりかえした。

「伯父さんはどんな理由があつて、陰気にしてるんですか？　どんな理由があつて、仏頂面ぶつどうめんしてるんですか？　伯父さんは、じゅうぶん金持ちじゃあないですか？」

スクールジは、即座にうまい返事も出てこないの、もう一度、「フン！」と言ひ、余勢を駆つて、「ばかばかしい！」と言ひそえた。

「ぶりぶりしないでくださいよ、伯父さん」

甥が言った。

「ぶりぶりせずにはいられるかい」

伯父がやりかえした。

「どいつもこいつも馬鹿ばかりの世のなかに住んでいて？ クリスマスおめでとうだつて！ クリスマスおめでとうなんか、くそくらえだ！ おまえにとって、クリスマスって何なんだ？ 金もないのに、請求書に支払いをするときじゃないか。一つ年をとるだけで、一時間だつて金が増えることもないときじゃないか。決算してみりや、十二か月を通して、すべての品目が赤字になつてることがわかるときじゃないか。もしも、わしの思うとおりにできるのだつたら」

スクールジは、憤然として言った。

「クリスマスおめでとう、などとほざいてまわっているすべての阿呆どもは、自分のプディングといっしょに煮こんで、心臓にヒイラギの杭をぶつとおして（2）埋めてやるんだが。うん、そうしてやるとも！」

「伯父さん！」

甥が懇願するように言った。

「甥よ！」

伯父は、きびしくやりかえした。

「おまえは、おまえの流儀でクリスマスを祝うがいい。わしは、わしの流儀で祝うから」

「祝うんですって！」

スクルージの甥は、オウム返しに言った。

「でも、伯父さんは祝ってないじゃないですか？」

「それじゃ、クリスマスなんかほったらかしにさせてもらおうよ」

スクルージは言った。

「クリスマスがたんとおまえのためになりますように！ これまでも、たんとおまえのためになったことだろうからな！」

「世のなかには、なんの儲けにもならなかったけれど、自分のためになったかもしれないようなことがたくさんありますよ、おそらくね」

甥が言いかえした。

「クリスマスもそのひとつです。ぼくはね、クリスマスがめぐって来るといつも、クリスマスって本当にすばらしいときだなんて、思うんですよ——その神聖な名前と起源からくる尊敬の念とはべつにね、もつとも、クリスマスに属するものを、その尊敬の念とべつにすることはできないわけだけど。」

親切な、寛大な、慈悲深い、楽しい季節なんです。ぼく知っているかぎり、長い一年の暦

の中でこのときだけですよ、男も女も、異口同音に、閉じきった心を進んで開いて、自分よりも貧しい人たちのことを、墓場への旅の本当の道づれであって、旅先の異なるべつの人種ではない、と考えるように思われるのは。

ですからね、伯父さん、クリスマスが金や銀のひとかけらだってぼくのポケットに入れてくれたためしは一度もないけれど、ぼくはやっぱり、クリスマスは、ぼくのためになつたし、これからもためになるだろうと信じているんですよ。

だから、ぼくは言うんです、神さまがクリスマスを祝福くださいますように！」

水槽のような小部屋にいる事務員は、思わずパチパチと拍手をした。が、すぐにこいつはまずいと気づいて、暖炉の火を火かき棒でつついて、最後のかすかな炎を永久に消してしまつた。

「おまえがもう一ぺん拍手してみろ」

スクールジは言った。

「そしたら、おまえは失業してクリスマスを祝うことになるぞ」

それから、甥のほうへ向き直って、言いそえた。

「あんたは、なかなかの雄弁家でいらつしやる。国会議員にならんのが不思議だよ」

「まあ、怒らないでくださいよ、伯父さん。さあ！ あすは晩ご飯を食べに来てください」
スクルージは、それくらいなら、地獄でお目にかかりたいよ、と言った——そうだ、本当にそう言ったのだ。あからさまに口に出してしまったのだ。そして、それくらいなら、そのとんでもない場所でお目にかかりたいよ、と言った。

「でも、なぜ？」

スクルージの甥は叫んだ。

「なぜなんです？」

「おまえは、どうして結婚したんだい？」

スクルージが言った。

「恋に落ちたからですよ」

「なに、恋に落ちたからだって！」

スクルージは、世の中でめでたいクリスマスよりもばかばかしいものがあるとするれば、それはただひとつ、恋に落ちることだと言わんばかりに、唸り声をあげた。

「さようなら！」

「いえ、伯父さん、伯父さんはぼくが結婚するまえだって一度も来てくれなかったじゃない

いですか。それをいまさら、なんだって来られない理由にするんですか？」

「さようなら」

スクールジは言った。

「ぼくは、伯父さんから何ももらおうとは思っていません。伯父さんに何もおねだりするつもりはありません。どうして、おたがい仲良しになれないんでしょうか？」

「さようなら」

スクールジは言った。

「伯父さんがそんなに頑固なので、ぼくは、心底、残念です。ぼくが直接、伯父さんとけんかをしたことは、いままで一度もありませんよね。でも、ぼくはクリスマスに敬意を表して、お誘いしようとしてみたんです。ですから、ぼくは最後までクリスマスの気分をもちつづけますよ。そこで、クリスマスおめでとう、伯父さん！」

「さようなら！」

スクールジが言った。

「そして、新年おめでとう！」

「さようなら！」

スクールジは言った。

にもかかわらず、甥は、ひとことも怒ったことばを言わずに、部屋から出ていった。表側の戸口のところで足をとめて、事務員にクリスマスなあいさつをした。事務員は、からだは冷えていたが、心はスクールジよりも温かかったから、真心こめてあいさつを返した。

「もう一人が変人がいる」

それを聞きつけたスクールジは、こうつぶやいた。

「わしの事務員だ。一週十五シリングで、妻子があつて、クリスマスおめでとう、などと言つてやがる。精神病院へひっこみたくなるわい」

この頭のおかしい事務員は、スクールジの甥を送り出すと、入れちがいに二人の来客を招じ入れた。二人とも、恰幅のいい紳士で、見るからに感じがよかつた。そして、いま帽子をぬいで、スクールジの事務室に立っていた。二人は、帳簿と書類を手にして、スクールジにお辞儀をした。

「スクールジ・アンド・マーレイ商会でございますね、たしか？」

一方の紳士が名簿と照らし合わせながら、言った。

「失礼ですが、スクールジさんでしょうか、それとも、マーレイさんでしょうか？」

「マーレイ君は、死んでからもう七年になりますよ」

スクルージは答えた。

「七年まえ亡くなりました、ちょうど今夜でしたな」

「マーレイさんの鷹揚なお気もちは、あとにお残りのパートナーの方に立派に引きつがれていることでしょうね」

と、言いながら、紳士は自分の信用証明書を差し出した。

たしかに、そのとおりだった。というのは、スクルージとマーレイは、気の合った者同士だったからだ。「鷹揚なお気もち」という縁起の悪いことばを聞くと、スクルージは、眉間にしわをよせ、首を横に振って、その信用証明書を突っ返した。

「一年のこの祝いの季節にですね、スクルージさん」

紳士は、ペンを取りあげながら、言った。

「目下、非常に困窮している、貧しいひとびとや困窮しているひとびとために、わたしどもがささやかな生活物資をお贈りすることは、つねにもまして望ましいことでございます」

何千ものひとびとが、日々の生活必需品にこと欠いているわけでございますから」

「監獄はないんですかね？」

スクールジが訊いた。

「監獄はいくらでもあります」

紳士は、ペンを下に置きながら、言った。

「それから、救貧院は？」

スクールジは、聞きたでした。

「まだ活動していますかね？」

「ええ。いまでも」

紳士は、答えた。

「もう活動していないと言えたらよろしいのですが」

「それじゃあ、踏み車も貧民救済法も大いに活用されているんですね？」

スクールジは、言った。

「どちらも繁昌しておりますよ」

「やれやれ！ おたくが最初におっしゃったところから、わしは心配してたんですよ、何かが起こって、その二つの有益な事業が止まってしまったのか、とね」

スクールジが言った。

「それを聞いて大いに安心しましたよ」

「そういうものだけでは、多くのひとびとにキリスト教徒にふさわしい精神と肉体の糧^{かて}をあたえることは、とてもできないと考えられますので」

その紳士が言いかえした。

「わたくしども二、三の者が、貧しいひとびとに肉や飲みものや燃料を買って贈る基金を調達しようと努めている次第でございます。わたくしどもがこの季節を選びましたのは、いまがとりわけ、貧困層がつらい思いをし、富裕層が浮かれているときだからでございます。で、ご寄付はいかほどといたしておきましようか？」

「何も書かんでよろしい！」

スクルージは答えた。

「すると、匿名をお望みでございますか？」

「わしのことは、ほうっておいてもらいたい」

スクルージは言った。

「あなたがたが何を望むかとお聞きになるのにな、それがわしの答えですよ。わし自身は、クリスマスだからといって浮かれ騒ぎはせんから、怠け者どもが浮かれ騒ぐ

のに金を割くわけにいかないのですね。

わしは、さっき言った施設の維持には助力しておる——それだけでも大変な物入りだ。だから、暮らしに困っている連中は、そこへ行けばよろしい」

「そこへ行けないひとは大勢います。また、多くのひとびとは、そんなところへ行くらぬなら、死んだほうがましだと思つてのことでしょう」

「死んだほうがましだと思つているのなら」

スクールジが言った。

「さつさと死んでもらつて、過剰な人口を減らすほうがよろしい。それに——失礼だが——わしはそんなことは知らんよ」

「ですが、わかつてくださつてもいいじゃありませんか」

紳士は言った。

「そんなことは、わしの知つたことじゃない」

スクールジはやりかえした。

「人間、自分の仕事さえ承知してりやじゅうぶんで、他人のことにくちばしをはさむ余裕なんぞないんだ。わしは、年がら年じゅう、自分の仕事で手いっぱいですよ。じゃあ、さよ

うなら、お二人さん」

自分たちの主旨をこれ以上追求してもむだだということがはっきりわかったので、二人の紳士は引き下がった。

スクルージは、わしもまんざらでもないわいと思ひ、普段よりもひょうきんな気分になつて、再び仕事にかかった。

そのあいだにも、霧と闇がますます濃くなつてきたので、ゆらゆらと燃えあがる松明^{たきまろ}を掲げたひとびとが駈けまわつて、馬車のまえを走つて道案内する仕事をさせてくれと申し出ていた。

教会の古びた塔には、どら声の古ぼけた鐘がつるされ、壁に開いたゴシック式の窓から、いつもずるそうにスクルージをのぞき見しているのだが、やがてその塔も見えなくなり、たちこめる霧のなかで一時間ごとと十五分ごとに鐘を打つて、時を報じた。そのあとに震えるような余韻が響くさまは、まるで高みにある凍つた鐘の頭のなかで、歯がガチガチ鳴っているみたいだった。

寒さは、いよいよよきびしくなつた。大通りでは、路地のかどで、数人の労働者がガスの管の修理をしていて、火ばちに盛んに火を燃やしていた。そのまわりには、ぼろをまとつた男や

子どもの群れが集まって、手を温めながら、燃えさかる炎のまえで有頂天になって目をパチパチさせている。

水道栓は、あけっぱなしのまま放つてあるので、あふれ出た水は、みるみる凍りついて、人間ぎらいの氷になったしまった。

店さきでは、ショーウィンドーのランプの熱で、ヒイラギの小枝や実がパチパチはじけており、その明るさのために、道行くひとびとの青ざめた顔が赤々と輝いた。

鳥屋と食料品店の商売は、すばらしくおもしろいもの、華々しい見世物となって、それが売り買いという退屈な原理とかかわりがあるなんて、とても信じられなかった。

ロンドン市長は、まるで城^{じょう}砦^{さい}のような広大な官邸のなかで、何十人もの料理人や使用人頭に、市長邸にふさわしいようにクリスマスのお祝いをするように命じた。

また、先週の月曜日に、酔っぱらって往来で血なまぐさい騒ぎを起こしたかどで、市長から五シリングの罰金を課せられた小男の仕立屋でさえ、屋根裏部屋であすのプディングをこねまわしていたし、一方、痩せっぽちの女房は、赤んぼうを抱いて、張り切つて牛肉を買いに出ていった。

霧はいよいよ深く、寒気はますますつてきた！ 刺すような、身にしみるような、嘔

みつくような寒さだ。もしも、あの有徳の聖ダンスタン（3）がいつもの武器のやつとこの代わりに、このような寒気で悪魔の鼻をちよいとつまんでやったら、さすがの悪魔も咆えるようなわめき声をあげたことだろう。

一人の少年が、犬が骨をかじるように、飢えた寒さにかじられ、もぐもぐと嚙まれた小さな貧弱な鼻のもちぬしが、スクルージの店の鍵穴のところに身をかがめて、クリスマス・キヤロルを歌って、スクルージを大いに喜ばせようとした。しかし、

「陽気な紳士がたに、恵みあれ

いかなる憂いもありませぬように！」

と、歌いはじめると、スクルージがものすごい勢いでルーラーを握ったので、歌い手は、ひどくこわがって逃げてしまった。そのあと、鍵穴からは、霧と、もつとスクルージと相性のいい霜がはいりこんできた。

ようやく、事務所を閉める時刻がきた。スクルージは、不承不承、スツールから降りて、水槽のような小部屋で待ちかまえていた事務員に目顔でその事実を知らせた。事務員は、す

ぐさまロウソクを吹き消して、帽子をかぶった。

「あすは、まる一ん日休みたいんだらうな？」

スクルージは言った。

「ご都合がよろしければ」

「都合はよくないよ」

スクルージは言った。

「また公平でもないね。そのために半クラウンもさつ引こうものなら、おまえはひどい目に遭ったと思うだらう、そうに決まっている！」

事務員は、弱々しくほほえんだ。

「それでいて、だ」

スクルージは言った。

「おまえが仕事もしないのに、わしが一ん日ぶんの給料を払ったところで、おまえは、このわしがひどい目に遭っているとは思わんのだからな」

事務員は、一年にたった一度のことですから、と言った。

「毎年十二月二十五日にひとのポケットから金をかすめ取るにしちや、まずい口実だな！」

スクルージは、外套のボタンをあごまでかけながら、言った。

「だが、おまえは、どうしてもまる一日休みたいんだろう。その次の朝は、そのぶん早く出て来るんだぞ」

事務員は、そうしますと約束した。スクルージは、ぶつぶつ言いながら出ていった。事務所は、瞬くまに閉ざされた。事務員は、白い毛糸のえりまきの長い両はしを腰の下まで垂らしたまま（かれは、外套なんかもっていないかったのだ）、クリスマス・イブを祝して、子どもらの列のあとについて、コーンヒル（⁴）のツルツル滑る坂をそれこそ二十ぺんもすべり降りたのち、目隠し遊びをするために、キャムデン・タウン（⁵）のわが家へ一目散に飛んで帰った。

スクルージは、行きつけの陰気な居酒屋で、陰気な夕食をすませた。そして、新聞を全部読んでしまつて、あとの時間は自分の銀行通帳をながめて過ごしてから、わが家へ寝に帰った。

かれは、かつては亡くなったパートナーのものであった部屋に住んでいた。そこは、気の滅入るようなひと続きの部屋で、ある裏庭の突き当たりにある、陰気な建物のなかにあった。

この建物は、そこにあるのがごく不似合で、この家がまだ子供どもだったころ、ほかの

家々と隠れんぼ遊びをしていて、ここへ走りこんだまま、元のところへ出ていく道を忘れてしまったのではないか、と思わずにはいられないような代物しろものだった。

いまではすっかり古びて、すっかり侘わびしくなっていた。というのは、スクルージのほかは、だれも住んでいないので、ほかの部屋はすべて事務所として貸し出してあったからだ。

裏庭は、ひどく暗くて、その石ころをひとつ残らず承知しているスクルージでさえ、手探りで歩かなければならなかった。霧と霜が、家の真つ暗な入り口のあたりにたちこめているので、あたかも、（天候の精）が敷居の上に腰を据えて、悲しいもの思いに沈んでいるかのようなだった。

さて、ドアのノッカーは、すごく大きかったというだけで、とくに変わったところはひとつもなかったのは、事実である。

また、スクルージは、その場所に住むようになって以来ずうっと、朝夕、そのノッカーを見ていたことも、事実である。

さらに、スクルージは、ロンドンのシティーに住んでいるあらゆるひと——あえて言わせなくてもらうなら、市政当局、市参事会、同業組合を含めて——と同様に、いわゆる想像力なるものをまったく持ちあわせていなかったことも、事実である。

また、スクルージは、その日の午後、マーレイのことを口にして以来、その後は、七年前に死んだパートナーのことなんか一度も考えなかった、ということも心に留めておいていた。だきたい。

そのうえで、スクルージがドアの錠に鍵を差しこんだとたんに、ノッカーが、ゆるやかに変化するのではなく、いきなり、マーレイの顔になったのは、いったい、どうしたことだろうか。説明できるひとがあつたら、説明していただきたい。

マーレイの顔――。それは、裏庭にあるほかの物体のように見通せない影のなかにあるのではなくて、暗い貯蔵所にある。腐ったロブスターのように、まわりに不気味な光を放っていた。

それは、怒つてもいないし、凶暴な顔でもなかった。それは、むかしマーレイが見ていたように、幽霊のような眼鏡を幽霊のような額に押しあげて、スクルージを見た。髪の毛は、吐く息のせいか、それとも、熱気のせいで奇妙にそよぎ、目は、大きく見ひらかれているのに、全然動かなかつた。

そのことと、鉛色の顔色のために、ぞっとするほどおそろしい顔になっていた。しかし、そのおそろしさは、顔自体の表情からというよりも、顔のせいではなく、顔とはまるでか

わりのないところから来ているように思われた。

スクルージが、この不思議なものを穴があくほど見つめていると、それはまたノッカーになった。

スクルージが、ギクリともしなかったとか、幼いときからこわいという感じをいだいたことがなかったので、かれの血はいまもそれを意識しなかったとか言えば、それは嘘になるだろう。

けれども、スクルージは、いったん手を放していた鍵に手をかけて、しっかりと回して、中にはいつて、ロウソクをともした。

スクルージは、たしかに、ドアを閉めるまえに、一瞬迷いを見せて、手を休めた。そして、たしかに、まず用心深くドアのうしろを調べた——まるで、マーレイの弁髪が玄関に突き出ているのを目にして、自分が肝をつぶすのではないかと半ば覚悟しているかのように——。

けれども、ドアのうしろには何もなくて、ただ、ノッカーを留めてあるねじとねじ留めがあるだけだった。それで、「フン、ばかな！」と言って、ボタンとドアを閉めた。

その音は、雷のように家じゅうに響きわたった。上の部屋という部屋、地下のブドウ酒商の樽という樽が、それぞれ独自の反響をするように思われた。

スクルージは、反響などに怯えるような人間ではなかった。かれは、戸締まりをし、玄関の間を横切つて、階段を上がつていった。それも、ゆつくりと、途中、ロウソクの芯しんを切りながら、のぼつていった。

読者は、六頭立ての馬車を駆つて、古いりっぱな階段を上がるだの、国会を通過したばかりの悪法をくぐり抜けるだのと、雲をつかむような話をするかもしれない。

だが、わたしが本気で言いたいのは、その階段の上に霊柩車を押しあげることだつてできただろうし、それも、霊柩車を横ざまにし、車の横木を壁のほうへ向け、うしろの扉を手すりのほうに向けてさえもわけなく通せただろう、ということなのだ。

階段には、それだけの幅がじゆうぶんあり、なお余裕があつた。だから、スクルージが、自分のまえの暗闇のなかを霊柩車が上がっていくのを見たような気がしたのは、たぶん、そのためだつたかもしれない。

街路から射してくる、五つ、六つのガス灯の光も、入口をじゆうぶん明るく照らしはしなかつただろうから、スクルージの糸芯ロウソクではかなり暗かつたことは。読者にも想像がつくだらう。

スクルージは、そんなことには露ほども気にせず、どんどん階段を上がつていった。暗

闇は、安い。だから、スクルージは、暗闇が好きだった。しかし、自分の部屋の重いドアを閉めるまえに、部屋部屋を歩きまわって、どこにも異常がないのをたしかめた。そうしたいと思う程度には、さっきの顔の記憶が残っていたのである。

居間、寝室、物置部屋。どこにも異常はない。テーブルの下にもだれもない。ソファの下にも、だれもない。炉格子のなかに小さな火が残っている。スプーンもボウルも用意してある。暖炉の棚には、お粥を入れた小さなシチュー鍋が置いてある（スクルージは、鼻風邪を引いていたのだ）。

ベッドの下にはだれもない。クローゼットにもだれもない。うさん臭い格好で壁にかかっている、スクルージのガウンにもだれも隠れていない。物置部屋もいつものとおり。古い暖炉囲い、古い何足かの靴、魚を入れるかごが二つ、三脚の洗面台、それから、火かき棒が一本。

すっかり安心して、スクルージは、ドアを閉めて、錠をおろした。二重に錠をおろした。それは、かれの習慣ではなかった。このように不意討ちの用心をかためたあとで、スクルージは、ネクタイをはずし、ガウンに着替え、スリッパをはき、ナイトキャップをかぶった。それから、暖炉のまえに腰をおろして、おかゆを食べようとした。

それは、ほんとうに乏しい火だった。こんなに寒さのきびしい晩には、何にもならなかった。その間近のところはすわって、のしかかるようにしていなければ、そのようなひとつまみの燃料からは、暖かいという感じを爪のあかほども引き出すことはできなかった。

この暖炉は、ずっとむかし、どこかのオランダ人が作った古いもので、周囲は古風で趣のあるオランダ・タイルが張ってあり、聖書の物語を絵模様で表していた。カインとアベル、ファラオの娘、シバの女王、羽布団のような雲に空から下ってくる天使たち、アブラハム、ベルシャザル、ソース入れみたいなボートに乗って海に出る使徒たちなど、スクルージの心を惹くような画像が何百となくあった。

それでいて、七年まえに死んだマーレイのあの顔が、古^{いにしえ}の予言者（⁶）の杖のように現れて、すべての画像を呑みこんでしまった。もしも、一枚一枚のタイルが最初は無地で、スクルージの物思いのばらばらな断片から、その表面に何かの絵を描き出し力をもっていたとしたら、そのタイルの一枚一枚にマーレイ老人の顔が現れていたことだろう。

「ばかばかしい！」

とスクルージは言って、部屋の反対側に歩いていった、

四、五回行きつ戻りつしたあとで、かれは、また腰かけた。椅子の背に頭をもたせかけよ

うとしたときに、ふと呼び鈴が目にとまった。それは、部屋につるしてあるものの、いまは使用していない呼び鈴で、いまは忘れられた目的で、建物の最上階にある部屋と通じるようにしてあった。

見ていると、この呼び鈴がゆらゆらと揺れ出したのだ。スクルージは、びっくり仰天し、奇妙な、何とも言いようのない恐怖をおぼえた。最初は、非常に静かに揺れているので、ほとんど何の音も立てなかった。しかし、やがて呼び鈴は、けたたましく鳴り出し、それに合わせて、家じゅうの呼び鈴が鳴りだした。

これは、ほんの三十秒か、一分間続いたのかもしれない。が、それは一時間も続いたように思われた。呼鈴は、鳴りはじめたときと同様に、一斉に鳴りやんだ。それに引きつづいて、ずっと下の方から、ガラン、ガランという音が聞こえてきた、あたかも、だれかが葡萄酒商の貯蔵庫にある酒樽の上を、重い鎖でも引きずって歩いているような音。

そのとき、スクルージは、幽霊屋敷の亡霊たちは鎖を引きずっている、という話を聞いたことがあるのを思い出した。

貯蔵庫のドアが、突然、ガーンと音をたてて開いた。それから、それよりもはるかに大きな物音が階下の床で聞こえた。それから、その音が階段をのぼってくる。それから、まっ

すぐにスクルージの戸口をめざしてやってくる……

「やっぱり、ばかばかしい！」

スクルージは言った。

「だれが信じるもんか」

とはいうものの、それが立ち止まらずに、重いドアをすうつと通り抜けて、部屋へはいつてきて、スクルージの目のまえに立ったときは、さすがにスクルージの顔色が変わった。それがはいってきたとたんに、消えかかっていたロウソクの炎が、あたかも「この男は知っている！」 マーレイの亡霊だ！」と言うかのように、メラメラッと燃えあがって、また暗くなった。

同じ顔だ。まぎれもなく同じ顔だ。髪を弁髪にし、いつものチョッキと、ぴったりしたズボン、ブーツをはいたマーレイだ。ブーツのふさは、弁髪や、上着の裾や、頭の毛と同様に逆立っている。

マーレイが引きずっている鎖は、腰のまわりに留めてあった。鎖は、長くて、尻尾のように巻きついており、銭箱や鍵や南京錠や台帳や証券や鋼鉄製の重い財布でできている（スクルージは、こまかに観察したのだ）。



John Lee Jones

マーレイのからだは、透明なので、スクルージが観察していると、そのチョッキを通して、上着の背中のがわのある二つのボタンが見えるのだった。

マーレイにははらわたがないというわさを、スクルージはたびたび聞いたことがあったが、いまのいままで、まるで信じていなかった。

そうだ、いまだって信じていなかった。幽霊をよくよく見とおして、自分の前に立っているのも認めたけれども、死のように冷たい目で見つめられて、冷水を頭から浴びせられたように感じ、また、頭から顎へかけて巻きつけてある、たたんだネツカチーフ（そんな頬かむりは以前見たこともなかった）の織目までもはつきりと見分けられたけれども、なおも信じられないで、われとわが感覚を疑っていた。

「やあ、どういふことだね？」

スクルージは、いつものように、皮肉な、冷たい口調で言った。

「わしにどんな用事があるのかね？」

「たくさんある！」

——マーレイの声だ、それにまちがいはない。

「おまえさんは、だれだね？」

「だれだ、つたかと訊いてくれ」

「それじゃあ、だれだ、つたのかね？」

スクルージは、声を強めて言った。

「幽霊にしちゃ、いやにやかましいんだね」

スクルージは、「細かいところまで」と言おうとしていたのだが、このほうがもつと適切だと思つて、「幽霊にしちゃ」と言ったのだった。

「この世にいたときには、おまえのパートナーだったジェーコブ・マーレイさ」

「おまえさんは——あの、腰かけられるかね？」

スクルージは、腰かけられるかどうか疑うように顔つきで、相手を見ながら訊いた。

「かけられるよ」

「じゃあ、腰かけなよ」

スクルージがこんな質問をしたのは、こんな透明な幽霊がうまく椅子に腰かけられるかどうかわからなかったからであり、もしも、亡霊が腰かけられない場合には、ばつの悪い言いわけをしなければならぬ羽目になるだろう、と感じたからだだった。

ところが、亡霊は、慣れきった様子で、暖炉の向こう側に腰をおろした。

「おまえは、わしの存在を信じていないね」

亡霊が言った。

「信じていないさ」

スクルージは答えた。

「わしが実在する証拠として、おまえの五感以外にどんな証拠がほしいんだね？」

「わからんね」

スクルージは言った。

「おまえは、何だって自分の五感を疑うんだ？」

「だってさ」

スクルージが言った。

「ちよつとしたことが五感に響くからだよ。胃のぐあいがちよつと悪くたって、五感はずんぜんテン師になってしまふぜ。あんたは、こなれなかった牛肉の切れっぱしかもしれないし、マスタードのひとつまみかも、チーズのひとつきれかも、なま煮えのポテトのひとつかけらかもしれない。あんたが何であるにせよ、あんたには墓場グレイヴよりも肉グレイヴ汁グレイヴくさいところがあるんだよ！」

スクルージは、普段あまりしやれを飛ばすような男ではなかったし、そのときだって、心のなかに、おどけるような気もちはさらさらなかった。実を言えば、自分の気を散らして、恐怖心を抑えつける手段として、気のきいたことを言ってやろうとしただけだった。なぜなら、幽霊の声は、かれを骨の髄まで震えあがらせたからである。

亡幽のじつと動かない、ガラス玉のような目を、一瞬でも黙ってすわって見つめていたら、自分はめちやめちやになってしまುದろう、とスクルージは感じた。亡霊が、独特の地獄の雰囲気がただよわせている点にも、ぞっとするほど恐ろしいところがあった。

スクルージは、自分でそれを感じることはできなかったけれど、それはまさしく事実だったのだ。その証拠に、亡霊は身じろぎひとつしないで腰かけているのに、その髪の毛も、上着の裾も、ブーツのふさも、釜からたちのぼる熱い蒸気にも吹かれているように、つねにザワザワと動いていた。

「この爪楊枝が見えるね？」

スクルージは、すぐさま攻撃のかまえにもどつて言った。いま述べたような理由もあったし、また、たとえ一秒でもいい、亡霊のじつとすわった視線を、自分からそらしたいと思ったからだ。

「見えるさ」

亡霊が答えた。

「だって、見ていないじゃないか」

スクルージが言った。

「しかし、わしには見えるんだな」

亡霊が言った。

「見ていなくてもな」

「なるほど！」

スクルージは言った。

「こんな話を鵜呑みにしていた日にや、これからさきの一生を、どれもこれも自分で作り出した悪鬼の大軍にうるさく悩まされる羽目になりかねんわい。ばかばかしい、ってんだよ。じつに、ばかばかしい！」

これを聞くと、亡霊は、恐ろしい叫びをあげ、鎖をゆさぶって、何とも陰惨な、ぞっとするような音を立てたので、スクルージは、気絶しては大変と、しっかりと自分の椅子にしがみついた。

けれど、亡霊が、部屋の中でまどつているのは暑苦しいとでもいったふうには、頭に巻いた包帯を取りはずしたとたん、下顎がガクンと胸のところまで垂れ下がったときの恐怖ときたら、どれほど大きかったことか！

スクルージは、くたくたとひざをついて、顔のまえで両手の指を組み合わせた。

「勘弁してくれ！」

スクルージは言った。

「恐ろしい幽霊だ、どうしてわしを苦しめるのだ？」

「世俗な心をもった男よ！」

幽霊は答えた。

「おまえは、わしの存在を信じるのか、信じないのか？」

「信じるよ」

スクルージは言った。

「信じないではおられんよ。でも、どうして幽霊が地上に出て歩くのかね。また、どうしてわしのところへやって来るのかね？」

「すべての人間はな」

亡霊が答えた。

「心のなかにある霊が、広く同胞のあいだを歩きまわって、あちこちとあまねく旅をすることを求められているのだ。

もし、その霊が生きているうちに出て歩かなければ、死後に出て歩くように運命を定められているのだ。世界じゅうをさまよい歩いて——ああ、悲しいかな！——そして、自分も地上では分かち合うことも、幸福に変えることもできたかもしれないが、いまではもう、分かち合うことができないものを、ただ、ながめているように運命づけられているのだ！」

再び亡霊は、叫び声をあげ、鎖をゆり動かし、影のような手をふりしぼった。

「あなたは鎖につながれておいでだね」

スクルージは、ガタガタ震えながら言った。

「なぜだか、教えてくれるかい？」

「わしは、生きているときに自分が作った鎖を身につけているのだ」

亡霊は答えた。

「わしは鎖の環を一つずつなぎ、一ヤードずつ伸ばしていったのだ。自分の自由意志で鎖を腰に巻き、自由意志で身につけたのだ。この鎖の型は、おまえには見おぼえないのか

ね？」

スクルージは、ますますひどく身震いした。

「それとも、おまえは」

亡霊はことばを続けた。

「自分が巻きつけている頑丈な鎖の重みと長さを知りたいのかね？ 七年前のクリスマス・イブには、おまえの鎖は、この鎖と重さも長さもまったく同じだったのだ。あれからずっと、おまえは、こつこつとそれを太く長くしてきたのだ。ずっしりと重い鎖になっているよ！」

スクルージは、自分が五十尋ひゃちも六十尋もある鉄の鎖に取り巻かれているのではないかと思つて、床の上の自分のまわりを見まわしたが、何も見つからなかった。

「ジェーコブ」

スクルージは、哀願するように言った

「ジェーコブ・マーレイ老人、もっと話しておくれ。わしに慰めになることを話しておくれ、ジェーコブ！」

「わしは、慰めになることは何ひとつ持ちあわせていない」

亡霊が答えた。

「それは、ほかの世界からくるのだ、エベニーザー・スクルージ。そして、べつな使いが、べつな種類のひとびとのところへ送りどけるのだ。」

それに、わしは話したいと思うことも話すことができない。わしに許された時間は、あとわずかしかない。わしは、休むこともできないし、とどまることもできない。どこでもぐずぐずしていることはできないのだ。

わしの霊は、わしらの事務所から一步も外へ出たことがなかった——よく聴けよ！ 生きているとき、わしの霊は、わしらの金勘定のあなぐらという狭くなるしい世界から、一步も外へ歩み出たことがなかったのだ。だから、これからさき、うんざりするような長い旅が待っているのだ！」

スクルージが物思いにふけるときはいつでも、ズボンのポケットへ両手を入れるのが癖だった。亡霊が言ったことをじっくり考えながら、いまもそうしていたが、目をあげもせず、ひざまずいているのをやめようとしなかった。

「きつと、その旅はずいぶんゆっくりしたものだっただろうね、ジェーコブ」
スクルージは、事務的な態度で言ったが、謙虚さと敬意は失っていないかった。

「ゆっくりだと！」

亡霊がくりかえして言った。

「死んでから七年」

スクルージは、考えこんで言った。

「そして、そのあいだじゆう、ずうっと旅をつづけていたんだね？」

「そのあいだじゆう、ずうっとだ」

亡霊が言った。

「休みもなく、安らぎもない。悔恨の苦しみに、絶えまなくさいなまれながらだ」

「早足で旅をするのかい？」

スクルージは言った。

「風の翼に乗って（7）だよ」

亡霊が答えた。

「七年のあいだには、ずいぶんと広い範囲を踏破したことだろうね？」

スクルージが言った。

亡霊は、これを聞くと、またもや叫び声をあげ、しんとした夜の静寂しじまのなかで恐ろしい音を立てて鎖をガチャガチャいわせたので、区当局が安眠妨害として告発してもおかしくない

と思われるほどだった。

「おお！ 囚とらわれて、縛られ、二重の鎖につながれていながら」
亡霊は叫んだ。

「不滅のひとびとが幾時代にもわたって、この世のためにたゆまず重ねた努力も、それがもたらしうる幸福があまねく行きわたらせるには、永遠の時間が必要だということを知らんとは！

どこであれ、小さな範囲内で、自分にふさわしく働いているキリスト教徒の精神も、ひとのために役立つ仕事をあれもしよう、これもしようとするには、人間の寿命はあまりにも短かすぎると思い知るのだ、ということを知らんとは！

おのれの一生の機会をひとたび誤ったなら、どんなにたっぷり後悔しても、その償いはできないということを知らんとは！

「ただ、そういう人間だったのだ、このわしは！ ああ、そういう人間だったのだ、このわしは！」

「だが、ジェーコブ、あんたはいつもりっぱな商売人だったでしょうが」
いまや、このことを自分にあてはめて考えはじめたスクールジは、口ごもりながら言った。

「商売だつて！」

亡霊は、またもや手をもみしぼりながら叫んだ。

「人類がわしの商売だつたのだ。公共の福祉がわしの商売だつたのだ。慈善、慈悲、寛容、善意、これがみんなわしの商売だつたのだ。わしの取引なんぞは、わしの商売という渺々たる大海のなかの一滴の水にすぎなかつたのだ」

亡霊は、まるでその鎖が、自分のすべて無益な嘆きのもとでもあるかのように、腕いっぱいにもちあげて、それからまた、ドスンと床に投げおろした。

「めぐりゆく一年のなかのこの季節に」

亡霊が言った。

「わしは、いちばん苦しむのだ。なぜわしは、同胞の群れのなかを目を伏せたままで通り過ぎてしまつて、東方の博士たちを貧しいあばらやへ導いた、あのありがたい星を目をあげて見なかつたのだろう！ あの星の光がわしを導いてくれたかもしれない貧しい家は一軒もなかつたとしても言うのか？」

スクールジは、亡霊がこんな調子で話しつづけるのを聞いて、ひどくおろおろして、ガタガタ震えはじめた。

「よく聞け！」

亡霊が叫んだ。「

「わしの時間は、もうなくなりかけている」

「聞くよ」

スクルージは言った。

「だが、わしに辛くあたらないでくれ。あんまり仰々しいことばは使わないでくれ、

ジェーコブ！ お願いだ！」

「どういう次第で、わしがおまえの目に見える姿でここへ現れたのかは、話すことはできない。わしは姿こそ見えないが、もう何日も何日もまえから、おまえのそばにすわっていたのだ」

これは、ありがたい話ではなかった。スクルージは、ブルツと身ぶるいして、額の汗をぬぐった。

「それは、わしの苦行のうちでも決してなまやさしい部分じゃない」

亡霊はことばをつづけた。

「わしが今夜ここへ来たのは、おまえにはまだわしのような運命を免れる機会と希望があ

る、ということ警告するためなのだ——わしが手に入れてやった機会と希望だよ、エベニーザー」

「あんたは、いつもわしには親切な友人だった」

スクルージは言った。

「ありがとう！」

「おまえのところへ」

亡霊はことばをつづけた。

「三人の幽霊が現れることになっている」

スクルージの顔は、さつき亡霊の顎がガクンと下がったときに負けないくらい、失望して低く垂れてしまった。

「それが、あんたがさつき言った機会と希望なのかね、ジェーコブ？」

スクルージは、おどおどした口調で訊いた。

「そうだ」

「わしは——わしは、あの、むしろおとわりしたいなあ」

スクルージは言った。

「三人の訪問を受けないかぎり」

亡霊が言った。

「おまえは、わしがたどった道避けることは望めないよ。第一の幽霊は、あすの夜、一時の鐘が鳴るとともにやって来ると思っているがいい」

「三人いつしよに来てもらって、一挙にすますわけにいかないものかなあ、ジェーコブ？」
スクルージは氣を引いてみた。

「第二の幽霊は、その次の夜の同じ時刻に現れる。第三の幽霊は、その次の夜、十二時の鐘が最後に打ちやむとともにやってくる。

もうわしとは会えないものと思ってくれ。そして、おまえ自身のためにも、わたたちのあいだで起こったことをしっかりと覚えておくがいい」

こういうことばを言いおわると、亡霊は、テーブルから頬かむりの布を取りあげ、以前のように、頭に巻きつけた。上下の顎が包帯で合わさってときに、歯がカチツという音を立てたので、スクルージにもそれがわかった。

思いきって、顔をあげてみると、超自然の来訪者は、一方の腕に鎖をぐるぐる巻きつけて、スクルージの真ん前に、背筋をすつくと伸ばして立っていた。

幽霊は、あとじさりして、スクルージから離れた。幽霊が一步後退するごとに、窓が少しずつ上がっていき、幽霊が窓に達したときには、窓はすっかり開いていた。

亡霊は、スクルージにこっちへ来いと手まねきした。そこで、スクルージは、近づいていた。二人のあいだの隔たりが二歩ぐらいになったとき、マーレイの亡霊は、片手をあげて、それ以上そばに来てはいけないと合図した。スクルージは、立ち止まった。

それも、合図に従ったというよりも、むしろ、驚き恐れたからだだった。というのは、幽霊が手をあげるとともに、大気のなかに混乱した音が聞こえてきたからだ——悲嘆と後悔の支離滅裂な声、言いようもなく悲しげな、自分を責めて泣き叫ぶ声だった。

亡霊は、一瞬間、耳をすまして聴いていたが、やがて、その悲しみの哀歌に自分も声を合わせながら、寒々とした、暗い夜のなかへ浮かび出ていった。

スクルージは、好奇心のあまり捨てばちになって、窓のところまであとを追った。かれは、外をながめやった。

空中には幽霊が充滿していて、そわそわと急ぎながら、あちこちとさまよい歩きながら、呻き声をあげている。だれもかれも、マーレイの亡霊のように、鎖を身につけている。少数のもの（罪を犯した政府の役人かもしれない）は、いっしよに繋がれている。だれ一人、自

由なものはいない。

生前、スクルージが個人的に知っていたひとびともたくさんいた。白いチョッキをつけた、足くびにばかでない鉄の金庫を引きずっている、一人の年とつた幽霊とは、スクルージはかなり親密な間柄だった。この幽霊は、下の方に見える戸口の上がり段にいる、赤んぼうを抱いたみすぼらしい女を助けようとしても、それができないと言って、あわれな声で泣き叫んでいる。

これらすべての幽霊たちがかかえている不幸は、自分ももろもろの人事にかかわって、役に立ちたいと願いながらも、その力を永久に失ってしまったところにあることは、明らかだった。

こういうまぼろしどもが霧のなかへ消え失せたのか、あるいは霧がかれらをすっぽりと包んでしまったのか、スクルージには、わからなかったけれど、その姿も、気味わるい声も、ともに消え失せてしまった。そして、夜は、スクルージが家へ歩いて帰ったときと同じように、静まりかえった。

スクルージは、窓を閉めてから、さつき幽霊がはいってきたドアをじっくり調べてみた。ドアは、スクルージが自分の手で施錠したとおりに二重の錠がかかっている。かんぬきも動



かされていない。スクールジは、「ばかばかしい！」と言おうとしたが、「ば」と言ったと
ころでやめてしまった。

そして、自分が受けた感動の昂^{たか}ぶりのためか、一日の疲労のためか、霊界を垣^か間^ま見た見た
ためか、幽霊とうつとうしい会話をしたためか、それとも、夜が更けていたためか、たまた
なく眠くなってきたので、服もぬがずに、すぐさまベッドにもぐりこんで、たちまち眠りに
落ちてしまった。

第二章 第一の精霊

スクルージが目をさましたときは、あまりにも暗くて、ベッドから外を見ても、透明な窓と、自分の部屋の不透明な部屋の壁とを見分けることができないほどだった。

かれがイタチのような鋭い目で、暗闇を見すかそうと努めていると、そのとき、近くの教会の鐘が十五分ごとに四度打った（8）。そこで、かれは時刻を知ろうとして耳をすました。スクルージがひどく驚いたことには、重々しい鐘は六つから七つ、七つから八つ、それから規則正しく十二時まで打って、そこでやんだ。十二時！かれが床についたときは、すでに二時を過ぎていたのだ。時計が狂っている。機械のなかにつららがはいりこんだにちがいない。十二時だなんて！

スクルージは、このとんでもない時計を正そうとして、二度打ち時計のバネに指をふれた。その急速な小さな鼓動は、十二を打って、止まった。

「おや、おや、まる一日じゅう寝どおして」

スクルージは言った。

「次の晩の夜更けまで眠っていたなんてことがあるはずがない。まさか太陽に異変が起こって、いまが昼の十二時だなんていうわけでもあるまいて！」

それだと大変なことなので、スクルージは、寢床からはい出して、手探りで窓のところまで行った。

何か見ようとすれば、まず、ナイトガウンの袖で霜をゴシゴシこすり落とさなければならなかった。それでも、ほとんど何も見えなかった。やっと思分けられたことは、依然として霧が非常に深く、やたら寒いということ、それから、ひとびとがあちこち走りまわって、大騒ぎしている声がまったく聞こえないということだった。もしも、夜が明るい昼を追い払って、この世界を占拠してしまったのであれば、当然、そういう物音がしているにちがいない。

これは、大いにほつとすることだった。なぜなら、もしも数える日がなくなったら、「この第一手形一覧後、三日以内にエベニーザー・スクルージ氏、またはその指定人に支払うこと」云々うんぬんといったことは、アメリカ合衆国の有価証券（9）と同様に、無価値になってしまうだろうからだ。

スクルージは、再びベッドにはいつて、考えて、考えて、考えぬいたけれども、どうしてもわけがわからなかった。考えれば考えるほど、いよいよわからなくなる。そして、考えまいとすればするほど、ますます考えてしまうのだった。

マーレイの亡霊は、いたくかれを悩ました。とつおいつ思案した末に、あれはすべて夢だったのだ、と胸のなかで決めるたびごとに、スクルージの心は、強いバネがはねかえるように、またもとの位置に飛びかえって、「あれは夢だったのか、それとも夢ではなかったのか？」という同じ疑問を突きつけて、考え直すことを迫るのだった。

スクルージがこんな状態でじっと横になっていると、十五分しよう鐘がさらに三度鳴った。そのとき突然、一時の鐘が鳴ると、第一の精霊がやってくる、とマーレイの亡霊が警告していたのを思い出した。

スクルージは、その時刻が過ぎるまでは眠らないでいようと決心した。スクルージが天国へ行くことができないと同様に、もはや眠ることができないことを思えば、これは、もしかすると、かれにできる一番賢明な決意であったかもしれない。

十五分間があんまり長かったので、知らないうちについとうとして、時刻を聞きのがしたにちがいない、と一度ならず思ったほどであった。やつのこと、鐘の音がかれのそばだ

でている耳に響いてきた。

「カラン、コロン！」

「十五分過ぎ」スクルージは数えながら言った。

「カラン、コロン！」

「三十分過ぎ！」

スクルージは言った。

「カラン、コロン！」

「あと十五分」

スクルージは言った。

「カラン、コロン！」

「例の時間だ」

スクルージは、勝ちほこったように言った。

「ほかには何も出やしない！」

こう言ったのは、まだ一時の鐘が鳴り出さないうちだった。いまや鐘は、「ボーン」と、
太く低い、鈍い、こもった、心が滅入るような音を立てて、一時を打った。

その瞬間、部屋のなかに何かピカッと光った。そして、スクルージのベッドのカーテンがさっと引かれた。

たしかに、一つの手で、スクルージのベッドのカーテンが引き開けられた。足元のカーテンでもないし、背後のカーテンでもない。スクルージの顔が向いているカーテンだ。

スクルージのベッドのカーテンが引き開けられた。そこで、スクルージは、ハツとして飛び起き、半身を起こした姿勢になって、カーテンを開いた異界からの来訪者と面と向かいあってしまった。いまのわたしと読者のように、ぴったり接近してだ。なにしろ、わたしは、気もちのうえでは読者のすぐそばに立っているのである。

それは、奇妙な姿だった——まるで子どものようだ。そのくせ、子どもというよりは、むしろ、老人に似ているのだが、何か超自然的な媒体を通して見るために、視界からだんだん遠のいて行って、子どもの大きさに縮んでしまったような外見をしている。

首のあたりから背中までたれ下がった髪は、老人のように真っ白だった。けれども、顔にはしわひとつなく、肌はバラ色でつやつやしている。腕は、非常に長く、筋骨たくましい。両手も同じようで、並々ならぬ握力がありそうだ。太ももと足は、非常にほっそりしていて、腕や手と同様に、むき出しだった。

純白の長い上衣をまとい、腰にはピカピカするベルトをしめており、その光沢は、すごく美しかった。手にはみずみずしい緑色のヒイラギの枝をもっている。その、冬の象徴であるヒイラギとは奇妙な対照をなして、上着の裾は、夏の花々をあしらってある。

けれども、何よりもいちばん不思議なことは、その精霊の頭のでっぺんから明るく澄んだ光が吹き出している点だった。その光のために、こういうことがすべて見えたのである。また、そのために、精霊は、沈んだ気分するときには、いま小脇にかかえている消灯器を帽子代わりにかぶる必要があったことはまちがいない。

しかし、スクルージが次第に落ち着いてじっくり見ていると、このことさえ、精霊のいちばん不思議な性質ではなく、なつた。というのは、精霊のベルトがいまここがピカピカと輝いていたかと思うと、こんどは、べつなところが輝き、ある瞬間に明るかったところが、次の瞬間には暗くなるのにつれて、精霊の姿自体も、その明暗がたえず交代していたからだ。いま一本腕の姿になったと思えば、次には一本足になり、いま二十本足になったと思えば、こんどは首なしの二本足となり、さらにまた、胴なしの首になるという具合だ。

消えていく部分は、濃い暗闇の中に溶けこんでしまつて、まったく輪郭は見えない。そして、こういう有様にあつけにとられている最中に、精霊は、再びもとの姿になって、これま

でのようにはっきりと鮮やかになるのだった。

「あなたが、おいでになるという前ぶれのあつた精霊さんで？」

スクルージは、たずねた。

「そうだよ！」

その声は、静かでやさしかった。奇妙に低い声で、すぐそばにいてはなくて、やや離れたところにいるようだった。

「あなたはどなたで、何をなさっている方でしょうか？」

スクルージは聞きたかった。

「わたしは、過去のクリスマス幽霊だよ」

「ずっとむかしのですか？」

スクルージは、小人のような精霊の背丈を見守りながら訊いた。

「いや。おまえの過去だよ」

もしかすると、スクルージは、もしだれかに訊かれても、だれにもそのわけを答えることはできなかっただろうが、とにかく、そのときとくに、その精霊が帽子をかぶっているところを見たくてたまらなくなった。それで帽子をかぶってみせてくれ、と頼んだ。

「何だと！」

と、幽霊は、大声で言った。

「おまえは、わたしがあたえる光を、俗世の垢にまみれた手でもう消したいと思うのかね？ おまえのような人間の情念が凝りかたまつて、この帽子ができあがり、それをこの長い年月、無理やりにわたしの額まぶかにかぶらせてきたものだ。おまえもその一人だが、それでじゅうぶんではないのか？」

幽霊は叫んだ。

スクルージは、恐縮して、お気を悪くさせるつもりは毛頭ございませんし、また、わざと精霊に「帽子をかぶらせた」覚えは、生まれてこのかた一度もありません、と言いわけした。それから、勇気を出して、何のご用でここへいらっしゃったのか、と尋ねてみた。

「おまえを幸福にするためだ！」

幽霊は言った。

スクルージは、それはどうもありがとうございます、とお礼を言ったが、それなら、ひと晩ぐっすり寝かせてもらったほうが、もっとその目的にかなうのだが、と思わずにはいられなかった。

「ならば、おまえを教化するためだ。気をつけるがいい！」

精霊は、そう言いながら、がっしりした手を差し伸べて、スクルージの腕をやさしくつかんだ。

「お起ち！　そして、わたしといっしょに来るのだ！」

スクルージが、天候も時刻も散歩するには向いていないと言ったところで、ベッドのなかは温かだが、寒暖計はずっと氷点以下に下がっていると云ったところで、スリッパとガウンとナイトキャップという薄着しかしていませんのでと言ったところで、あるいは、ちょうどいま風邪を引いていますのでと言ったところで、なんの役にも立たなかっただろう。

精霊のにぎり方は、女の手のようにやさしいものだったけれど、拒むことはできなかった。スクルージは、立ちあがった。だが、精霊が窓に向かって行くのを知って、その長衣をにぎりしめて、哀願した。

「わたしは、生身の人間です」

スクルージは訴えた。

「ですから、落っこちてしまうかもしれません」

「わたしの手が、ちよつとそこにさわってさえすればいいのだ」

精霊は言つて、スクルージの胸に手を当てた。

「そうすれば、おまえはもつと危険な場合でもちゃんと支えられているのだよ」

そう言っているうちに、かれらは、壁を通り抜け、広々とした田舎道へ出た。両側には畑が広がっている。都会は、すっかり消えてしまつて、何の跡かたもなかった。暗闇も霧も、都会とともに消え去つていた。そこは、晴れた、冷たい、冬の日で、地面には雪がつもつていた。

「おや、まあ、驚いた！」

スクルージは、両手を握りしめ、あたりを見まわしながら言つた。

「わたしは、ここで育つたんです。子どものころは、ここにいたんです」

精霊は、スクルージをやさしく見つめていた。精霊の手が触れたのは、軽く、ほんの一瞬だったけれども、それはまだ、この老人の感覚にありありと残っているようだった。

スクルージは、無数の香りが空中にただよっているのを感じた。その香りのひとつひとつに、遠いむかしの、忘れて久しい、無数の思いや、希望や、歓びや、憂いが結びついているのだつた！

「おまえの唇はふるえているね」

幽霊は言った。

「それに、ほおを伝わっているのは何だね？」

スクルージは、いつになく声を詰まらせて、あの、これはにきびです、とつぶやくように言った。それから、精霊に、どこへでも好きなところへ連れて行ってください、と頼んだ。

「この道をおぼえているね？」

と、精霊が訊いた。

「おぼえていますとも！」

スクルージは、熱をこめて叫んだ――

「目隠しされたって歩けますよ」

「こんなに長い年月のあいだ、忘れていたのは奇妙だね」

幽霊が言った。

「さあ、さきへ進もう」

二人は、道なりに進んでいった。スクルージは、どの門も、柱も、木も、見おぼえがあった。やがて、遠くに小さな市場町が見えてきた。橋が見え、教会が見え、曲がりくねった川が見えた。

そのとき、毛むくじやらの数頭のポニーが男の子たちを乗せて、はやめし速歩でこっちへ来るのが見えた。その子らは、農夫が御している二輪馬車や荷馬車に乗っている、ほかの男の子たち呼びかけている。こういう男の子たちは、みんな元気いっぱい、たがいに大声で呼び合っていたので、ついには、広々とした野原は陽気な音楽が満ちあふれて、さわやかな冬の空気まで、それを聞いて笑い出すほどだった。

「これは、ただ、むかしあったことの影にすぎない」

幽霊が言った。

「かれらは、わたしたちのことは少しも気がついていないのだ」

陽気な一行は、近づいてきた。かれらがそばに来ると、スクルージは、その一人ひとりを知っていて、名前を言った。

かれらを見て、スクルージが無性に喜んだのは、なぜだろうか？

かれらがそばを通ったとき、スクルージの冷たい目が輝き、胸が躍ったのは、なぜだろうか？かれらが十字路やわき道で別れて、めいめいの家に帰っていったとき、おたがいに「クリスマスおめでとう」と言いかわすのを聞いたとき、スクルージの胸が喜びでいっぱいになったのは、なぜだろうか？

スクールジにとって、めでたいクリスマスなんて、何だと言うのか？ クリスマスなんて、くそくらえ、だ！ これまで、クリスマスが何か役に立ったことがあるのか？

「学校は、まだすっかりからっぽにはなっていないよ」

幽霊が言った。

「友達に仲間はずれにされて、一人ぼっちの子どもがまだそこにいるからね」

スクールジは、それは知っていると云った。そして、すすり泣いた。

二人は、大道から離れて、よくおぼえている小道へはいつて行つた。やがて、くすんだ赤煉瓦の邸宅にさしかかった。屋根の上には風見鶏をのせた頂キューポラ塔がしつらえられ、その中に鐘が吊つてあつた。

それは、大きいけれども、身代の傾いた屋敷だつた。広い家事室は、もうほとんど使用されず、壁はじめじめして、苔が生え、窓はこわれ、門は朽ちていた。ニワトリが馬屋のなかでコッコツと鳴きながら、そりかえつて歩いてた。そして、馬車小屋や納屋は、草がぼうぼうとはびこつていた。

家のなかも同じように荒れ果てて、むかしの面影はなかった。わびしい玄関をはいって、たくさんある部屋のあけ放しになっているドアから、中をちらつと覗いてみても、どの部屋

にもろくな家具はなく、寒々として、だだっ広かった。

あたりには土くさい匂いが^{よど}凝んでおり、家はうすら寒く、がらんとしていて、どこことなく、ロウソクの光を頼りに朝早く起きたものの、ろくすっぽ食べるものはない、という感じと似通うところがあった。

二人は、幽霊とスクルージは、玄関の間を抜けて、家の奥のドアのところへ行つた。二人のまえでドアが開いて、殺風景な、陰気な部屋が見えた。中には質素な松材の腰かけと机が幾列も並んでいて、そのためになおさら殺風景に見えた。

そのうちのひとつの机に向かつて、一人の少年が、ひとりぼっちで、暖炉のかすかな火のそばで本を読んでいた。そこで、スクルージも、腰かけのひとつにすわって、忘れて久しい、むかしの自分の姿を見て泣いた。

家のなかに潜んでいるこだまも、羽目板の裏でチューチュー鳴きながら取っ組みあいしているネズミの音も、うっとりしい裏庭の半ば氷の解けた樋口からポタポタとしたり落ちる^{しずく}雫も、一本のわびしいポプラの葉の落ち尽くした大枝のあいだでそよ風の音も、からっぽの倉庫のドアがむなしく揺れうごく音も、いや、炉の中でパチッとはねる火も、どれひとつとして、スクルージの胸にふれて、心を和らげないものはなかったし、とめどもなく涙を

流させないものはなかった。

精霊は、スクルージの腕にさわって、読書に余念のない少年時代のかれの姿を指し示した。突然、異国の衣装をまとった、一人の男が窓の外に立った。驚くほどありありと、くつきりと見える。ベルトに斧を差し込んで、背中に薪をつみあげたロバのくつわを取っている。

「やあ、アリ・ババ（10）じゃないか！」

スクルージは、驚喜して叫んだ。

「正直者のアリ・ババ爺さんだ。そうだ、そうだ、知っているぞ！ ある年のクリスマスの季節に、あそこに一人ぼっちでいるあの子が、ここに一人置いてけぼりされたとき、はじめてほんとに来たんだ、まさしくあんなふうに。かわいそうな子！」

「それから、ヴァレンタイン（11）もいる」と
スクルージが言った。

「それから、乱暴者の弟のオルソンも。あれあれ、あそこに行く！ それから、眠っているあいだに、ズボン下のままで、ダマスカスの門のまえに置かれた何とかさん（12）。あなたには見えませんか？」

それから、魔神のために逆だちにされたサルタンの馬丁（13）。やあ、あそこで逆だちして

らあ！　ざまあ見る！　よかった、よかった。いったい、どんな権利があつて、あんなやつが姫君の婿になろうなんてするんだよ！」

スクルージが、笑うとも泣くともつかない、何とも奇妙な声で、こんなことならについて、大まじめでしゃべっているのを聞いたり、その高揚し、興奮した顔を見たりしたなら、シェイの商売仲間は、たしかに、びっくりしてしまつただろう。

「あそこにオウムがいる！」
と、スクルージは叫んだ。

「緑のからだに、黄色の尻尾で、頭のとつぺんから、レタスのようなものを生やしている。あそこにオウムがいる！　ロビンソン・クルーソーが、小船で島をひとめぐりして帰つてきたとき、かわいそうなロビン・クルーソーって呼びかけたのさ。へかわいそうなロビン・クルーソー、どこへ行つてたの、ロビン・クルーソー？（14）って。あの男は、夢を見てるんだと思つたが、そうじゃなかった。オウムだつたんだよね。」

「やあ、フライデー（15）が、小さな入江めがけて命からがら逃げていく！　おーい！　しつかり！　わーい！」

それから、スクルージは、いつもの性格とはまったく異なる早い気分の変りかたで、むか

しの自分をあわれんで、「かわいそうな子！」と言って、再び泣いた。

「ああ、残念だ」

スクルージは、袖口で涙をぬぐってから、ポケットに手を入れて、あたりを見まわしながら、言った。

「だが、もうおそい」

「どうしたのかね？」

精霊がたずねた。

「何でもありません」

スクルージは言った。

「何でもありません。昨夜、男の子がわたしの事務所の戸口へ来て、クリスマス・

キャロルを歌ってくれたんです。何かやればよかったなと思うんです。それだけですよ」

幽霊は、考え深そうに微笑して、片手を振りながら言った。

「さあ、もうひとつべつのクリスマスを見に行こう」

そのことばとともに、むかしのスクルージは、大きくなり、部屋はまえより少し暗く、もつと汚くなった。羽目板はちぢみ、窓はひび割れして、天井からしつこい破片がはがれ落

ち、木摺^{きずり}がむき出しになっている。

しかし、どうしてこんなことが生じたのか、読者と同様、スクルージにもわからなかった。ただ、かれにわかっていたのは、これはまったくまちがいのないことで、実際に起こったとおりであり、ほかの子どもたちが楽しい休暇で帰省したときに、自分は、またしても一人ぼっちで残されていた、ということだけだった。

少年は、こんどは本を読んでいないで、やけになったような様子で、行きつ戻りつしている。スクルージは、幽霊のほうを見て、悲しげに頭を振り、心配そうに戸口のほうへちらりちらりと視線を走らせた。

ドアが開いた。少年よりもずっと年下の女の子が矢のように飛んできて、両腕を少年の首に巻いて、キスしながら「大事な、大事なお兄ちゃん」と呼んだ。

「あたし、お迎えに来たのよ、大事なお兄ちゃん！」

と、女の子は言って、小さな手をたたき、からだをかがめて、笑った。

「おうちへ帰るのよ、おうちへ、おうちへ！」

「おうちへだって、ファン！」

少年は、聞きかえした。

「ええ、そうよ」

子どもは、歓喜にあふれて答えた。

「これからずうつとおうちよ。いつまでも、いつまでもおうちよ。お父さんは、まえよりも、ずつとやさしくなったから、おうちは天国みたいなもの。

こないだの晩、あたしが寝ようとしているときに、それはやさしくことばをかけてくれたので、あたし、こわくなくなつて、お兄ちゃんがおうちに帰ってきてもいいかって、もう一度訊いてみたの。

そうしたらね、うん、帰ってきてもいい、つて言ったの。そこで、あたしを馬車の乗せて、お兄ちゃんを迎えによこしたのよ。そして、お兄ちゃんもいよいよ大人になるんだわ！」

少女は、目を瞠^{みは}って言った。

「そして、もう二度とここへは帰って来ないのよ。それよりも、まず、クリスマスのあいだじゅう、あたしたちはいっしょにいて、世界じゅうでいちばん楽しいクリスマスを過ごすのよ！」

「おまえは、すっかり大人だね、かわいいファン！」

少年は叫んだ。

少女は、手をたたいて笑った。そして、兄の頭にさわろうとしたが、あまりにも小さくて届かないので、また笑った。そして爪先で立って、兄を抱きしめた。それから、子どもらしい熱心さで、兄を戸口のほうへ引っ張っていった。兄も、行くのはちつともいやではないので、妹について行った。

「ほら、スクルージ君のトランクをおろして来なさい！」

と恐ろしい声が玄關のところで叫んだ。そして、玄關に校長先生そのひとが現れて、丁寧ながらも恐ろしい目つきで、スクルージ君をねめつけて、かれと握手をしたので、少年はすっかり震えあがってしまった。

それから、校長は、スクルージ兄妹をまさしく古井戸のような、世にも寒々とした、最上等の応接間へ連れていった。壁に貼った地図も、窓ぎわに置かれた地球儀と天体儀も、寒さのために青白くなっていた。

この部屋で、校長は、奇妙に薄いブドウ酒のデカンターと奇妙に固いケーキのかたまりを出して、そういうご馳走を子どもたちに分けあたえた。同時に、痩せっぽちの小使を派遣して、御者にも「何か」一杯をすすめさせた。

ところが、御者は、旦那のお志はありがたいが、前にいただいたのと同じ口の酒でしたら、

もうけっこうです、と答えた。

スクルージ君のトランクは、そのときにはもう駅伝馬車の上にしぼりつけてあったので、子どもたちは、それこそいそいそと校長に別れのあいさつをした。

そして、馬車に乗り込み、陽気に庭の馬車まわしを走らせていった。くるくる回る車輪は、常磐木ときわの黒ずんだ葉から、霜や雪をしぶきのように飛び散らせた。

「いつも、風のそよぎにも堪えられないようなきやしやな子だったな」

幽霊が言った。

「だが、あれは心の広い子だった」

「そのとおりです」

スクルージは叫んだ。

「おっしゃるとおりです。そのことは否定しません、精霊さん。とんでもない！」

「大人になってから死んだんだね」

と、幽霊が言った。

「たしか、子どもがいただろう」

「一人ありました」

スクルージは答えた。

「そうだ」

幽霊は言った。

「おまえの甥さ！」

スクルージは、心中おだやかならぬ様子だった。そこで、手短に「そうです」と答えた。二人は、ついさつき学校をあとにしたばかりだったのに、いまや、ある都会の賑やかな大通りへ出ていた。そこでは、影法師のような通行人が往来し、影法師のような荷馬車や乗り合い馬車が道を争い、現実の都会と同じように競争と喧噪があつた。

店頭の飾りつけからも、ここもまたクリスマスの季節だということが、はっきりとわかつた。

幽霊は、とある問屋の戸口に足をとめて、スクルージにこの家を知っているか、とたずねた。

「知っているかですって！」

スクルージは言った。

「わたしは、ここで年期奉公していたんじゃないやありませんか？」

二人は、中へはいった。ウェールズ風のかつら（16）をつけ、あとニインチも背が高かったら、きつと天井に頭をぶっつけていただろうと思われるほどに高い机のうしろに腰かけている老紳士を見たとき、スクルージは、非常に興奮して叫んだ。

「おや、フェジウイグ老人じゃないか！ こりゃ、おったまげた！ フェジウイグが生き返っている！」

フェジウイグ老人は、ペンを置いて、柱時計を見あげた。針はちょうど七時を指している。老人は、両手をこすり、だぶだぶのチョッキを直した。足の爪先から頭のとっぺんにまで、体じゅうをゆすって、大笑いをした。それから、気もちのよい、なめらかな、豊かな、太い、陽気な声で呼び立てた。

「ヨウ、ホウ、そのの！ エベニーザー！ デイック！」

いまはいい若者になっているスクルージの前身が、同僚の奉公人を伴って、きびきびした足どりで、はいつて来た。

「デイック・ウイルキンズです、まちがいない！」
スクルージは、幽霊に言った。

「いやはや、まっただ。あそこにいる。わたしによくなつていました、あのデイック

は。かわいそうなディック！ なんともはや！」

「ヨウ、ホウ、おまえたちー」

フェジウイグが言った。

「今晚はもう仕事はおしまいだ。クリスマス・イブだ、ディック。クリスマスだよ、エベニーザー！ シャッターを閉めようぜ」

フェジウイグ老人は、パンパンと手をたたいて言った。

「それこそアツと言うまにな！」

この二人の若者がどんなにすばやくそれにとりかかったか、とても信じてはもらえない。シッターを通りへ持ち出す——一、二、三——きちんとはめこむ——四、五、六——かんぬきをさして留める——七、八、九——そして十二まで数えないうちに、競走馬のようにハーハー息をしながら戻ってきた。

「ほいきた！」

フェジウイグ老人は叫んで、驚くほど身軽に高いデスクから跳びおりた。

「片づけるんだ、おまえたち。そして、ここへたっぷりあき間を作るんだ！ ほいきた、ディック！ がんばれ、エベニーザー！」

片づけろだつて！ フェジウイグ老人がそばで見てるんだから、二人が片づけようとしな
いものはなかったし、片づけられないものも何ひとつなかった。たちまち、片づけは終わっ
た。

動かせるものはすべて、まるで公的生活から追放されたように、どこかへ追いやられとし
まった。床は掃いて、水をうち、ランプの芯は切りそろえられ、暖炉にはたっぷりと石炭が
継ぎたされた。

こうして、間屋は、冬の夜にはこれ以上望みようもないような、居ごこちのよい、暖かい、
からつたした、明るい舞踏室になった。

そこへ、楽譜を手にしたヴァイオリン弾きが、はいつて来た。あの高いデスクのところへ
上がっていつて、そこを奏楽席にして、まるで胃痛病みが五十人も唸りだしたかのように、
ギーギー、ゲーゲーと奏ではじめた。

次に、満面に笑みを浮かべて、フェジウイグ夫人がはいつて来た。

フェジウイグ家のにこやかな、かわいらしい三人の娘たちもはいつて来た。

この三人の娘たちに胸をこがしている、六人の若い崇拜者もはいつて来た。

この店に雇われている若い男女も、みんなはいつて来た。

女中が、いとこのパン職人を連れて、はいつて来た。

料理女が、兄さんの親友だという牛乳配達人を同伴して、はいつて来た、

主人からろくに食べ物をもたらっていないのではないかと疑われている、向かいの家の少年が、一軒おいて隣りの家の、女主人に耳を引つ張られたことが証明されている女中のうしろに隠れるようにして、はいつて来た。

次から次へと、みんなはいつて来た。恥ずかしそうなもの、ずうずうしいもの、しとやかなもの、ぎこちないもの、押すもの、引つ張るもの、みんな、なんとかかんとかして、はいつて来た。

みんな揃って、二十組が一度に踊りだした。左右の手を合わせながら半分までまわって、向きを変えて戻ってくる。部屋のまんなかまで行って、また戻ってくる。親密度のさまざまグルーブがぐるりぐるりとまわっている。

まえの先頭の組は、いつも曲がるところをまちがえている。新しい先頭の組は、そこまで行くとすぐ、またやり直す。ついには、全部が先頭の組になって、あとにつづくしんがりの組は、ひとつもないという始末！ こんな体たらくになったとき、フェジウイグ老人は、手をパンパンとたたいて、ダンスをやめさせ、「お見事！」と大声で言った。



ヴァイオリン弾きは、とくにそのために用意された黒ビールのジョッキのなかへ、ほてった顔を突っこんだ。けれども、ジョッキから顔を出すやいなや、休んでなんかいられるかとばかり、まだ踊り手が一人も出ていないのに、すぐさままた弾きはじめた。まるで、もう一人の弾き手がへたばって戸板に乘せられて家へ運ばれたあと、自分は新あらた手のヴァイオリン弾きで、まえのやつをこてんぱんに打ち負かすか、さもなければ、自分が倒れるまでだ、と覚悟しているようだった。

なおダンスがあった。それから、罰金遊びがあり、またまたダンスがあった。それから、ケーキやニーガス酒が出、冷やしたローストビーフの大きな塊が出、冷やしたゆで肉の大きな塊が出、それから、ミス・パイとビールもふんだんに出た。

けれども、なんとといっても、その夜の圧巻は、ローストとゆで肉のあとで、例のヴァイオリン弾きが（いやはや、狡猾なやつだった！——読者やわたしに言われなくても、ちゃんと自分の仕事をわきまえている、といった手合だった！）、「サー・ロジャー・ド・カヴァリー」の曲を弾き出したときだった。

すると、フェジウイグ老人が、フェジウイグ夫人の手をとって、踊りに出ていった。しかも、二人にお似合いの、結構むずかしい曲に合わせて、先頭の組を勤めようというのだ。二

十三、四組の踊り手がつづいた。いずれもあなどりがたい連中だった。踊りたがつて、歩くことなんかで考えない連中だった。

けれども、よしんば、かれらの数が二倍であっても——いや、四倍であっても、フェジウイグ老人は、ひけをとらなかつただろうし、フェジウイグ夫人にしたって同様だった。夫人はと言えば、彼女は、ことばのどの意味においても、フェジウイグ老人のパートナーたるにふさわしかった。これでも褒め足りないのなら、一段と高度の褒めことばを教えてもらいたい。そうすれば、使わしていただこう。

フェジウイグのふくらはぎからは、実際に光を発しているように思えた。ふくらはぎは、ダンスのどの部分でも月のように輝いていた。ある特定の瞬間に、ふくらはぎが次の瞬間どうなるかを予測するなんて、だれにもできなかつただろう。

そして、フェジウイグ夫妻が、進んだり後退したり、手を取り合ったり、お辞儀したり、ひざを少し曲げて会釈したり、くねくねと進んだり、つないだ手の下をくぐったり、またもとの場所へ戻ったりして、踊りをすつかりやり通したとき、フェジウイグは、「とんぼを切った」——じつに巧みにとんぼを切ったので、まるで両足でまばたきしたように見えた。そして、よろめきもせず、またしつかりと立った。

時計が十一時を打ったとき、この家庭舞踏会はお開きになった。フェジウイグ夫妻は、それぞれ戸口の両側に立って、帰っていく男女の一人びとりと握手し、クリスマスおめでどうと言った。

みんなが立ち去って、あとに二人の徒弟だけが残ると、夫妻は、二人にも同じように握手をし、クリスマスおめでどうと言った。こうして陽気なさんざめきも静まり、二人の若者は、裏の店の勘定台の下にある、自分たちのベッドにとり残された。

こうした時間のあいだじゆう、スクルージは、正気を失ったひとのようにふるまっていた。かれは、心も魂も、その光景に溶けこみ、むかしの自分といっしょになっていた。かれは、すべてのことを確認し、すべてのことを想い出し、すべてのことを楽しんだ。そして、この上もなく不思議な動揺を感じた。

いま、むかしの自分とディックの晴れやかな顔が見えなくなったとき、スクルージは、はじめて幽霊のことを想い出した。そして、幽霊が自分をまじまじと見つめているのに気がついていた。幽霊の頭上の明かりは煌々^{こうこう}と燃えている。

「小さなことさ」

幽霊が言った。

「こういう愚かな連中をあのように喜ばせるのは」

「小さなことですって！」

スクルージは、オウムがえしに言った。

精霊は、フェジウィグを心の底から褒めちぎっている二人の奉公人のことばを聴け、とスクルージに合図した。そして、スクルージが言われたとおりにすると、こう言った。

「だって、そうじゃないかね？ ああ、あの男は、ほんの数ポンド使っただけじゃないか。たぶん、三ポンドか、四ポンドだろう。それが、こんなに褒めそやすほど大したことなのかね？」

「そういうことじゃありませんよ」

スクルージは、そのことばに激昂して言った。そして、知らず識らずに、のちの自分ではなく、むかしの自分のようにしゃべっていた。

「そういうことじゃありませんよ、精霊さん。あのひとは、わたしたちを幸福にも不幸にもする力をもっておいでなんです。わたしたちの仕事を軽くも重くもし、喜びにも、労苦にもする力をもっておいでなんです。」

あのひとの力は、ことばや顔つきだけのもので、合計して数えあげることまでできないくらい、些細な、つまらない事柄のなかにあるんだといって、それが何だと言うんです？ ああ

ひとがあたえる幸福は、ひと財産投げ出したほど、大きいのですから」

精霊がチラと自分を見たのを感じて、スクルージは口をつぐんだ。

「どうしたのかね？」

幽霊がたずねた。

「べつに何でもありません」

スクルージが答えた。

「何かあるんじゃないかね？」

幽霊は言い張った。

「いえ」

スクルージは、言った。

「何も。ただ、ちようどいま、自分のところの事務員にひとことかふたこと、言ってる
ことができたらな、と思ったんです。それだけです」

スクルージがこの願いを口にしたとき、スクルージのむかしの姿は、ランプのねじをまわ
して暗くした。

そして、スクルージと幽霊は、再び肩を並べて戸外に立っていた。

「わたしの時間は少なくなつた」
精霊は言った。

「さあ、急ごう！」

これは、スクルージに向かって言ったのでも、また、スクルージの目には見えない何者かに向かつて言ったのでもないが、その効果はたちまち表れた。というのは、再びスクルージは、むかしの自分を見たのだ。

こんどは、まえよりも年を重ねていて、働き盛りの男だった。その顔は、後年のような、とげとげしく、頑固なしわはまだ刻まれていなかったけれども、心労と強欲の色を帯びはじめていた。目には、激しい、貪欲な、きよときよとした動きがあつて、それは、金銭欲がしつかりと根を張り、大きくなっていく幹の影がどこへ落ちるかを示していた。かれは、一人ではなく、喪服を着た、美しく、うら若い娘のかたわらに腰かけていた。娘の目には、涙がたまつて、過去のクリスマスの幽霊から射している光のなかで、キラキラと輝いた。

「大したことじゃないわ」

娘はおだやかに言った。

「あなたにとつては、ほんとに大したことじゃないわ。べつな偶像があたしに取つて代わ

ただけなんですもの。それで、あたしがあなたを励まし慰めてあげたいと思っていたように、もしその偶像が、これからさき、そういうことができるのだったら、あたしは何も嘆き悲しむ理由なんかないんだわ」

「どんな偶像がきみに取って代わったって言うんだい？」
スクルージは、問いかえした。

「黄金の偶像よ」

「これが、世間の公平なやりくちというものなんだね！」
スクルージは言った。

「貧乏ほど世間がつらくあたるものはない。それでいて、富の追求ほど、世間がきびしく非難すると公言しているものはないんだからね！」

「あなたは、世間というものをこわがりすぎてるわ」
娘はやさしく答えた。

「あなたのほかの希望は、世間の卑しい非難のとどかない身分になろうという希望のなかにすっかり呑みこまれてしまったのよ。あたしは、あなたの気高い向上心がひとつずつ失われていって、とうとう、〈金儲け〉という支配的な欲望があなたの心を奪ってしまうのを見て

きました。そうじゃなくって？」

「だから、どうだと言うんだい？」

スクルージはやりかえした。

「よしんば、ぼくがまえよりもはるかに賢くなったとして、それがどうだと言うんです？
きみに対するぼくの気もちは変わっていないよ」

娘は、首を振った。

「変わったと言うのかい？」

「あたしたちの約束は古いものだわ。その約束ができたのは、あたしたちが二人とも貧乏で、それに満足していて、やがて時がきて、あたしたちの辛抱強い努力で運を拓くひらことができる、と思っていたころだわ。あなたは、たしかに、変わってしまったのよ。約束したころは、あなたはまるでべつな人だったわ」

「ぼくは子どもだったんだよ」

スクルージは、じれったそうに言った。

「以前のあなたは、いまのあなたとは違っていたということ、ご自分でも感じているはずよ」

娘は言いかえした。

「あたしは変わってないわ。あたしたちの心がひとつだったときに幸福を約束してくれたものも、あたしたちの心が二つになったしまったいまでは、不幸に満ちているんだわ。このことをこれまで何度考えたか、どれほど身を切るように感じたか、いまは言わないわ。あたしがこのことを真剣に考えぬいた挙句、あなたを自由にさせてあげられる、ということだけでじゅうぶんでしょう」

「ぼくが自由にしてくれ、と言ったことがあるかい？」

「ことばではね。いいえ、一度もないわ」

「じゃあ、何で？」

「性格が変わり、心が変わり、生き方がまるでべつになり、人生の目的としてまるでべつな望みをいただくようになったことよ。あたしの愛をあなたから見て少しでも価値あるものしていたいっさいのことよ。もしも、あたしたちのあいだにこの約束がなかったとしたら」

娘はやさしいながらも、しっかりとスクールジを見つめて言った。

「言ってちょうだい、あなたはいま、あたしを探し出して、あたしの愛を求めようとするで

しようか？ ああ、決してしはしないわ！」

スクールジも、この想定の正しさを、しぶしぶ認めないわけにいかないらしかった。それでも、ひとあがきしながら、言った。

「きみは、そんなふうを考えてはいないんだ」

「あたしだって、喜んで違ったふうを考えたいわよ、できるものなら」
娘は答えた。

「神さまもご存じだわ！ あたしがこのような真実を学んでしまうと、それがどんなに強く、また、抵抗しがたいものであるか、あたしにはわかるの。」

かりに、あなたが、きょうか、あすか、あるいはきのう自由であつたとしても、持参金なしの娘を選ぶだろうなんて、いくらあたしでも信じられるでしょうか？ ——そういう娘とうちとけて話している最中でも、何もかも欲得づくで測ろうとするあなたなのに。

あるいは、もしいつとき、ご自分の唯一の建前たてまえにそむいて、その娘を選んだとしても、あとできつと後悔したり残念がったりするということを、あたしが知らないでしょうか？ あたしにはわかっているわ。

ですから、あたし、あなたを自由にしてさしあげます——心から喜んで、以前のあなたへ

の愛のために」

スクルージは、何か言おうとしたが、娘は顔をそむけまゝ、ことばを続けた。

「あなたも、たぶん、このことで苦しむかもしれません——過ぎ去った思い出のために、あなたにだって苦しんでほしいという気もちもないではないわ。

ほんの少しだけ時が経てば、あなたは、この思い出を喜んで頭から追い払ってしまうでしょう、何の得にもならない夢として、そんな夢からは醒めてよかったというふうに。あなたがお選びになった生活において、どうかお幸せでありますように！」

娘は、かれから離れていった。そして、二人は別れた。

「精霊さん！」

スクルージは言った。

「もうこれ以上見せないでください。家へ連れて帰ってください。わたしを苦しめて、どうしておもしろいのですか？」

「もうひとつ、幻影を見るのだ！」

幽霊は、声を張り上げて言った。

「もうたくさんです！」

スクルージは言った。

「もうたくさんです。そんな幻影を見たくありません。これ以上見せないでください！」
けれども、幽霊は、容赦なくスクルージを両腕の中に羽がいじめにして、無理に次に起こることを見せた。

二人は、べつな場所で、べつの光景のなかにいた。あまり広くもなく、きれいでもないが、いかにも居ごこちよさそうな部屋だった。冬の暖炉のそばに、美しい、若い娘が腰かけていた。その娘はまえの場面の娘に非常によく似ているので、その娘と向きあつて腰かけている、いまはみえよい主婦となつている彼女を見るまでは、同一人だとばかりスクルージは思いこんでいた。

この部屋のなかの騒々しきときたら、なんともすさまじいものだった。心が動揺しているスクルージには、とても数えきれないほどたくさんの子どもがいたからだ。しかも、あのワーズワスの詩の中の有名な牛たち（17）とは異なり、四十人の子どもらが一人のようにふるまうのではなくて、一人の子どもが四十人のようにふるまっているのだ。

その結果は、それはもう、信じられられないほどの騒々しさだった。しかし、だれもそれを気にかける者はいないらしかった。それどころか、母と娘は、心から笑つて、それを楽し

んでいた。

それから、娘のほうは、やがてその遊びに加わったが、たちまち、小さな山賊どもに情け
容赦なく身ぐるみはがれてしまった。

わたしが、あの山賊の一人になれるんだったら、何だってくれてやるのに！ もっとも、
あんな乱暴なこととはできっこなかっただろう。絶対に！ 全世界の富をやると言われたって、
あの三つ組みに編んだ髪の毛をめちやめちやにし、ばらばらにほどいてしまうなんてことは
しなかっただろう。

それに、あのかわいい小さな靴ときたら、神も照覧あれ！ 自分の命を救うためにだって、
もぎ取るなんてことはしなかっただろう。それから、あの大胆なちび連中がやったように、
戯れてあの娘の腰に腕を巻きついたりなんか、とてもできなかっただろう。そんなことをし
ようものなら、わたしの腕は、天罰として腰のまわりに根を生やしてしまつて、二度と離れ
なくなるものと覚悟しなければならなかっただろう。

とはいえ、白状すれば、わたしは、たまらなくあの唇に触れてみたかったのだ。彼女が唇
をひらくように、話しかけてみたかったのだ。あの伏し目がちの目のまつげを、顔を赤らめ
させずに、見つめてみたかったのだ。あの髪の毛をほどいて波打たせてみたかったのだ。あ

の髪の毛の一インチだって、値段がつかないくらい貴重な記念品になるだろう。

うそ偽りなく白状するが、要するに、わたしは、子どものように勝手気ままにふるまう自由をもちながら、しかも、その自由の価値がわかるほどの大人でありたかったのだ。

このとき、玄関のドアをノックする音が聞こえた。すると、子どもたちがたちまちドアのところへドヤドヤと突進したので、娘は、にこにこ笑いながら、ドレスをもみくちゃにされたまま、顔を紅潮させて、ばか騒ぎする一団のまんなかにとりかこまれたまま、ドアのところへ運ばれていって、父親を迎えるのにちょうど間に合った。

父親は、クリスマスのおもちやプレゼントをいっぱい担いだ男を従えていた。それから、歓声ともみあいと、無防備のポーターに向かっておこなわれた突撃ときたら！

椅子を梯子代わりにしてポーターによじ登って、ポケットに手突っこむやら、茶色の紙包みをひったくるやら、ネクタイにギューツとしがみつくやら、首っ玉にかじりつくやら、背中をポンポンたたたくやら、押さえきれない親愛の気もちから脚を蹴つとばすやら！

紙包みがひとつひとつ開けられるたびに、ワツとあがる驚きと喜びの喚声！ 赤んぼうが人形のフライパンを口へ入れようとした現場を見つけたとか、木皿にのりづけになっっているおもちやの七面鳥をどうも呑みこんだらしいという恐ろしい知らせ！ これが虚報だった

とわかったときに大安心！ 喜びと感謝と有頂天！ どれもこれもことばでは言い表しようがなかった！

子どもたちとその興奮した騒ぎは、だんだんと居間から去っていき、一度に一段ずつ階段を上がって行って、やっと家の最上階までたどり着いて、そこでベッドにつくと、ようやく静かになった、とこう言うだけでじゅうぶんである。

いまや、この家の主人が、娘を甘えかかるように自分のほうへもたれさせて、その娘の母親といっしょに自分の炉辺に腰をおろしたとき、スクルージは、まえよりもいっそう注意深くながめるのだった。

そして、自分にもあのように上品で、末たのもしい娘があつて、自分をお父さんと呼んでくれて、自分の生涯のうらぶれた冬に明るい春となってくれたかもしれないのだ、と思ったとき、スクルージの目はほんとうにうるんできた。

「ベル」

夫は、ほほえみを浮かべて妻のほうを見やった。

「きよの午後、おまえのむかしの友達に会ったよ」

「だれですか？」

「当ててごらん！」

「わかりっこありませんわ。あつ、わかった！」

女は、ひと息に言つて、夫といっしょに笑いながら。言いそえた。

「スクルージさんでしょ」

「いかにもスクルージさんだよ。あのひとの事務所の窓のまえを通つたんだ。窓は閉まつてなかつたし、中にロウソクがついてたので、あの人を見ないわけにはいかなかつたのさ。あのひとのパートナーは、もうすぐ死にそうだといううわさだ。そして、スクルージさんは、たった一人で部屋にすわっていたよ——まったくの一人ぼっちでね」

「精霊さん！」

スクルージは、おろおろした声で言つた。

「わたしをほかのところへ連れてってください」

「まえにも言つたとおり、これらはこれまで起こつたことの影なんだよ」

幽霊は言つた。

「これらがあのとおりだからといって、わたしを責めるんじゃない！」

「よそへ連れてってください」

スクルージは叫んだ。

「とても耐えられません」

スクルージは、幽霊のほうへ向き直った。すると、幽霊がかれをじつと見つめているのに気づいた。幽霊の顔には、それまでに見せてくれたさまざまの人間の顔の断片が奇妙な具合に混ざり合っていたので、スクルージは、幽霊につかみかかった。

「ほっといてくれ！ わたしを連れて戻ってくれ。もうわたしにつきまとわななくてくれ！」

この争いのあいだに——幽霊のほうでは何も目に見える抵抗をしないで、相手がいくら力を出しても平然としているのを争いと呼んでいいのであれば——スクルージは、幽霊の光がまばゆく煌々と燃えているのに気がついた。

そこで、もしかしてその光が、自分に影響をおよぼしてしているのではないか、とうすうす感じとって、例の消灯用の帽子をつかんで、やにわに幽霊の頭に押しつけた。

幽霊は、その下でへたへたとつぶれたので、全身が消灯器におおわれてしまった。しかし、スクルージがありったけの力をこめて帽子を押しつけても、光を隠すことはできなかつた。光は、その下から流れ出て、そこら一面に洪水のようにあふれた。

スクルージは、へとへとに疲れきって、どうにも抗しがたい眠気に襲われている自分を意



識した。さらに、自分の寢室のなかにいることにも気づいた。かれは、消灯帽に最後のひとひねりを加えたが、そこで、手がゆるんだ。それから、よろめくようにベッドにつくやいなや、深い眠りに落ちていった。

第三章 第二の精霊

ものすごく大きな躰いびきをかいている最中に目をさまして、頭をはつきりさせようとベッドの上で起き直ったので、スクルージは、いま鐘がまた一時を打つところだということを、ひとに言ってもらふ必要はなかった。

かれは、ジェーコブ・マーレイの仲介で自分のところへ派遣される第二の使者と会談するという特別の目的のために、あつらえ向きの時刻に目をさましたものだという気がした。

しかし、こんどの幽霊はどちらのカーテン引き開けるだろうか考えだすと、不快な寒気がしてきたのがわかったので、スクルージは、われとわが手で片っぱしからカーテンを開けてしまった。

それから、また横になって、ベッドの周囲を油断なく見張りはじめた。幽霊が出現したとたんに、自分から幽霊に挑んでやりたいと思ひ、不意をくらって、おたおたしたくなかったからだ。

自分は抜け目がないし、まずたいいていのことではびくともしないと鼻を高くしている、自由で気ままな紳士たちは、コイン投げ遊びから殺人にいたるまで、何でもやってみせると言つて、冒険をする能力の幅が広いことを吹聴するものである。

たしかに、この両極端のあいだには、相当広範な領域にわたる問題が含まれている。スクルージについては、これほど大胆なことは言わないけれども、かれは、かなり広い範囲の不思議な出現物を迎える心構えをしており、赤んぼうからサイにいたる範囲なら、何が出て来てもあまり驚かなかつただろうということを、読者に信じてくださるように、あえてお願いしておきたい。

さて、スクルージは、ほとんどどんなものにも対処する覚悟はできていたけれども、何も出てこないことには、まるで心構えができていなかった。そのため、鐘が一時を打つても、どんな姿も現れないとなると、発作を起こしたようにブルブル震えだした。

五分、十分、十五分と時がたつたが、何もかも現れない。そのあいだずっと、スクルージは、ベッドの上、燃えるような赤い光のどまん中に横たわっていた。その光は、時計が一時を報じたときに、ベッドの上へさつと射しこんできたのだ。

それは、ただの光にすぎないため、スクルージにとつては幽霊が十二人出たよりももつと

こわかった。それが何を意味するのか、何を狙っているのか、さっぱり見当がつかないからだ。

そして、自分はまさにこの瞬間、自分が自然発火（18）という興味ある事例になっているのに、それと知ってほっとするいとまもないのではないかと心配になるときもあった。

しかし、ついに、スクルージも考えはじめた——読者やわたしなら、はじめから考えついていたように。というのは、窮地に陥って、どうすればよいかを知っていて、それを実行できるひとというのは、いつも窮地の外にいる者に決まっているからだ——くりかえして言うが、ようやくスクルージも、この不気味な光源の秘密は隣りの部屋にあるのではないかと考えはじめた。光をたどっていくと、どうもその部屋から射し出してくるらしい。

頭のなかでこの考えがいつぱいになると、スクルージは、そっと起きあがって、スリッパを引きずりながら、ドアのところへ行った。

スクルージの手が錠にかかったとたん、聞きなれない声がかれの名を呼び、おはいりと言った。スクルージは、それに従った。

そこは、スクルージの部屋だった。それには一点の疑いもない。しかし、そこは、驚くべき変化をこうむっていた。壁や天井には生き生きとした緑葉が垂れさがって、こんもりした

森さながらで、そのあらゆる部分からつやつやした赤い実が煌めいている。

ヒイラギやヤドリギやツタのぱりぱりした葉っぱが、その光を反射して、まるで無数の小さい鏡がそこに散らばっているようだ。そして、ものすごく巨大な火がゴーゴーと音を立てて煙突をのぼっている。それは、スクルージの時代にも、また、マーレイの時代にも、過ぎ去った何十年もの冬の季節にも、その活気のない化石のような暖炉で見たこともないような火だった。

床の上には、玉座のようなかたちに盛りあげられて、七面鳥、鷺鳥、獵鳥、家禽、味つけた雄豚の肉、大きな骨付き肉、子豚、ソーセージの長い輪、ミンスパイ、プラムブディング、牡蠣の樽、赤く焼けた栗、桜色の頬をしたリンゴ、汁の多いオレンジ、おいしそうなナシ、ばかでかい飾り菓子、煮え立っているパンチ酒の鉢などが置かれ、そのパンチ酒の鉢からたちのぼるおいしそうな湯気で部屋がくもっている。

この部屋の長椅子の上に悠然とした態度で、見るからに気もちのよい、陽気な巨人がすわっていた。手には豊饒の角（19）にやや似たかたちをした燃えさかる松明をもっていたが、スクルージが戸口から中をうかがうようにしてはいっていくと、松明を高くかざして、スク

ルージに光を注いだ。

「おはいり！」

幽霊は大きな声で言った。

「おはいり！　そして、わしのことをもっとよく知るんだ、人間よ！」

スクルージは、おずおずとはいっていき、この精霊のまえに頭をたれた。かれは、これまでのように頑固なスクルージではなかった。そこで、幽霊の目は澄んでやさしかったけれど、目を合わせたくなかった。

「わしは現在のクリスマススの幽霊だ」

精霊は言った。

「わしをよく見てごらん！」

スクルージは、うやうやしく言われたとおりにした。幽霊は、白い毛皮でふち取りした、一枚のあつさりした濃い緑色のローブ、あるいはマントをまとっている。この衣装は、ごくゆるやかにからだにかけてあるだけなので、広い胸がむき出しになっていて、まるで技巧を凝らして保護したり隠したりするのを軽蔑している、といったふうだった。

その衣装のたつぷりしたひだの下からのぞいている足もまた、裸足はだしだった。そして、その



頭にかぶっているものと言え、ヒイラギの花冠だけで、それにはキラキラ輝く氷柱つららがちりばめられていた。

濃いトビ色の捲毛は長く、のびやかだった。にこやかな顔、キラキラ輝く目、広げた手、陽気な声、ゆったりとした物腰、楽しそうな様子と同様に、のびやかだった。

腰に巻いてあるベルトには、古風な刀の鞘を吊っていたが、中には刀身はなく、古ぼけた鞘もすっかり錆びついていた。

「おまえは、これまでわしのような者は見たことがないのだね！」
幽霊は大きな声で言った。

「はい、ございません」

スクルージは、それに答えた。

「わしの一族の若い連中といっしょに歩いたことはないのかね——つまり（わしは、ずいぶん若いものだから）、この近年に生まれたわしの兄貴たちのことだがね」
幻影は、ことばを続けた。

「そういうことはなかったと思います」
スクルージが言った。

「どうもなかったようです。ご兄弟は大勢おありなのですか、精霊さま？」

「千八百人以上いるね」

幽霊は言った。

「とてつもない大家族で、養っていくのがさぞ大変でしょうな」

スクルージは、つぶやいた。

現在のクリスマスの幽霊は、立ちあがった。

「精霊さま」

スクルージは従順に言った。

「どこへなりとお好きなおところへお連れください。昨夜は、強制されて出歩きましたが、そのとき学んだ教訓は、いまでも心の中で生きています。今夜も、何か教えてくださるのですら、それから得るところがあるようにしてください」

「わしのローブに手をふれなさい！」

スクルージは、言われたとおりにし、ローブをしつかりとつかんだ。

たちまち、ヒイラギ、ヤドリギ、赤い木の実、ツタ、七面鳥、鶯鳥、獵鳥、家禽、味つけした雄豚の肉、肉、子豚、ソーセージ、パイ、プディング、果物、パンチ酒などが、残らず

消えてしまった。

同様に、部屋も、火も、赤々とした光も、夜の時間も消え失せて、二人は、クリスマスの朝の都会の通りに立っていた。街頭では（寒さがきびしいので）、ひとびとは、荒っぽいながらも、活発な、なかなか快い音を立てながら、自分たちの住まいのまえの舗道や、家の屋根の上から雪をかきおとしていた。そして、雪が屋根の上から下の道路にドサツと落ちてきて砕けて、ちよつとした吹雪のように飛び散るのを見て、男の子らは夢中になってはしゃいでいた。

屋根の上に白いシーツのようになめらかに積もっている雪と、いくぶんうす汚れている地面の雪と対照して、家々の正面はずいぶん黒ずんで見え、窓はいつそう黒ずんで見えた。

地上の雪は、荷車や荷馬車の重い車輪に掘り返されて深いわだちになっている。大きな通りが分岐しているところでは、わだちは何度も何度も交差しあつて、厚い、黄色い泥と氷の張った水のなかで、跡もたどりがたいような、入りくんだ水路になっている。

空は、どんよりと曇つて、いちばん短い通りでも、半ば溶け、半ば凍っている黒ずんだ霧がびっしりとたれこめている。霧の分子のうちの重いものは、すすけた粒子の雨となつて落ちてきた。まるで英国じゅうの煙突という煙突が申し合わせて、一斉に火をもやして、思う

存分、どんどん煙を吐き出しているかのようだ。

こんな天候にも、この街まちにも、これといって気を引き立てるようなものは何もなかった。それでいて、あたり一帯には、どんなに晴れ渡った夏の空気とどんなに明るい夏の太陽が、いくら力んでも追い散らせないほどの、陽気な雰囲気がみなぎっていた。　　というの、屋根の上でシャベルで雪かきしている連中が、陽気に浮かれさわいで、手すりからたがいに声をかけあつたり、ときどき、ふざけて雪つぶてぶつけあつて——これは、多くの冗談口よりもはるかにたちのよい飛道具なのだ——それがうまく当たったと言つて大笑いをし、当たらなかつたと言つては、やはり大笑いをしていたからだ。

鳥屋の店は、まだ半分ひらいていたし、果物屋の店は、得意の絶頂で、燦然と輝いていた。そこには、陽気な老紳士のチョッキのような、大きな、丸い、太鼓腹の栗を盛ったかごがいくつもあつて、戸口にだらりと寄りかかつたり、太りすぎて卒中を起こしでもしたように、通りへ転がり出たりしていた。

血色のよい、茶色の顔をした、幅広の帯をしめた、スペイン産のタマネギがあつて、スペインの修道僧のように、でっぷりしたからだをピカピカさせながら、通りすがりの娘らに、棚の上から、みだらな、いたずらっぽい流し目を送つたり、つるしたヤドリギを神妙にちら

ちから見あげたりしていた。

ナシやリンゴがピラミッド型に積みあげられて、華やかに輝いていた。ブドウの房があつて、店主の情け深さから、通りすがりの人びとが無料でよだれをたらすように、わざと目につくフックからぶら下げられていた。

また、苔のついた、茶色のハシバミのナツツが山と積んであつて、その香しいにおいで、森のなかの古い散歩道や、枯葉のなかを睡かかとまでまでうずめながら、足を引きずって歩いた楽しい経験を思い起こさせていた。

ずんぐりして浅黒いノーフォーク・リンゴがあつて、オレンジやレモンの黄色を引き立たせながら、汁の多い、引きしまったからだで、どうか紙袋に入れて家へお持ち帰りのうえ、夕食後に召しあがってください、としきりに懇願していた。

こうした粒よりの果物のあいだに、金魚・銀魚を入れた鉢が飾つてあつたが、こんな生き物でさえ、鈍感で血のめぐりの悪いやからの一員でありながら、何事か起こっているということを知っているらしく、自分たちの小さな世界のなかを、一匹残らず、ゆっくりした、情熱のない興奮で、口をパクパクさせながら泳ぎまわっていた。

食料品店！ おお、食料品店！ シャッターをたぶん二枚か、一枚あけてあるだけで、ほ

とんど閉まっている。しかし、そういう隙間からでも、こんなにいるいろの商品がのぞけるのだ！

天秤の皿がカウンターの上にながたってきて、ガチャンと陽気な音を立てるばかりでもないし、麻ひもがローラーから威勢よくクルクルほどけるばかりでも、缶が手品のようにカランカラン上下に踊っているばかりでも、茶とコーヒートの混ざりあつた香が心地よく鼻に匂うばかりでも、レーズンがとでもたくさんあつて、極上品で、アーモンドがすごく真っ白で、肉桂の棒が長くてまっすぐで、その他のスパイスもとても香かぐわしく、砂糖づけの果物が溶かした砂糖をまぶして固めてあるのをながめたなら、どんなに冷淡なひとでもめまいがして、おしまいには怒りっぽくなってくるくらいだったばかりでさえない。

また、イチジクが汁が多くてやわらかいだけでもないし、フランス・プラムがごてごて飾つた箱のなかから控えめの酸味をたたえて顔を赤らめているだけでも、あらゆるものがおいしそうで、クリスマスの装いを凝らしてただけでもない。

それだけではなくて、客たちが、みんなこの日の楽しい期待に、せかせかと急ぎ、胸をおくわくさせているので、入り口のところでは鉢合わせをしたり、柳の枝で編んだ買物籠を乱暴に押しつぶしたり、買物をカウンターに置き忘れたり、それを取りに駆け戻ったり、似たよ

うな失敗を、この上もなく上機嫌で何百となくやらかしているからでもあった。

一方、食料品店の主人や店員たちは、いかにも気さくで、はつらつとしているので、背中でエプロンを留めてある、磨きあげたハート型の金具は、自分を世間のひとびとに見てもらい、また、望みとあれば、クリスマスのコクマルガラスにつつかせてもいい、と外側につけたかれら自身の心臓だ（20）と言わんばかりだった。

しかし、まもなく教会の尖塔が善男善女を残らず教会や礼拝堂に呼び寄せたので、みんなは、晴着に着かざり、とっておきの晴れやかな顔で、そろそろと群がって通りへ出てきた。

それと同時に、何十という裏通りや路地や名もない町かどから無数のひとびとが現れて、ご馳走の材料をパン屋の店へ運んでいった（21）。

こういう貧しいひとびとがお祭り騒ぎをしているのを見て、精霊は、非常に興味をおぼえたらしく、スクルージをわきに從えて、パン屋の入り口に立って、ご馳走を運ぶひとびとそばを通るとき、その覆いをとって、ご馳走の上に自分の松明たいまつから香を振りかけてやるのだった。

それは、非常に珍しい松明だった。なぜなら、一度か二度、ご馳走を運んできたひとびと同士が押し合いへし合いして、荒っぽいことばのやりとりが始まったとき、精霊が松明から水を二、三滴そそいでやっただけで、たちまち、もとのように上機嫌になったからだ。かれ

らは、クリスマスの当日にけんかをするなんて恥ずかしいことだ、と言ったのだ。そのとおりだ！ まったくもって、そのとおりだ！

やがて、鐘は鳴りやみ、パン屋は店をしめた。だが、どこのパン屋でもオーブンの上の雪が解けてまだらに濡れたところに⁽²²⁾、こういうすべてのご馳走やその調理の進行していく様子が、ほのかにうかがえて楽しかった。そこでは、舗道までも湯気を出し、まるで石が料理されているかのようにだった。

「あなたの松明からお振りかけになるものには、特別の香味がついているんでございますか？」

スクルージはたずねた。

「そうだよ。わし自身の香味だ」

「それは、きょうのどんなご馳走にも合うのでしょうか？」

「やさしい心で出されたご馳走なら、どれにでも合うよ。ことに、貧しいご馳走にはいちばんよく合うね」

「どうして貧しいご馳走には、ことに利くんでございますか？」

「そういうご馳走にはいちばんこれが必要だからさ」

「精霊さま」

スクルージは、しばらく考えていたあとで言った。

「わたしどもをとりまく多くの世界のなかのあらゆる存在のうちでも、よりによってあなたのようなお方が、どうして、このひとたちの無邪気に楽しむ機会を奪おうとなさるのか、わたしは不審でなりません」

「わし、がだつて！」

精霊が叫んだ。

「あなたは、こういうひとびとが七日目ごとにご馳走を食べる機会を奪おうとしていらつしやるでしょう。こういうひとびとがご馳走らしいものを食べられるのは、この七日目以外にはないというのですよ（23）」

スクルージは言った。

「そうじゃありませんか？」

「わし、がだつて！」

精霊が叫んだ。

「あなたは、こういう店を七日目ごとに閉めさせようとなさっているじゃありませんか？」

スクールジが言った」

「だから同じことになるわけですよ」

「わし、がそうしようとしているって！」

精霊が語気を強めて言った。

「まちがっていたらお許しください。そういうことがあなたのお名前でなされてきたのですよ、少なくとも、あなたの一族のお名前ですね」

スクールジが言った。

「おまえたちのこの地上にはね」

精霊はやりかえした。

「わたしたちを知っていると称して、欲情、傲慢、悪意、憎しみ、ねたみ、頑迷、自己本位の行為をわしらの名においておこなっている者がいる。しかし、そういう連中は、わしらにとっても、わしらの親類縁者にとっても、見も知らぬ連中なのだよ。まるでこの世に存在したこともないようにな。」

そのことをよくおぼえておいて、その者たちの所業については、その者たちを責めて、わしらを責めるんじゃない」

スクルージは、そうしますと約束した。それから、二人は、いままでどおり姿を隠したまま、先へすすみ、街の郊外へはいつていつた。幽霊のいちじるしい特徴（それは、すでにパン屋の店でスクルージも気づいていた）は、でかい体軀にもかかわらず、どんな場所にもやすやすと身を入れることができたし、また、低い屋根の下でも、この上もなく天井の高い大広間にいるときと同様に、優雅に、いかにも超自然の存在らしく立っていることだった。

そして、精霊がスクルージを案内して、まっすぐにスクルージの事務員の家に向かったのは、もしかすると、自分のこの不思議な力を見せびらかすのが、この善良な精霊には楽しかったためか、または、自分の親切で、寛大な、温かい性質と、貧しいひとびとすべてに寄せる同情のためかもしれない。

というのは、そこへ精霊は行ったのだ。スクルージを自分のローブにつかまらせたまた、連れていったのだ。そして、入口の敷居のところで、精霊は、にっこり笑って立ちどまると、松明から水を振りまいて、ボブ・クラチットの住まいを祝福した。

そのことを考えてみてほしい！ ボブ自身は、一週間にたった十五ボブ（²⁴）しかもらつていなかった——かれは、毎土曜日に自分と同じ名前のコインを十五枚かせぐだけだった——それなのに、現在のクリスマススの幽霊は、ボブの四部屋の家を祝福したのだ！

そのとき、クラチットの妻のクラチット夫人が、着飾って、といつても二度も裏返して仕立て直したガウンをまとい、ただリボンだけは華やかにして（リボンは安くて、六ペンスにしては見覚えがよいのだ）、すつくと立ちあがった。

そして、これまたリボンで華やかな、二番目の娘のベリンダ・クラチットに手伝わせて、テールブルクロスをひろげた。一方、ピーター・クラチット君は、ポテトのソースパンにフォークを突っこんだ。そして、とてつもなく大きなワイシャツのカラーの端を口にくわえながら（このワイシャツは、この日を記念して後継ぎ息子にあたえたボブの私有財産だった）、自分がこんなりゆうとした装いをしたのがうれしくてうれしくて、早く社交人が集まる公園へ行って、自分のいでたちを見せたくてたまらなかつた。

そこへ、二人の小クラチットたち、男の子と女の子が、外からバタバタ駆けこんできて、パン屋のところで鶯鳥の焼けるにおいを嗅いできたけれど、あれはうちのだったよ、とキヤアキヤアわめきたてた。そして、豪勢なセージと玉ねぎの詰め物のことを考えていい気もちになって、この二人の小クラチットたちは、テールブルのまわりを跳ねまわりながら、口をきわめてピーター・クラチット君をほめそやした。

一方、ピーター君は、（カラーのせいで息もつまりそうだったが、得意がる様子もなく）

火を吹きたてたので、なかなか煮えなかつたポテトもブクブク煮え立ち、早くとり出して皮をむいてください、とソースパンの蓋ふたをカタカタたたいた。

「いったい、おまえたちの大事なお父さんはどうしたんだろうね？」
クラチット夫人が言った。

「それから、おまえたちの弟のちっちゃいタイムもさ！ それに、マーサも去年のクリスマスよりも三十分もおそいようだよ！」

「ただいま、マーサよ、母さん！」

そう言いながら、一人の娘が現れた。

「ただいま、マーサよ、母さん！」

二人の小クラチットがわめいた。

「ばんざーい！ とつても、すてきな鷺鳥があるんだよ、マーサ！」

「おやまあ、なんてまあ、おそかつたじゃないか、マーサ！」

クラチット夫人は、そう言いながら、何度も娘にキスして、しきりに世話をやきたがって、シヨールをとつたり、ボンネットを脱がせてやつたりした。

「きのうは、ゆうべじゆうに仕上げなくちゃならない仕事がたくさんあったの」

娘は答えた。

「それで、お掃除がけさになってしまったのよ、母さん」

「そうかい！ もう帰って来たんだから、どうでもいいよ」

クラチット夫人が言った。

「暖炉のまえにすわって、暖ったまるといいよ、マーサ、可愛いそうに！」

「だめ、だめ。父さんが帰ってきたよ！」

どんなどころにも、たちまちあらわれる二人の小クラチットが叫んだ。

「隠れるんだよ、マーサ、隠れるんだよ！」

そこで、マーサは、隠れた。そこへ、父親の小男のボブが、房を除いて少なくとも三フィートはあると思われる毛糸のえりまきをからだのまえにブラブラさせながら、はいってきた。擦り切れた服は、せめてクリスマスにふさわしいように、ちゃんとかがって繕い、ブラシを掛けてあった。

そして、ちっちゃいティムを肩車にのせていた。かわいそうなちっちゃいティム！ かれは小さな松葉杖をかかえ、両足は鉄の枠でささえてあった！

「おや、うちのマーサはどこにいるんだい？」

ボブ・クラチットは叫んで、あたりを見まわした。

「まだ帰っていませんよ」

クラチット夫人が言った。

「まだ帰っていないって？」

それまで張り切っていたボブは、急にがっかりして言った。かれは、教会から戻ってくる途中ずっと、ちっちゃいタイムの競走馬になって、ピョンピョン跳ねながら帰って来たのだ。た。

「クリスマスだというのに、まだ帰って来ていないって！」

マーサは、たとえ冗談にしろ、父親が失望するのを見たくなかった。そこで、少し早すぎたけれども、押入の戸の蔭から出てきて、父親の腕に飛びこんだ。一方、小クラチットどもは、ちっちゃいタイムをせきたてて、洗濯場のなかへ運んでいった。銅の大釜のなかでプディングが歌っているのを聞かせてやろうという算段である。

「それで、かわいいタイムはいい子にしましたか？」

クラチット夫人は、ボブがまんまとだまされたのをからかい、ボブが心ゆくまで娘を抱きしめたとき、こうたずねた。

「申しぶんなしに行儀がよかったよ」

ボブが言った。

「いや、それ以上だった。どういうものか、あの子は一人ぼっちですわっていることが多
いもんだから、いやに考え深くなっちゃってね。それはもう聞いたこともないような奇妙な
ことを考えているんだよ。帰り道でね、こう言うのさ——教会でみんながぼくのことを見て
くれたらいいなあと思ったよ、だって、ぼくは足が悪いよね。だから、クリスマスの日に、
足の不自由な乞食を歩くようにし、目の見えないひとを見えるようになさったのは、だれだ
ったかを思い出したら、あのひとたちもいい気もちがするかもしれないからね、って」

この話をみんなにしたとき、ボブの声は震えがちだったが、ちっちゃいティムもだんだん
丈夫で元気になってきた、と言ったときには、いっそう震えた。

ティムの小さな松葉杖がカタカタと床に聞こえ、次のことばがまだ言い出されないうちに、
ちっちゃいティムは戻って、弟と妹に付きそわれて、暖炉のそばの自分のスツールに腰かけ
た。

ボブは、袖口をまくり上げて——かわいそうに、その袖がそれ以上にみすぼらしくなると
でも思っているかのように——ジンとレモンを混ぜ合わせた、何やら熱い飲物をジョッキの

中で調合し、ぐるぐるかきまわして、それがグツグツ煮えるように暖炉の脇だなにのせた。

そのあいだ、ピーター君と、かの神出鬼没の二人の小クラチットたちは、鷺鳥をとりに行つて、やがて、意気揚々と行列を組んで帰つてきた。

それから、それはもう大変な騒ぎが起こつたので、鷺鳥こそ鳥のなかでもっとも珍しいもの、黒い白鳥でさえ、これと比べれば平凡至極のしろものとなつてしまふような、羽の生えた珍品なのだ、と思えたくらいだった——事実、この家では鷺鳥はそれに近いものだったのだ。クラチット夫人は、肉汁（前もつて小さなシチュー鍋に用意してあつた）をシューシューというくらい熱くした。ピーター君は、信じがたいほど勢いよく、ポテトをつきつぶした。ベリンダ嬢は、リンゴソースに砂糖を入れて甘くした。マーサは、温ためた皿をきれに拭いた。ボブは、ちっちゃいティムを食卓の小さな隅に連れていつて、自分の隣りにすわらせた。二人の小クラチットは、みんなのために椅子をならべた。もちろん自分たちのも忘れなかつた。それから、自分たちの席について見張りをしながら、口にスプーンをおしこんだ。自分たちの分をよそつてもらふ順番がこないうちに、鷺鳥をちようだい、とわめいたりしては大変だと思つたのだ。

とうとう、お皿がならべられ、食前の祈りが唱えられた。そのあと、クラチット夫人がゆ

つくりと肉切り庖丁をながめわたしてから、いざ、鷺鳥の胸に突きさそうとかまえたとき、一同は固唾をのんで静まりかえった。

しかし、いよいよ突き刺して、待ちに待った詰めものがどつとあふれ出たとき、食卓のまわりから、一斉に歓喜のささやき声があがった。ちっちゃいティムでさえ、二人の小クラチットに刺激されて、ナイフの柄でテーブルを叩きながら、弱々しい声で「ばんざーい」と叫んだものだ！

こんな鷺鳥は、またとなかった。このような鷺鳥が料理されたためしがあつたなんて、とても信じられない、とボブは言った。そのやわらかさ、香りのよさ、大きいこと、値段の安いこと、それを一同口をそろえてほめたたえた。

リンゴソースとマッシュポテトをそれに添えれば、家族全体にじゅうぶんなご馳走だった。事実、クラチット夫人が大変うれしそうに（皿に残った小さなひとかけらの骨を見ながら）言ったとおり、とうとう全部は食べきれなかったのだ！

それでも、だれもかれも、たらふく食べた。とくに一番末っ子のクラチットたちは、セージと玉ネギの詰めもののなかに眉毛までどっぷりつかってしまふほどだった！

しかし、いまやベリンダ嬢がお皿をとりかえたので、クラチット夫人は、プディングを釜

から取り出して運んでくるために、一人で部屋を出ていった——あまりにも不安なので、だれにも見られたくなかったのだ。

もしも、火がじゆうぶんに通っていなかったら！　もしも、取り出すときにこわれたら！　もしも、みんなが鷺鳥のことで浮かれているあいだに、だれかが裏庭の塀を乗りこえて、プディングを盗んでしまったいたら！　——それは、二人の小クラチットたちが知ったら真っ青になってしまうような想像だった！　ありとあらゆる恐ろしいことが想像されるのだった。

おやまあ！　大変な湯気だ！　プディングは、銅の大釜から取り出された。まるで洗濯日のような匂いだ！　それは、布巾のおいだ。料理店とケーキ店が隣りあわせて、そのまた隣りに洗濯屋がならんでいるような匂い！　それがプディングだった！　一分とたたないうちに、クラチット夫人は、プディングをささげもって——頬をほてらせ、誇らしげにこにこしながら——はいつてきた。それは、レーズンがぼつぼつと点在する、砲弾のように固くてしつかりしたプディングで、四分の一パイントの半分の、そのまた半分のブランドーに点火した青い炎を揺らめかせ、てっぺんにはクリスマススのヒイラギの葉が突きさしてある。

おお、すばらしいプディング！　ボブ・クラチットは、これは結婚以来、クラチット夫人

がなしとげた最大の成功だと思う、と言った。しかも、落ちつき払って言った。クラチット夫人は、心の重荷がやっとおりの気がする。いまだから白状するが、じつは、粉の分量がどうかと不安に思っていたのだ、と打ち明けた。

みんながプディングについて何かしら述べた。だが、だれ一人として、このプディングは、こんな大家族には小さすぎる、などと言いましなかつたし、考えもしなかつた。そんなことをすれば、まったくの異端と言うべきだったろう。クラチット家のものなら、だれだって、そんなことをほのめかしただけで、顔を赤くしたことだろう。

ついに食事がすつかり終わり、テーブルクロスが片づけられ、暖炉もきれいに掃除をし、新たに火がたきつけられた。ジョッキの混合酒も味見され、最高と折り紙をつけられた。リングとみかんがテーブルに置かれ、シャベルいっぱい栗が火にのせられた。

それから、クラチット一家は揃って炉のまわりに、ボブのいわゆる円を描いて（じつは半円なのだが）、寄り集まった。

ボブのひじのところには、家にありつただけのガラス器が陳列してあった。すなわち、タンブラーが二つと、取っ手のないカスタード用コップ一つである。

けれども、これらの三つの器うつわは、黄金の酒杯にも劣らず、ジョッキからの熱い飲物を見

事にたたえたのだ。それから、ボブは、喜びに満ちた顔をして、それを配った。そのあいだ、火の上の置かれた栗は、ブスブス、パチパチとやかましい音をたてた。やがてボブが、乾杯を提案した。

「大事なみんな、クリスマスおめでとう！　神さまがわたしたちを祝福してくださいますように！」

そのことばを家族全体が唱和した。

「神さまがぼくたちみんなを祝福してくださいますように！」
ちっちゃいタイムが一番あとから、こう言った。

タイムは、父親にびったりと寄り添って、自分の小さなスツールに腰かけていた。ボブは、タイムのやせこけた小さな手を自分の手のなかににぎりしめていた。あたかも、この子が大好きなので、いつも自分のそばに置いておきたいと願いながら、この子がいつか自分から奪われるのではないかと恐れているようだった。

「精霊さま」

スクルージは、これまでに覚えたこともないような関心をしめして言った。

「ちっちゃいタイムは、生きていくのでしょうか、教えてください」

「わしにはあの貧しい炉辺に席がひとつあいているのと、使い手のない松葉杖が大事に保存されているのが見える。もしも、こういう幻影が未来の手で変えられないままなら、あの子は死ぬだろうよ」

「いえ、いえ」

スクルージが言った。

「ああ、いけません、親切な精霊さま！　どうかあの子は助かると言ってください」

「もしも、こういう幻影が未来の手で変えられないままなら、わしの一族のだけ一人として」

幽霊が言いかえた。

「あの子の姿をここに見いだすことはないだろうよ。だから、どうだと言うのだ？」

もしあの子が死にそうなら、死んで、余計な人口を減らしたほうがいい」

スクルージは、自分の言ったことばを精霊が引用するのを聞いて、うなだれて、後悔と悲しみに打ちのめされた。

「人間よ」

幽霊が言った。

「もしも、おまえの心が石でなく、人間ならば、余計とは何であるか、どこに余計なものがあるかはつきりと見きわめるまでは、あんな意地の悪い御託ごたくはつつしむことだ。おまえは、どんな人間を生かし、どんな人間を死なせるか、決めるつもりかね？　もしかすると、天の目から見れば、この貧しい男の子どもの何百万人よりも、おまえのほうが、一段と生きていく値うちもなければ、ふさわしくもないのかもしれぬのだぞ。

おお、神よ、葉っぱの上の虫けらが、地上にうごめく飢えた同胞ほろからのあいだに生命が多すぎるなどとはざくのを聞こうとは！」

スクールジは、幽霊の叱責のまえにうなだれて、ワナワナ震えながら地面に目を落とした。しかし、自分の名前が呼ばれるのを聞いて、急いで目をあげた。

「スクールジさん！」

ボブが言った。

「この宴うたげを出資者であるスクールジさんに乾杯します」

「この宴の出資者が聞いてあきれられるわ！」

クラチット夫人は、顔を真っ赤にして叫んだ。

「あのひとがここにいたらいいのに。そしたら、ご馳走代わりに、ずけずけ文句を言って

やるわ。どうか、そんなご馳走をもりもり食べようとすゝる食欲がありますように」

「ねえ、おまえ」

ボブが言った。

「子どもがいるんだよ！ クリスマスだよ」

「たしかに、クリスマスにちがいないわね」

夫人が言った。

「スクルージさんのような、あんないやらしい、しみったれた、因業な、無情なひとの健康を祝って乾杯するんだものね。あなたは、あのひとがどんな人間か知ってるでしょ、ロバート。あなたくらいよく知っているひとは、ほかにいないわ、かわいそうに！」

「ねえ、おまえ」

ボブは、穏やかに答えた。

「クリスマスだよ」

「あなたとクリスマスのために、あのひとの健康を祈って乾杯しましょうよ」

クラチット夫人は言った。

「あのひとのためではないですよ。あのひとが長生きなさいますように！ 楽しいクリスマス

マスを！ 幸福な新年を！ あのひとも、さぞかし楽しく、幸福になることでしようよ」
子どもたちも、母親にならって乾杯した。子どもたちがやったことで、真心のこもっていないのは、これがはじめてだった。

ちっちゃいティムは、いちばん最後に乾杯した。しかし、ティムはそんなことは少しも気にしていなかった。スクルージは、一家にとってへ人食い鬼だ。スクルージの名が出ただけで、一座に暗い影を投げかけた。たつぷり五分間というもの、その影は消えなかった。

影が消え去ったあとは、かれらは、不吉なスクルージの片がついたという安心だけで、まえの十倍も陽気になった。

ボブ・クラチットは、ピーター君の働き口がひとつ心あたりがあるが、もしそれにありついたら、毎週まる五リング六ペンスの収入になるだろうと一同に話した。二人の小クラチットたちは、ピーターが実務家になるということを考えて、大笑いに笑った。

そして、ピーター自身もワイシャツの高いカラーにはさまれて、考え込んだように暖炉の火を見つめていた。そのような、たまげるような収入を受けとるようになったら、どの特定の事業に投資したものか、と思索しているかようだった。

こんどは、婦人帽子屋の貧しい奉公人であるマーサが、店でどのような仕事をしなければ

ならないか、また、ぶつつづけに何時間働いているか、あすは休みで家にいられるので、あすの朝はゆつくりと寝坊をするつもりだ、などと話した。

それから、また、マーサは、二、三日まえに伯爵夫人と伯爵を見たけれど、伯爵は背たけが「ちようどピーターぐらい」だったわ、と言った。それを聞くと、ピーターは、ぐいとカラーを引っぱりあげたので、たとえ読者がそこに居合わせたところで、ピーターの頭を見ることはできなかつただろう。

このあいだもずっと、栗とジョッキは、みんなのあいだをぐるぐる回っていた。やがて、一同は、ちっちゃいタイムが歌を歌うのを聞いた、それは、雪のなかを旅をしていて道に迷った子どもの歌だったが、タイムは、もの悲しい、細い声をしていて、ほんとうに上手に歌った。

ここには、べつに大いに刮^か目^めするほどのものは何もなかった。かれらは、大して見ばえのいい家族ではなかったし、立派な身なりもしていないし、靴には水がしみ込まないどころではないし、持っている衣類も数少なく、しかも、ピーターは質屋の内情を知っていたかもしれないし、いや、たしかに知っていたらしかった。しかし、かれらは、幸せで、感謝に満ち、たがいには仲がよく、この瞬間に満足していた。

やがて一同の影がうすれ、別れぎわに精霊が松明から振りかけたキラキラするしずくのなかで、ひとときわ幸福そうに見えたとき、スクルージの視線は、最後までかれらに、とりわけ、ちっちゃいティムに注がれていた。

このころには、そろそろ暗くなって、雪がかなりひどく降っていた。スクルージと精霊が往来を進んでいくとき、台所や居間やあらゆる種類の部屋でゴーゴーと燃えさかる暖炉の火の輝かしさは、素晴らしかった。

こちらでは、チラチラする炎で、和気あいあいとした夕食の支度をしているのがわかった。火のまえでは熱い皿がとことん温められ、深紅のカーテンはいまにも引かれて、寒気と暗黒を閉め出すばかりになっている。

あちらでは、家じゅうの子どもがそろって雪のなかに駆け出し、結婚した姉や、兄弟や、いとこや、叔父や叔母を出迎えて、自分がまっ先にあいさつしようとしていた。

また、こちらでは、集まっている客たちが窓のブラインドに影を落としていた。あちらでは、美しい娘たちの一団が、いずれもフードをかぶり、毛皮のブーツをはいて、みんな一度にペチャクチャしゃべりしながら、軽やかな足どりで、どこか近所の家へ出かけていった。その家で、彼女たちが頬を上気させてはいってるところを見た独身の男こそ災いなるか

な！——彼女たちは、手練^{てれん}手管^{てくだ}を心得た魔女たちで、自分でもそれをちゃんと承知しているのだ！

けれども、こんなに大勢のひとが友達の集いに出かけていくのを見れば、せっかく、かれらが目ざす家へ着いても、どこの家も不在で、出迎えてくれるひとはだれもいないのではな
いか、と読者は心配されたかもしれない。ところが、そうではなくて、どの家も客を待ちも
うけており、暖炉には煙突の半ばに達するくらい薪^{まき}を積みあげていたのである。

精霊に祝福あれ、なんとまあ精霊は欣喜雀躍^{きんきじやくやく}した事か！ 精霊は、広い胸をむき出しに
し、大きな掌をひろげ、手のとどくあらゆるものに、明るい、害のない歓喜を惜しみなく振
りまきながら、ふわふわとただよって行った！

一人の点灯夫は、クリスマスの今晚をどこかで過ごすために正装して、薄暗い通りに点々
と灯りをつけながら前方を走っていたが、精霊がそばを通ったとき、大きな声をあげて笑っ
た。ただし、その点灯夫も、クリスマス以外の同伴者がいるなんて、まるつきり知らなかつ
たのだ！

そして、いまや、幽霊からはひとことの前触れもなく、二人は、荒涼とした、寂しい荒野
に立っていた。そこには、ごつごつとした、とてつもなく大きな石塊がそここころがっ

ていて、まるで巨人の埋葬地のようなだった。水はどこへでも好きなどころへ広がっていた、いや、もしもそれを閉じこめる霜柱がなかったなら、好きなように流れていたことだろう。

そして、生えているものと言えば、苔と、ハリエニシダと、はびこった雑草だけだった。

西の空に低く、落日が火のように赤い一条の光を残していて、その光がまるで不機嫌なひとの目のように、一瞬、ギリリと荒れた光景を照らし出したと思うと、眉をひそめながら、低く、低く、低く、沈んでいき、ついに、漆黒の夜の濃い闇のなかへと消えてしまった。

「ここはどこですか？」

スクルージはたずねた。

「坑夫の住んでいるところだよ。かれらは、大地の底で働いているのだ」

精霊が答えた。

「だが、かれらもわしのことを知っているのだよ。ごらん！」

一軒の小屋の窓から、光が射し出ている。二人は、速やかにそちらへ進んでいった。泥と石でかためた壁をつき抜けてはいつていくと、陽気な一団が燃えさかる火を囲んですわっているのが目にとまった。ひどく年とったおじいさんとおばあさんが、かれらの子どもたち、孫たち、曾孫たちといっしょにいて、みんな祭日の晴着で派手やかにめかしこんでいる。

おじいさんは、荒野を吹きわたる風にもすれば消されがちな声で、みんなにクリスマス
の歌を歌ってきかせていた。それは、おじいさんが少年のころに歌った、とても古い歌だっ
た。そして、ときどき、ほかの者もレフレーンの部分を合唱した。一同が声をあげて歌うた
びごとに、おじいさんもすっかり楽しげに大きな声になり、ほかの者が歌いやめるたびごと
に、おじいさんの元気も、また衰えるのだった。

幽霊は、ここにいつまでぐずぐずしていないで、スクルージに自分のローブにつかまっ
ているように命じて、荒野を飛び越えていった。急いでどこへ行くのか？ まさか海へではあ
るまい？ いや、海へだ。

スクルージがひどく驚いたことには、振り返ってみると、二人の背後に、陸地の最後であ
る、恐ろしげな岩の連なりが見えた。スクルージの耳は、万雷のような波の音で聞こえなく
なってしまった。海の波は、自らが穿^{うが}った、恐ろしい洞穴のあいだをうねり、とどろき、荒
れ狂って、ものすごい勢いで大地の根本^{ねもと}を削り取ろうとしていた。

岸から三マイルかそこいら離れたところに、一年じゅう荒波が激しくぶつかり、打ちつけ
ている、陰鬱な暗礁があつて、その上にひとつ、灯台がぼんと立っていた。

灯台の土台には海草の大きな塊がからみついている。そして、海草が海水から生まれるよ

うに、風から生まれたのではないかと思われるような海鳥が、かれらがすれすれに飛んでいる波が高く低くうねるように、灯台のまわりから舞いあがったり、舞いおりたりしていた。

しかし、こんなところでさえ、灯台守の男が二人、火を焚いていた。その火は、厚い石の壁にあけた風窓から、明るいひとすじの光を荒れ狂う海に投げていた。二人は、向かい合つて腰かけている荒けずりのテーブルごしに、荒れて硬くなった手を握りあわせ、金属製のカップでラム酒を飲んで、たがいに、クリスマスおめでとう、と言いかわした。

そして、そのうちの一人、年上で、まるで古い船の船首像のように、風雨で痛めつけられ、傷だらけになつた顔の男が、さながら疾風はやてのような、たくましい歌を歌いはじめた。

再び、精霊は、真っ黒な、大きくうねる海の上をさきへ急いだ——先へ、先へと飛んでいき——ついに、精霊のよれば、どこの岸辺からも遠く隔たつている一艘の船の上に、二人は降りた。

二人は、舵輪をにぎっている舵手や、船首に立っている見張り人や、当直の高級船員たちのそばに佇たまたんだ。それぞれの部署についているかれらは、黒い幽霊のような姿に見えた。しかし、かれらのだれもみな、クリスマスの歌をハミングしたり、クリスマスらしい思いにふけつたり、過ぎ去つたクリスマスのことを、望郷の思いをこめて、ひそやかに仲間に話し

たりしていた。

そして、船に乗っているすべてのひとは、起きている者も、眠っている者も、善人も悪人も、この日には一年じゅうのどの日よりも親切なことばをかけ合っていた。そして、少しづつ、クリスマスのお祝い気分にはたっていた。そして、遠くにいる愛するひとびとのことを思い出し、そのひとたちも自分のことを思い出して喜んでいてくれることを知っていた。

スクルージは、風の唸り声に耳をかたむけながら、死と同様な秘密である深さをもつ未知の深淵を越えて、寂しい暗闇のなかを飛んでいくのは、なんと厳肅なことだろうと考えていた。そのように考えこんでいたスクルージにとって、そのとき、ほがらかな笑い声が聞こえてきたのは、大きな驚きであった。

それよりも、もっと驚いたことには、その声がほかならぬ甥の声であり、自分は明るい、乾いた、光りかがやく部屋にいたのだった。そばには精霊がにこにこしながら立っており、その甥を満足そうに、愛想よくながめている。

「ハ！ ハ！」

スクルージの甥は笑った。

「ハ、ハ、ハ！」

とても見込みはなさそうだが、万一、読者がスクルージの甥以上に笑いにめぐまれたひとを存じなら、わたしに言えるのは、ただ、わたしもそのひとと知り合いになりたい、ということだけだ。そのひとを紹介していただきたい。そうしたら、進んで交際を求めらるう。

病氣や悲しみに伝染性がある一方、笑いと上機嫌くらいあらがいたい伝染力のあるものは世のなかにはないということは、物事が公平に、公明正大に、気高く調整されている証^{あかし}である。スクルージの甥が、こんなふうには、腹をかかえ、頭をころがして、途方もなく顔をくしゃくしゃにゆがめて笑ったとき、スクルージの義理の姪も、夫に負けずに心から笑いだした。そして、集まっている二人の友人たちも、少しも後れをとることなく、どつと笑い出した。

「ハ、ハ！ ハ、ハ、ハ、ハ！」

「あのひとはね、クリスマスなんてばかばかしいって言ったんだよ、まちがいなく！」
スクルージの甥が叫んだ。

「おまけに、そう信じてるんだよ！」

「なおさらひどいじゃないの、フレッド！」

スクルージの姪が憤然として言った。こういう女性たちに神さまの祝福がありますように。

彼女らは、何事も中途はんばにしておかない。いつも真剣なのである。

彼女は、とてもかわいらしかった。並はずれてかわいらしかった。えくぼのある、びっくりしたような、すてきな顔。赤くふっくらした小さな口は、キスされるためにつくられたかのようなだった——事実、そのとおりだった。

おとがいのまわりにはあらゆる種類のかわいい小さなくぼみがあり、笑うとひとつに解けあってしまう。それに、どんな小娘ももっていないような快活な目をしていた。要するに、彼女は「挑発的な」と呼びたくなるような女性だった。そのくせ、申しぶんない妻もあつた。ああ、まったく申しぶんなかった。

「あのひとはおかしな老人だよ」

スクルージの甥が言った。

「それが本当のところさ。そして、もつとあいそよくなれるはずなのに、そうしなんだな。でも、あのひとのよくないふるまいに対しては、おのずと罰をうけるわけだから、ぼくはあのひとのことをとやかく言うつもりはないよ」

「あのひとは、きつととてもお金もちなのね、フレッド」
スクルージの姪がほめかした。

「少なくとも、あなた、いつもあたしには、そうおっしゃっているわ」

「それがどうしたって言うんだい、おまえ」

スクルージの甥がいった。

「あのひとの財産は、あのひとにとって何の役にも立っちゃいないんだぜ。それでもって何か善いことをするわけじゃない。それでもって自分の暮らしを快適にするわけでもない。

あのひとは、それでもって、いつかぼくたちを、幸せにしてやろうなんて——ハ、ハ、ハ！——そう考える喜びさえもっていないんだからね」

「あんなひとはとても我慢がならないわ、あたし」

スクルージの姪が言った。スクルージの姪の妹たちをはじめ、ほかのご婦人がたも、おしなべて同じ意見だと言った。

「いや、ぼくはできるね」

スクルージの甥は言った。

「ぼくは、あのひとが気の毒なんだよ。たとえ怒ろうとしても、怒る気になれないね。あのひとの意地悪いむら気で、だれが迷惑するのかね？ いったって、あのひと自身じゃないか。いいかい、あのひとは、ぼくたちがきらいだ、と思いこんでしまつて、ここへ来て、い

っしよに食事をしようとしなない。その結果はどうだい？ 大したご馳走を食べそこなつたわけじゃないがね」

「ほんとの話、あのひと、とつてもすてきなご馳走を食べそこなつたと思うわ、あたし」
スクールジの姪がさえぎつた。ほかのだれも同じことを言つた。そして、かれらは、じゅうぶん、判定者の資格を備えていたことを認めなければならぬ。なぜなら、かれらは、ちょうどご馳走を食べおわつたところで、デザートを食卓にのせて、炉辺のまわり、ランプのそばに集まっていたのだから。

「そうか、そんならぼくもとてもうれしいよ」
スクールジの甥が言つた。

「なぜつて、ぼくは近ごろの若い主婦たちには大して信用をおいてないからね。きみはどう思うかね、トッパ―」

トッパ―は、明らかに、スクールジの姪の妹の一人に目をつけているらしかつた。というのは、独身者は、みじめな除^のけ者で、そういう問題については意見を述べる資格がない、と答えたからだつた。

これを聞くと、スクールジの姪の妹——バラをつけたほうではなく、レースの襟飾りをつ

けた、ぼっちゃりしたほうが——ぼっと赤くなつた。

「さあ、どんどん先をおっしゃいよ、フレッド」

姪は、手をたたきながら言った。

「このひと、言いかけたことを終わりまで言ったためしがないのよ。とつてもおかしなひとなの」

スクルージの甥は、またもや大笑いに笑つた。そして、その感染を防ぐことができなかったので——もつとも、ぼっちゃりした妹は、芳香酢をかいで懸命に感染を防ごうと努めたのだけれど——かれに倣つて一斉に笑いだした。

「ぼくはね、こう言おうとしていただけなんだ」

スクルージの甥が言った。

「あのひとがぼくらをきらつて、ぼくらといっしょに楽しく過ごそうとしない結果はだね、思うに、自分にとつて少しも害にならない、楽しい何時間かを損をすることになる、つてことさ。あのひとは、たしかに、あのかび黴くさい古ぼけた事務所や、あのほこりまみれの部屋で一人ぼっちで考え込んでいたんじゃ、とうてい見つからないような愉快な仲間を失っているんだよ。」

あのひとが好むと好まざるとにかかわらず、ぼくは毎年、あのひとと同じチャンスをあたるつもりだよ、だって、気の毒に思うもの。あのひとは、死ぬまでクリスマスのことを罵ののしるかもしれないが、でも、クリスマスのことを考えなおさずにはいられまいよ——ぼくはあのひとに挑戦してやるんだ——ぼくが毎年毎年、上機嫌であのひとのところへ行つて、ヘスクルージ伯父さん、ご機嫌いかがですか？〜つて言うのを見たらね。

もし、そのおかげで、あのひとがあの哀れな事務員に五十ポンドも遺してしてやろうという気もちにでもなれば、そいつはまんざらでもないよね。それに、きのうぼくは、あのひとの気もちをゆすぶつてやつたと思うんだ」

かれがスクルージの気もちをゆすぶつたと思うと、こんどは、一同が笑う番になった。しかし、甥は、心底気だてのよい男で、一同がとにかく笑ってさえいれば、何を笑おうと、あまり気にしなかつたので、みんながおもしろがって笑うのをけしかけるように、楽しそうに酒の瓶をまわした。

お茶のあと、一同は音楽をはじめた。かれらは、音楽好きな一家で、重唱や輪唱を歌うときには、たしかに、万事お手のものだった。ことにトツパーは、本職の歌手のようにバスで唸りとおし、しかも、額に太い血管を浮かせたり、力んで顔を真っ赤にしたりするようなこ

とは絶対なかった。

スクルージの姪は、ハーブを上手に弾いた。いろいろな曲を弾いたうちに、簡単な小曲（ごくつまらない、二分も練習すれば、口笛で吹けるくらいやつ）がひとつあったが、これは、過去のクリスマススの幽霊が見せてくれたように、スクルージを寄宿学校から連れ戻しにきた、あの女の子がよく歌っていた曲だった。

この曲の旋律が響いたとき、幽霊が見せてくれたすべての情景がスクルージの心によみがえってきた。スクルージの心は、ますます和らいできた。そして、この曲を何年もまえにたびたび聞くことができていたら、ジェーコブ・マーレイを埋葬した寺男の歎に頼らなくても（25）、自分自身の手で、自分自身の幸福のために、人の世の親切というものを培うことができたかもしれないと思うのだった。

しかし、一同は、ひと晩じゅう音楽ばかりやって過ごしたわけではなかった。しばらくすると、かれらは、罰金あそびをはじめた。なにしろ、ときには子どもになるのはよいことだし、それには、クリスマスをはじめられた偉大な神さまご自身が子どもであられたクリスマスほどふさわしい季節はないのである。

待った！ 最初にしたのは、目隠しあそびだった。もちろん、そうだった。そして、わた

しは、トッパーが本当に目が見えなかったなんて信じないと同様に、トッパーのブーツに目がついていたなどとも信じない。

わたしの考えでは、トッパーとスクルージの甥とのあいだでちゃんと話がついていて、現在のクリスマススの幽霊もそれを知っていたのだった。トッパーがレースの襟飾りをつけた、ぼっちゃりした妹のあとを追いかけていくやり方ときたら、まったく人間の信じやすさを愚弄するものだった。

炉ばたの火かき棒や石炭ばさみをひっくりかえしたり、椅子につまづいてころんだり、ピアノにゴツンと衝突したり、カーテンにからまって息が詰まりそうになったりしながら、彼女が行くところはどこへでも、トッパーも従^{したが}っていった。

トッパーは、いつでもぼっちゃりした妹がどこにいるかを知っていた。かれは、ほかの者はだれもつかまえようとしなかった。かりに、だれかがトッパーにわざとぶつかつたならば（中には、実際そうやった者もいたのだ）、かれもその者をつかまえようとするふりはするのだが（それは相手の知性に対する侮辱だっただろう）、すぐにまた脇へそれて、ぼっちゃりした妹の方角へ行ってしまうのだった。

ぼっちゃりした妹は、これって公平じゃないわ、と何度も声を張って叫んだが、まったく

そのとおりであった。しかし、ついにトッパーが彼女をつかまえたとき、彼女が絹の着物をさらさら言わせたり、すばやく身をひるがえして、かれのそばをすりぬけようとしたにもかかわらず、逃げ道のない片すみに彼女を追いつめてしまったとき、それからのトッパーのふるまいは、じつに怪しからぬものだった。

というのは、彼女かどうかわからないふりをし、彼女の頭飾りにさわったり、さらに、彼女であることを確かめるためには、指にはめた指輪や首にかけている鎖を押さえてみなければならぬようなふりをしたことは、下劣とも何とも言語道断のふるまいであった！

べつのひとが目隠し鬼になった際、二人は、カーテンの蔭でひそひそ内緒話をしていたが、そのとき、彼女がそのことをどう思ったか、をトッパーに話したのにちがいがなかった。

スクルージの姪は、目隠し遊びの仲間には加わらないで、居ごちのよい一隅に、大きな椅子と足台でゆったりとくつろいでいた。幽霊とスクルージは、そのすぐうしろにたたずんでいた。

しかし、姪は、罰金あそびには加わったし、アルファベットの文字を全部使って、「わたしは恋人を愛します」という愛の文句を見事に組み立てた²⁶。同様に「いつ、どこで、どうして」というあそびでも、姪はすばらしい腕を発揮した。そして、スクルージの甥がひそ

かに喜んだことには、彼女の妹たちをこてんぱんに負かしてしまった。トッパに言わせれば、妹たちもどうしてなかなか賢い少女たちなのだった。

そこには、老若あわせて二十人ぐらいのひとがいたかもしれないが、かれらはみんな遊びをやった。スクルージもやった。というのは、いまそこでおこなわれている遊技のおもしろさに引きこまれて、自分の声が進みの耳には聞こえないことも忘れて、ときどき、大きな声で自分の推量を口に出して言ったし、しかも、それが何度も当たったのだった。というのは、めどを通すときに絶対に糸が切れないという保証つきの、極上ホワイトチャペル針の一番鋭いやつだって、自分では鈍い人間だと思ひこんでいるスクルージほど鋭くはなかったからだ。

幽霊は、スクルージがこういう気分で見ているのを見て非常に喜んで、とても気に入ったようにかれをながめているので、スクルージは、お客が帰るまでここにいさせてください、と子どものようにせがんだ。しかし、それはできない、と精霊は言った。

「さあ、新しいゲームをはじめます」
スクルージは言った。

「もう三十分だけ、精霊さま、三十分だけ！」

それは、「イエス・アンド・ノー」というゲームで、スクルージの甥が頭のなかで何かを考え、それが何であるかをほかの者が当てなければならぬ、というものだった。みんながいろいろ質問すると、甥は当たっていればイエス、当たってなければノーとしか答えないのである。

一同は、活発な質問の砲火をあびせて、スクルージの甥が考えているのは動物、生きている動物、だいたいやな動物、野蛮な動物で、ときには唸ったり、ブーブー言ったりする。ときには話もする。ロンドンに住んでいて、街を歩きまわる。見世物にはされない、だれにも引きまわされたりはしない。動物園には住んでいないし、市場で屠殺とさつされるわけでもない。馬でも、ロバでも、雌牛でも、雄牛でも、虎でも、犬でも、ブタでも、猫でも、熊でもない。新しい質問をうけるたびに、この甥は、ワツと大声で笑いだし、何とも言いようもないほどおもしろがって、ソーファから立ちあがり、足踏みしなければならなかった。ついにぼつちやりした妹が、同じように笑いくずれながら、大声で言った。

「あたし、わかったわ！ 何だか知ってるわ、フレッド！ 何だか知ってるわ！」
「何だね？」

と、フレッドは叫んだ。

スクルージ伯父さんは、はたからは見えないものの、すごく陽気に浮き浮きしてきたので、もし幽霊が時間をあたえてくれたなら、自分のいることに気づかない一座のために、お返し
の乾杯をして、かれらの耳には聞こえないスピーチをして感謝したことだろう。

しかし、この場面全体は、スクルージの甥のことばが終わるか終わらないうちに消えてしま
まい、スクルージと幽霊は、またもや旅をつづけていた。

二人は、多くのものを見、遠くまで行き、数多くの家を訪れたが、いつでも幸福な結果に
終わった。精霊が病人のベッドのそばに立つと、病人は気分を引き立てられた。異国へ行け
ば、ひとびとは故郷を近くに感じた。生活難にあえぐひとびとのそばに立つと、かれらは希
望をふくらませて辛抱ぶよくなった。貧窮のそばへ行くと、それは裕福になった。

救貧院や病院や牢獄など、困窮のあらゆる隠れ家では、虚栄心の強い人間どもがはかない
権力を持^たんで(27)、扉を固くとぎして精霊に締め出しをくわせるようなことがなかったので、
幽霊は祝福をあたえ、スクルージに教訓をたれた。

ただの一夜であったとすれば、それは、長い一夜だった。だが、スクルージは、このこと
を疑っていた。なぜなら、何回ものクリスマス祭日が、二人で過ごした時間のなかに圧縮
されたのではないか、と思われたからだ。

また、不思議なことに、スクルージのほうは、外見が少しも変わらないままでいるのに、幽霊のほうは年をとってきた、明らかに年をとってきた。スクルージは、すでにこの変化に気づいていたが、決して口には出さなかった。

しかし、とうとう、子どもたちの十二日節の前夜のパーティーを出て、広々とした場所に立って精霊のほうを見たとき、精霊の髪が白くなっているのに気づいた。

「幽霊さまのご寿命は、そんなに短いのですか？」

スクルージがたずねた。

「この地上のわしの命はきわめて短い」

幽霊は答えた。

「今夜終わるのだ」

「今夜ですって？」

スクルージは叫んだ。

「今夜の真夜中だ。聴け！ その時が近づいてきている」

その時、鐘が十一時四十五分を報じていた。

「こんなことをお聞きして失礼でしたら、お許しください」

スクルージは、幽霊のローブをしげしげと見つめながら言った。

「何か妙なものが見えるのです、あなたのおからだ一部ではないものが、ローブの裾からとび出しているようですが、それは足ですか、それとも爪でしょうか？」

「爪かもしれないね。上に肉がついていないからね」

精霊は、悲しそうに答えた。

「ここをござらん」

ローブの折りたんだ部分から、幽霊は、二人の子どもをとり出した。みじめな、浅ましい、恐ろしい、ぞつとするような、悲惨な子どもたちだった。二人とも幽霊の足元にひざまずき、衣装の外側にしがみついた。

「おお、人間よ！ ここを見るがいい。この下をよく、よく見るがいい！」

幽霊は、声を強めて言った。

かれらは、男の子と女の子だった。黄色く、しなびて、ぼろをまとい、しかめ面をして、貧欲そうだった、それでいて、へりくだって、はいつくばっている。優雅な若さがかれらの顔だちをふっくらとふくらませ、生き生きとした血色で染めるはずのところを、老人の手のような、かさかさした、しなびた手が、かれらをつねり、ねじって、ズタズタに裂いたかの



ようだった。

天使が座を占めていてもいいところに、悪魔がひそんで、おどすような目つきでにらみつけているのだ。不思議な創造の業わざによって生み出されたありとあらゆる神秘なものを通して、人間がいかに変化し、墮落し、倒錯しても、この半分も恐ろしい、身の毛もよだつような怪物を見いだすことはできない。

スクルージは、ぞつとして、急にあとじさりした。こんなふうにも子どもを見せられたので、りっぱなお子さんですね、と言おうとしたが、そんなとんでもない大嘘の片棒をかつがされるのはごめんだとばかりに、ことばのほうに喉につまってしまった。

「精霊さま！ これは、あなたのお子さんですか？」

スクルージは、それ以上何も言えなかった。

「これは、人間の子だ」

幽霊は、子どもたちを見おろしながら言った。

「二人とも、自分たちの父親のもとから訴え出て、わしにしがみついているのだ。この男の子はへ無知で、この女の子はへ欠乏だ。この二人とその同類のすべてに用心するがいい。しかし、とりわけ、この男の子に用心するのだ。なぜなら、この子の額には、文字を削除し

ないかぎりには、〈破滅〉と書いてあるのが見えるからだ。それを否定するがいい！」

幽霊は、片手を街の方にさしのべながら叫んだ。

「それをおまえに教える者を誹謗するがいい。それをおまえの党派的な目的に取り入れて、さらに悪化させるがいい。そして、結果を待つがいい！」

「この子たちには逃れ場所も、救済の見込みもないのですか？」

スクルージは、叫んだ。

「監獄はないのかね？」

精霊は、スクルージ自身が使ったことばを使って、これを最後にかれに食ってかかった。

「救貧院はないのかね？」

鐘が十二時を打った。

スクルージは、まわりを見まわして幽霊の姿を捜したが、もう見えなかった。最後の鐘の余韻が鳴りやんだとき、ジェーコブ・マーレイ老人の予言を思い出したので、目を上げてみると、ゆるやかな衣ころもを身にまとい、頭巾をかぶった、おごそかな幽霊が霧のように、地面に沿ってこちらへ近づいてくるのが目にはいった。

第四章 最後の精霊

幽霊は、ゆっくりと、重々しく、黙々として近づいてきた。幽霊がそばに来たとき、スクルージは。腰を折ってひざまずいた。というのは、この精霊は、動いてくる空気のかなかにまで、陰鬱と神秘を振りまいているように思われたからだだった。

幽霊は、真つ黒な衣ころもに包まれていた。その衣が、幽霊の頭も、顔も、身体も覆い隠して、差しのべられた一方の手のほかは何も見えなかった。もしも、この手がなかったら、その姿を夜と見分けることも、そのまわりとりまいている暗闇と区別することも困難だったことだろう。

スクルージは、幽霊がかたわらに來たとき、背が高く、堂々としていること、そして、その神秘的な存在が自分の心を厳肅な怖れに満たすことを感じた。スクルージには、それ以上何もわからなかった。なぜなら、精霊は、口もきかなければ、身じろぎひとつしなかったからである。

「わたしは、未来のクリスマスの精霊のまえにいるのをごぞいまいしょうか？」

スクルージは言った。

精霊は、返事をしないで、片手で前方を指さした。

「あなたは、すでに起こったことでなく、これからの未来に起ころうとしていることから幻影をわたしに見せようとしているのでしょね？」

スクルージは、なおも問いかけた。

「そうなのですね、精霊さま？」

幽霊がうなずいたかのように、その衣の上部が一瞬、縮まってひだになった。スクルージがもらった返事は、それだけだった。

このごろでは、幽霊の相手をするのにだいぶ慣れていたスクルージも、このもの言わぬ姿が恐ろしくてたまらず、脚がガタガタ震えて、いざあとに従^{したが}いて行こうとしたとき、ほとんど立っていられないくらいだった。精霊は、スクルージの様子を見てとって、立ち直る余裕をあたえるために、一瞬、足をとめた。

しかし、スクルージは、このためますます具合が悪くなった。黒い衣の奥から、幽霊の目がまじまじと自分を見すえているのだと思うと、漠とした、つかみどころのない恐怖でぞく

ぞくした。

一方、スクルージのほうでは、いくら目を睜みつても、幽霊の手と大きな黒衣のかたまりのほかは、何ひとつ見えないのだ。

「未来の幽霊さま！」

スクルージは叫んだ。

「これまでお目にかかった幽霊さまのなかであなたくらいこわいおかたはいません。でも、あなたの目的は、わたしのためになることをしてくださいと承知していますし、また、わたしもこれまでとは違った人間に生まれ変わりたいと思っていますので、あなたのお供をする用意はできています。それも、感謝の気もちをこめてそうするのでございます。おことばをかけていただけないでしょうか？」

幽霊は、返事をしなかった。手は、まっすぐに二人の前方をさしていた。

「ご案内ください！」

スクルージは言った。

「ご案内ください！ 夜がどんどん過ぎていきますし、わたしにとっては貴重な時間であることも承知しています。ご案内ください、精霊さま！」

幽霊は、近づいてきたときと同じように動きだした。スクルージは、幽霊の衣の影のなかにはいつて、あとに従したがっていった。その影が自分をもちあげて、運んでいつてくれるように思えたのだ。

二人は、街のなかへはいったような気がしなかった。むしろ、街のほうに二人のまわりに忽然とあらわれて、進んで二人をとり囲んだような感じだった。

ともかく、二人は、いま街の中心にいた。商人たちとまじって取引所にいたのだ。商人たちは、足早にあちこちと往き来し、ポケットのなかで金をジャラジャラ言わせたり、いくつかのグループで話しあったり、懐中時計を見たり、思案顔で自分の大きな金製の印いんぎょう形をもてあそんだり、そのほか、スクルージがいままでによく見たような、いろんなことをやっていた。

幽霊は、実業家たちの小さな一群のそばで立ち止まった。その手が実業家たちを指しているのを見て。スクルージはかれらの話に耳を傾けるために進み出た。

「いえね」

ものすごく大きなおとがいをした、非常に太った男が言った。

「どのみち、わたしも詳しく知ってるわけじゃありませんよ。ただ、あの男が死んだとい

うことを知っているだけです」

「いつ死んだのですか？」

べつの男がたずねた。

「たしか、昨夜のことだと思います」

「おや、いったい、どうしたんでしょうな？」

またべつな男が、おそろしく大きな嗅ぎタバコ入れから、多量の嗅ぎタバコを取り出しながら、訊いた。

「あの男は絶対死なないと思っていたんだが」

「神のみぞ知る、ですよ」

最初の男が、あくびをしながら言った。

「「自分のお金はどうしたんだろうね？」」

赤ら顔で、鼻のさきに垂れ下がったこぶのある紳士が、それを雄の七面鳥の肉垂れのようにブラブラさせながら、言った。

「聞いていませんな」

おとがいの大きな男が、またまたあくびをしながら言った。

「自分の同業組合に遺したんでしょな、たぶん。わたしには遺していません。わたしの知っているのは、それだけです」

この冗談に、一同は、どっと笑った。

「ずいぶん安上がりの葬式になりそうですな」

同じ話し手が言った。

「というのは、たしかに、会葬に行くというひとの話は、だれも知りませんからな。どうです、ひとつ、われわれが団体を組織して、自発的に参列したら？」

「弁当が出るなら、行ってもいいですがね」

鼻にこぶのある紳士が言った。

「でも、団体に加わるとすれば、食べさせてもらわないとね」

また、どっと笑い。

「そうすると、みなさんのなかで、結局、わたしがもつとも第三者的ということになりそうですな」

最初の話し手が言った。

「わたしは、式場で黒い手袋をもらってはめたことも、弁当を食べたことも一度もありません」

せんからな。だが、だれかほかに行くひとがあるなら、わたしも行きますよ。考えてみると、わたしなんかあの男ととくに親しかった友人だった、と言えないこともないですからね。会えばいつでも足をとめて、ことばを交わしたもんです。じゃあ、さよなら！」

話し手も聴き手も、そこからぶらぶらと立ち去って、ほかのグループにまざってしまった。スクルージは、いまの男たちを知っていたので、説明を求めるように幽霊のほうに視線を送った。

幽霊は、滑るように進んで、とある通りへは行っていった。その指は、立ち話をしている二人の男を指していた。スクルージは、いまの説明はここにあるのかもしれないと思い、また聞き耳を立てた。

スクルージは、この二人のこともよく知っていた。かれらは、実業家であり、大金もちで非常に重要な人物だった。かれは、この二人によく思われるよう、日ごろから心がけていた。つまり、商売上の立場からである。厳密に商売上の立場からである。

「やあ、こんにちは」

一人が言った。

「やあ、こんにちは」

相手が答えた。

「ところで」

最初の話し手が言った。

「あの悪魔のやつも、とうとう、くたばってしまいましたね、え？」

「そういう話ですね」

相手が答えた。

「寒いすな」

「クリスマスは季節ですから、これが順当でしょう。あなたはスケートはなさいませんね？」

「ええ、ええ。ほかに考えることがありますのでな。では、さようなら！」

ほかにほひとつも話されなかった。それが二人の出会いで、会話で、別れだった。

スクールジは、最初、精霊が一見こんなつまらない出来事を重視するのに驚きそうになった、そこに何か隠れた目的があるにちがいないと思い、それは、いったい、どんな目的だろうと考えにかかった。

そういう会話がもとのパートナーのジェーコブの死に何かかわりがあるとはとても考えられなかった。あれは過去のこと、この幽霊の領域は未来だからだ。そうかといって、自

分に直接つながりのある人物で、その会話があてはまるような者は思いあたらなかった。

しかし、この会話がだれにあてはまるにせよ、自分の向上にとって何か隠れた教訓が含まれていることを露ほども疑わなかったのも、自分が聞いたり見たりしたことはひとつ残らず大事に心にとどめておこう、とくに、自分のまぼろしが出てきたらよく見ておこうと決心した。

スクルージは、自分の将来のふるまいが、かれが見失った手がかりをあたえ、これらの謎を解くのを容易にしてくれるだろうと期待していたのだ。

スクルージは、当のこの場所に自分の姿が見えないかとあたりを見まわしたが、いつもの隅の席にはべつの男が立っていたし、時計は、すでにかれがそこにいる時刻を指していたけれども、表玄関からなだれこんでくる多数のひとびとのなかに、かれ自身とおぼしいまぼろしを見いだすことはできなかった。

けれども、このことは、あまりスクルージを驚かせなかった。というのも、心のなかで生活の一新ということを考えめぐらしていたし、そういう変化のうちに自分の新生の決意が実現されるだろうと考えもし、願いもしていたからだだった。

静かに、黒々と、幽霊は、スクルージのかたわらに立って、手を前へさしのべていた。ス

クルージがもの思いに沈んだ探求からさめたとき、幽霊の手の向きと、自分に対する位置から推して、例のへ見えぬ目ゝが鋭く自分を見つめているような気がした。するとぶるっと身震いして、寒気がしてきた。

二人は、この繁華な場面をはなれて、街の場末へやって来た。スクルージは、その場所の見当はついていたし、いかがわしい評判も耳にしていたけれども、これまで足を踏み入れたことはなかった。道路は、不潔でせまく、店も家もみすぼらしく、ひとびとは半裸体で、酔っぱらって、だらしなく、醜くかった。

路地やアーチ道は、まるで汚水だめのように、不快きわまる臭いと汚物と生物を、家の点在する街路へはき出している。そして、その一廓全体が犯罪と汚物と不幸で、悪臭を放っていた。

このいまわしい巢窟そくの奥深く、差掛け屋根の下に、軒の低い、突き出た店があった。そこは、鉄、ぼろ布、びん、骨類、脂のベトベトした臍物などを買入れる店だった。中の床の上には、錆びついた鍵、釘、鎖、蝶番い、やすり、秤皿、分銅、その他あらゆる種類の屑鉄が積みあげてあった。

だれも詳しく調べる気になれないような秘密が、見苦しいぼろ布の山や、腐った脂身のか

たまりや、骨の墓場のなかではぐくまれ、隠されていた。

古煉瓦で作った木炭ストーブのかたわら、自分が商っている商品のなかに、七十歳がらみの、白髪しらの悪党がすわっていた。外の冷たい風が入り込まないように、種々雑多のぼろ布を物干し綱にかけわたして、むさくるしいカーテンを作り、そのひっそりとした隠れ場所に、すっかり悦に入ってパイプをふかしていた。

スクールジと幽霊が、この男の面前に来たちようどそのとき、重そうな包をかかえた女が、こそこそとはいって来た。ところが、この女がはいるかはいらないかのうちに、やはり大きな荷物をかかえた、べつな女がはいつて来た。そのすぐあとから、色あせた黒の服を着た男が、つづいてはいつて来た。

二人の女は、おたがいに相手がわかったときにもぎよつとしたが、女たちを見たときのこの男の驚きも、それに劣らなかつた。しばらくのあいだ、パイプをくわえた老人までいっしよに、驚いてポカンとしていたが、やがて三人は、こぞってドツと笑いだした。

「ほうっておいても、一番目にくるのは日雇い女さ！」

最初にはいつてきた女が叫んだ。

「ほうっておいても、二番目にくるのは洗濯女だしね。それから、ほうっておいても三番

目にくるのは葬儀屋さ。いいかい、ジョーじいさん、これがめぐり合わせというやつさ！ 驚いたね、申しあわせもしないのに、三人そろってここで出つくわすとはね！」

「出つくわすとしたら、これ以上いい場所はあるめえよ」

ジョーじいさんは、パイプを口から放しながら言った。

「さあ、客間へへえりな。おまえさんは、もうむかしっから自由に出入りしてるんだよな。あとの二人も、まんざら知らない顔じゃねえ。まあ、待て、店の戸を閉めてくるから。ああ！ いやにきしみやがる！ この戸の蝶番いほど錆びついた鉄つきれはここにはねえぜ、ほんとはさ。また、わしみてえな古びた骨もここにはねえしな、たしかに。ハ、ハ！ わしらは、みんなこの商売に似合ってるぜ。みんなお似合いさ。さあ、客間へへえりな。客間へへえりなよ」

客間というのは、ぼろ布の衝立のうしろの場所のことだった。老人は、古ぼけた敷物押さえて火をかき集め、パイプの柄でくすぶっているランプの芯を切りそろえ（もう夜になっていたのだ）、またパイプを口に銜くはえた。

老人がこうしているあいだに、さつき口をきいた女が自分の包をドサツと床に投げ出し、ひけらかすような態度でスツールに腰をおろした。そして、ひざの上で腕を組んで、ほかの

二人をずぶとい挑戦的な態度で見ながら、こう言った。

「それで、どうしたってんだよ！ どうしたってんだよ、デイルバーのおかみさん？」

女は言った

「だれだって自分で自分の面倒を見る権利があるんだよ。あいつは、いつもそうしてたんだ！」

「まったく、そのとおりだよ！」

洗濯女が言った。

「あいつほどそうしたものはいないよ」

「そんなら、何もそうこわがってるみたいに、きよときよとして突っ立ってんじゃないよ、あんた。だれが知ってるもんかね？ おたがいにあらを捜すつもりじゃないんだろ、まさか？」

「むろん、そうだよ！」

デイルバーのおかみと男が、口をそろえて言った。

「そんなことするもんか」

「それなら結構だよ！」

女は叫んだ。

「それでじゅうぶんだよ。こんな物、一つ二つなくなっただって、だれが困るもんかね？　まさか、死んだ人間が困るわけじゃあるまいしさ」

「まったく、そうだよ」

デイルバーのおかみは、笑いながら言った。

「死んだあとまでこんなものを取っておきたかったら、あの意地悪のけちんぼうめ」
その女はことばを続けた。

「なぜ、生きているあいだ、人並にしなかつたんだい？　そうしていりや、急に死神に見舞われたときだって、だれか世話してくれる者もあつたらうから、あそこでたった一人で寝たままくだばらずに済んだらうにね」

「まったく、あなたの言うとおりだよ」

デイルバーのおかみが言った。

「罰があたったのさ」

「罰をあてるなら、もうちょっときつい罰にしてもらいたかったね」

女が答えた。

「もつとべつなブツをくすねることができていたら、もつときつい罰になったはずだよ、そりやもう請け合ってもいいよ。その包を開けてみとくれよ、ジョーじいさん。そして、値踏みしてみとくれ。はつきり言っとくれ。わたしや一番先だつてかまやしないし、二人が見てたつてこわかないよ。」

ここで顔を合わすまえから、おたがい、ひとさまの物をくすねているなんてことは、よくわかつてたんだからね。悪いことじゃないさ。包を開けてみとくれよ、ジョー」

しかし、この女の仲間の義侠心が、これを許さなかった。色あせた黒の服を着た男が、まず先頭を切つて、自分の分捕品を取り出した。それは多数ではなかった。印鑑がひとつ二つに、筆入れ、カフスポタンがひとつ組、あまり値打ちのなさそうなブローチがひとつ、それだけだった。

ジョー老人は、品物をひとつひとつ調べて、値ぶみすると、それから、それぞれの品に自分が出してもいいと思う金額をチョークで壁に書きつけて、これ以上もうないとわかると合計を出した。

「これがおまえさんの勘定だ」
ジョーが言った。

「もう六ペンスだって出せねえよ、たとえ、出さねえと釜ゆでにすると言われたってね。次はだれかね？」

次は、デイルバーのおかみだった。シートに、タオル、わずかばかりの衣類、旧式な銀のスプーンが二本、角砂糖ばさみが一挺、二、三足のブーツ。この女の勘定も、まえと同じように、壁に書きつけられた。

「わしは、いつもご婦人には気張りすぎるんだよ。そいつがわしの欠点で、だもんで損かりしてるしまつき」

ジョー老人は言った。

「それがおまえさんの勘定だ。もう一ペニーくれなんて言って、ごてるつもりなら、わしはこんなに気前よくしたのを後悔して、半クラウンがとこ引いちまうぜ」

「さあ、こんどはあたしの包みを開けてみとくれよ、ジョー」

最初の女が言った。

ジョーは、包みを少しでも開きやすくするために、床にひざをついた。そして、いくつも結び目をほぐくと、何やら黒っぽい布地をぐるぐる巻きにした、大きな、重そうな品物を引きずり出した。

「こいつはどういうもんだね？」

ジョーが言った。

「ベッドのカーテンじゃねえかー」

「ああ！」

女は、腕組みをしたまま、身を乗り出して、笑いながらやりかえした。

「ベッドのカーテンさ！」

「おまえさん、まさか死人をあそこに寝かしたまま、リングぐるみ、引っぱずしてきたってんじやあるめえな」

と、ジョーは言った。

「ああ、そうだよ

女が答えた。

「それがいけないかい？」

「おまえさんは、生まれついで的身代づくりだよ」

ジョーが言った。

「いまにきつとひと財産つくるだろうよ」

「あたしやね、ちよつと手をのばせば何かつかめるときに、手を引っこめるようなことはしないよ。あいつみたいな男のためにさ。そりやもう請け合ってもいいさ、ジョー」
女は、落ちつきはらって言った。

「ちよつと、その毛布にランプの油をこぼさないでおくれよ」

「あいつの毛布かね？」

ジョーが訊いた。

「ほかのだれのだと思っっているのかい？」

女が答えた。

「あいつは、毛布がなくなつて、たぶん、もう風邪もひくまいさ」

「何かうつる病気で死んだんじゃあるめえな、え？」

ジョー爺さんは、手をとめて顔をあげて言った。

「そんなこと、こわがらなくてもいいよ」

女がやり返した。

「もしそうだったら、そんな物をほしがって、あいつのまわりをうろついたりするほど、あたしや、あいつのお相手が好きじゃないんだからね。ああ！ そのシャツなら、目が痛く

なるほど、いくらでも見ておくれ。だが、穴ひとつだつて、すれて糸の見える箇所だつて、見つからないだろうよ。それは、あいつが持っていたいちばん上等のシャツで、おまけにいい品物なんだよ。あたしがいかなかったら、無駄になつてたところさ」

「無駄になつてたところつて、どういうことかね？」

ジョー爺さんが訊いた。

「もちろん、それを着せたまま埋葬しちまつただろう、つてことさ」

女は笑いながら言った。

「だれかばかな人間がいて、それを着せていたんだよ、だけど、わたしがまた剥はがしてしまつたのさ。もしそんな役目にキャラコがたくさんでなけりゃ、キャラコなんざ何の役にも立たないじゃないか。死骸に着せるにや、キャラコだつてまったく同じように似合うのさ。そのシャツを着たつて、やつぱり、みつともないことに変わりはないんだからね」

スクルージは、慄然としながら、このやりとりを聞いていた。老人のランプからさす乏しい明かりのなかで、かれらがめいめいの分捕品のまわりに集まっている情景を、スクルージは、いとわしさとむかつくような嫌気をもつてながめていた。たとえかれらが死体そのものを売買するいまわしい悪鬼であつたとしても、その以上の嫌気といとわしさを感じること

はできなかつただろう。

ジョーが、金を入れたフランネルの袋を取り出し、それぞれの取り分を数えて分けて床の上に置いたとき、同じ女が笑いながら言った。

「ハ、ハ！ これで一卷の終わりというわけさ、え？ あの男は、生きてるときはだれもかれもこわがらせて、そばへ寄りつかせなかつたが、結局、死んでから、あたしたちに儲けさせてくれたってわけさ！ ハ、ハ、ハ！」

「精霊さま！」

スクルージは、頭のとっぺんから爪さきまで震えながら言った。

「わかりました。わかりました。この不幸な男の場合と同じように、わたしもなるのかもしれません。わたしの生き方も、いまはその方向に向いています。や、大変だ、これはどうしたことだろう！」

かれは、慄然としてあとじさつた。というのは、場面が変わっていて、かれは、とあるベッドにほとんどすれすれに立っていたからだ。むき出しの、カーテンもないベッド。その上に、ぼろぼろのシーツのおおわれて、何か布にまかれたものが横たわっていた。それは、無言ではあつたが、恐ろしいことばで、その正体を語っていた。

スクルージは、ひそかな衝動のままに、ここはどんな部屋かと見まわしたけれども、その部屋は非常に暗かった。あまりにも暗いので、何ひとつはつきりとは見えなかった。

と、外の空にのぼつてきた淡い光が、まっすぐにベッドに落ちた。すると、そのベッドに、略奪され、奪われ、見守るものも、泣いてくれるひとも、面倒を見るひともないままに、この男の亡骸なきがらが横たわっていた。

スクルージは、ちらつと幽霊のほうを見た。幽霊のゆるぎない手は、亡骸の頭を指している。覆いは、いかにもぞんざいにかけてあるので、それをちよつと上げるだけで、スクルージが指一本動かしだけで、顔をあらわにすることができただろう。

スクルージは、そう思い、そうするのはいかにもたやすいことだと感じ、しきりにそうしてみたいと思った。それでいて、かたわらにいる幽霊を退散させる力がないのと同様に、ペールをとりける力もなかった。

おお、冷たい、冷たい、厳格な、恐ろしいへ死よ。あなたの祭壇をここに築いて、あなたの意のままになる恐怖で飾るがいい。ここはあなたの領土なのだから！

でも、愛され、崇めあがられ、尊敬された頭からは、その髪の毛ひとすじといえども、あなたの恐ろしい目的のために動かすことはできないし、目鼻立ちの一部といえども、醜く変える

ことはできないのだ。

手が重たくて、放せばぐったり落ちるからではない。心臓や鼓動が静止したからでもない。そうではなく、その手はかつては物惜しみせず、鷹揚で、誠実であつたし、心臓は勇敢で、暖かく、やさしく、鼓動は人間の鼓動だったからだ。

打つがよい、死の神よ、打つがよい！　そして、その傷口から、そのひとの善行がほとばしり出て、不滅の生命を世界に種まくのを見るがいい！

だれかの声がこういうことばをスクルージの耳にささやいたわけではない。しかし、かれは、ベッドをながめているうちに、それが聞こえたのである。スクルージは、この男がもしいまよみがえることができたなら、真つ先に考えることは何だろうか、と思った。貧欲か、冷酷な取引か、激しい気苦労か？　たしかに、そういうものが、この男を結構な結末に連れて来たのだ！

その男は、暗い、がらんとした家に横たわっていた。そして、このひとは、以前これこれのことで親切にしてくれた、だから、あの優しいひとことを忘れないためにも、このひとに親切にしてあげるんだ、と言うような男も女も子ども一人としていないのだ。

一匹の猫が戸口を引っかいていた。そして、炉石の下では、ネズミがカリカリかじる音が

していた。猫もネズミも、いったい、この死の部屋で何をほしがっているのか、また、どうしてこんなにそわそわと不穏な動きをしているのか、スクルージは、考えてみる勇気がなかった。

「精霊さま！」

スクルージは言った。

「ここは恐ろしい場所でございます。ここを立ち去っても、わたしがここで得た教訓は決して忘れません。本当です。さあ、まいりましょう！」

けれども、幽霊は、ゆるがぬ指で死人の頭を指していた。

「お気もちはよくわかります」

スクルージは答えた。

「わたしも、できればそうしたいのです。でも、わたしにはその力がございません、精霊さま。わたしにはその力がございません」

再び、幽霊は、スクルージを見ているようだった。

「もしこの街に、この男の死によって少しでも心動かされているひとがありましたら」
スクルージは、すっかり苦悩しながら言った。

「そのひとをわたしに見せてください、精霊さま、お願いでございます！」

幽霊は、一瞬、その黒いローブを翼のようにスクルージの前に広げた。そして、それを引っ込めると、昼間の部屋があらわれた。そこには、母親と子どもたちがいた。

母親は、だれかを待ち受けていた。しかも、案じ顔で、待ちこがれていた。母親は、部屋を歩きつ戻りつしたり、物音がするたびにビクツとしたり、窓から外をのぞいたり、時計にちらりと目をやったりしていた、そして、針仕事をしようとしても、だめだった。そして、遊んでいる子どもたちの声さえ、がまんできない風情ふせいだった。

やつのことで、待ちに待ったノツクの音がした。彼女は、急いでドアのところへ行つて、夫を迎えた。夫というのは、まだ若いのに、心配でやつれ、意気消沈した顔をしていた。いま、その顔には注目するべき表情が浮かんでいた。心から喜んでゐるのに、それを恥ずかしく思い、一生懸命にそれを外にあらわすまいと努力しているような表情だった。

かれは、自分のために炉辺に暖めてあつた食事のまゑに腰をおろした。それから、妻がどんな具合でしたか、とおずおずと尋ねたとき（それも長い沈黙があつたのちのことだった）、夫は何と答えたらいいか、とまどっている様子だった。

「よい知らせですか、それとも悪い知らせですか？」

妻は、相手が答えやすくするために言った。

「悪い知らせだよ」

夫が答えた。

「じゃあ、わたしたち破産ですか？」

「いや、まだ望みはあるんだよ、キャロライン」

「もし、あのひとの気もちが和らぐのなら」

妻は、びっくりして言った。

「望みはあるわ！　もしもそんな奇蹟が起こったのなら、まるつきり望みがないわけじゃないわ」

「気もちが和らぐなんてもうできっこないさ」

夫は言った。

「あのひとは死んだんだよ」

もし彼女の顔が真実を語っているなら、おとなしい、我慢づよい女だった。しかし、彼女はそれを聞いて、心底ありがたいと思ひ、両手の指を組み合わせたまま、ありがたいと言った。

次の瞬間、彼女は神の赦しを乞い、すまないと思った。だが、最初のが彼女の心からの気もちだった。

「ゆうべ、おまえにも話した、あの生酔いの女が言ったことだがねえ、ほら、おれがあひとに会って、一週間の猶予を頼もうとしたときに、言ったことさ。おれは、おれを避けるための口実にすぎないと思ってたんだけど、まったく本当だったんだよ。あのとき、あひとは、病気が重いというだけじゃなく、死にかかっていたんだよ」

「わたしたちの借金は、だれの手に移るのかしら？」

「さあね。でも、そのまえにこつちも金の用意ができるさ。たとえ金の用意ができなくつても、後継者があれほど情け知らずの債権者だとすれば、おれたち、よっぽど運が悪いということさ。とにかく、今夜は軽い心で眠れるよ、キャロライン！」

そうだ。どんなに優しい心になろうとしても、二人の気もちは軽くなっていった。子どもたちは、よくは理解できないながらも、鳴りをひそめて、まわりに集まって耳を傾けていたが、その子どもたちの顔も、まえよりも晴れやかになった。

これは、この男の死によつて幸福になった家庭だった！ この出来事で引き起こされた感情で、幽霊がスクルージに見せることができたのは、喜びの感情だけだった。

「何かやさしい気もちがひとの死に寄せられているところをお見せください」

スクルージが言った。

「さもないと、精霊さま、たったいまあとにした、あの暗い部屋が、永久にわたしにつきまとうでしようから」

幽霊は、スクルージがよく歩いて知っている通りをいくつか抜けて、かれを導いていった。スクルージは、道々、自分の姿が見えないかとあちこち見まわしたが、どこにもそれは見あたらなかった。

二人は、貧しいボブ・クラチットの家へは行っていった。スクルージが以前訪ねたことのある住まいだ。母親と子どもたちが暖炉のまわりに腰かけていた。

静かだ。じつに静かだ。騒々しい小クラチットたちも、炉辺の片すみに彫像のようにじつとすわっていて、一冊の本をまえにひろげているピーターを見あげている。母親と娘たちは、針仕事に余念がない。しかし、たしかに、一同はとても静かだった！

「へそして、イエス、一人の子どもの手を取ってかれらの真ん中に立たせた」(28)

スクルージは、どこでこういふことばを聞いたのだろうか？ かれは、そういうことばを夢見たのではなかった。スクルージと幽霊が、この家の敷居をまたいだときには、ピ

「ターが音読したものにちがいない。どうしてピーターはさきを読みつづけないのだろうか？
母親は、縫い物をテーブルに置いて、片方の手をあげて、顔にあてた。

「この黒い色は、目を痛めるんだよ」

彼女は言った。

黒い色だつて？ ああ、かわいそうなちっちゃいティム！

「もうよくなつたよ」

クラチット夫人は言った。

「ロウソクの光だと目が疲れるんだよ。お父さんが帰られたときに疲れた目を見せたくないんだよ、どうあつてもね。もうじき帰つてこられる時刻だよ」

「むしろ、過ぎているよ」

ピーターは、本を閉じながら答えた。

「だけど、父さんはいつもよりゆっくり歩いて帰ってきてるような気がするんですよ、
この二、三日は、母さん」

かれらは、また静かになつた。やがて、母親は、しっかりした、明るい声で言った、その
声は、一度、口ごもつたきりだつた。

「わたしはおぼえているんだよ、お父さんは、とても早く——お父さんは、とても早足で、ちっちゃいタイムを肩車にのせて歩いて帰ったのを、母さんはおぼえているんだよ」

「ぼくもおぼえている」

ピーターが言った。

「何べんも見てるよ」

「わたしもおぼえている」

もう一人が叫んだ。全員がおぼえていた。

「だけど、あの子はとても軽かったし」

母親は、一心に仕事をつづけながら、また言った。

「お父さんは、あの子をとてかわいがっていたから、ちつとも苦にはならなかったのだよ。ちつともね。そら、お父さんのお帰りだよ！」

彼女は、急いで出迎えに出ていった。小柄なボブは、襟カムフォーター巻カムフォーターにくるまって——かわいそうに、ボブは慰め手カムフォーターが必要だったのだ——はいってきた。

ボブのお茶は、暖炉の棚に用意されてあった。みんなは、さきを争ってボブにお茶をすすめようとした。それから、二人の小クラチットたちは、父親のひざに上がって、それぞれ、

小さな頬を父親の顔におしつけた、まるで「気を落とさないでね、お父さん。あんまり悲しまないで」と言うように――。

ボブは、機嫌よく二人の子どもの相手をし、家族全員に楽しそうに話しかけた。テーブルのついている針仕事を見て、クラチット夫人と娘たちの勤勉と仕事の速いことを褒めた。その調子だと、日曜日のずっと前にできあがってしまうだろう、とボブは言った。

「日曜日ですって！　では、きょう、行ってきたのね、ロバート？」
かれの妻がたずねた。

「そうだよ」

ボブが答えた。

「おまえも行けたらよかったのになあ。あそこがどんなに青々としたところかを見れば、きつと気もちが晴ればれとしただろうと思うよ。でも、これからは何度も見られるだろう。

日曜日には歩いてくるよ、とあの子に約束したんだよ。わたしのちっちゃい、ちっちゃい子！」
ボブは叫んだ。

「わたしのちっちゃい子！」

突然、ボブは、泣きくずれた。泣かずにいられなかったのだ。もしも、泣かずにいられる

ようであつたら、かれとタイムのあいだは、もしかすると、いまよりもっと隔たつてしまつていたことだろう。

ボブは、部屋を出た。そして、階段を上がつて、二階の部屋へはいつていった。部屋には明るく灯がともり、クリスマスの飾りがしてあつた。死んだ子のすぐそばに、ぴったりとくつつけて椅子が置いてあり、いましがたまで、だれかがすわつていた気配が残つていた。

哀れなボブは、その椅子に腰をかけ、しばらく考えこんで、気が落ちつくと、小さな顔に接吻した。ボブは、ようやく起こつたことを受け容れて、また明るい気もちになつて、階下へ降りていった。

一同は、暖炉のまわりに椅子を寄せて、話し合つた。娘たちと母親は、まだ針仕事をつづけていた。ボブは、スクールジさんの甥が驚くほど親切だつたことをみんなに話してきかせた。その甥には、たつた一度しか会つたことがないのだが、きょう通りで会つたところ、自分が少し沈んでいるのを見て——ほら、ちよつとばかり沈んでいたんだね、とボブが言つた——何か心配なことでもあつたのですか、と聞いてくれた。

「それを聞くと」

ボブは言つた。

「なにしろ、あのかたはこの上もなく気もちのよい話し方をなさるだもんだから、わたしは事情を話したんだよ。へそれはじつにお気の毒です、クラチットさん。あなたのやさしい奥さんにも、心からお気の毒に思います」と、こうおっしゃるんだよ。ところで、いったい、どうしてそんなことを知っているんだろうね、わたしにはわからないよ」

「知っているって、何をですの？」

「いや、おまえがやさしい妻だということをさ」

「そんなことはだれだって知っているよ！」

ピーターが言った。

「よく言った、ピーター！」

ボブは叫んだ。

「だれだって知っていてほしいね。へあなたのやさしい奥さんにも、心からお気の毒に思います。もしわたしで何かお役に立つことがありましたら、これがわたしの住まいですから、どうか、おいでください」と言つて、自分の名刺をくださったのだよ。ところで」

ボブが声を強めて言った。

「このことがほんとにうれしかったのは、あのかたがわたしたちに何かしてくださるかも

しれないというためじゃなくて、あのかたの親切な態度のためなんだよ。まるでうちのちっ
ちやいタイムのことを知っていて、ほんとに、わたしたちといっしょに悲しんでくれるみた
いだったんだよ」

「きつとよいかたなのよね！」

クラチット夫人が言った。

「実際に、会って話したら」

ボブが答えた。

「余計そう思うだろうよ。あのかたがピーターに何かもつといい働き口を見つけてくださ
ったとしても——いいかい、よくお聞きよ——わたしはちつとも驚かないね」

「まあ、お聞きよ、ピーター」

クラチット夫人は言った。

「そしたらね」

娘の一人が叫んだ。

「ピーターはだれかときあうことになって、べつに世帯をもつようになるのね」

「よせやい！」

ピーターは、ゲラゲラ笑いながら、やりかえした。

「そういうことにもなるだろうよ、いずれはな」

ボブが言った

「もつともそれにはまだだいぶ間があるがね。だがたとえ、わたしたちがいつ、どのよう
に、おたがい離ればなれになるにしても、かわいそうなちっちゃいタイムのことを忘れるよ
うな者は、だれ一人としていないだろうね——そうだろう——うちで起こったこの最初の別
れのことを？」

「絶対に、お父さん！」

みんなは一斉に叫んだ。

「そして、わたしは知っている」

ボブが言った。

「わたしは知っているよ、おまえたち。あの子は、ちっちゃい、ちっちゃい子どもだった
けれど、どんなに辛抱がよくて、また、どんなに優しかったかを想い出すなら、わたしたち
は、やすやすと内輪げんかはしないだろうし、また、そんなことをして、かわいそうなちっ
ちやいタイムのことを忘れるようなことはしないってことをな」

「ええ、絶対に、お父さん！」

みんなは、また一斉に叫んだ。

「わたしは、とてもうれしいよ」

小柄なボブは言った。

「とっつてもうれいよ！」

クラチット夫人は、かれにキスした。娘たちもかれにキスした。二人の小クラチットども、かれにキスした。そして、ピーターと父親は、握手をした。ちっちゃいタイムの霊よ、おまえの子どもらしい純粹さは、神から出たものなのだ！

「幽霊さま」

スクルージは言った。

「なんとなく、わたしどものお別れする時刻が迫ったような気がいたします。それはわかるのですが、どうしてだかわかりません。さつき死んで横たわっているのを見たあの男は、どういう人間なのか、お教えくださいませんか？」

「未来のクリスマスの幽霊」は、まえと同じように、実業家たちの集まる場所へとスクルージを運んでいった。が、スクルージ自身の幻影は見せなかった——もつとも時はまえとは違

っている、とスクルージは思った——事実、最近に見た幻影は、すべて未来に属するものだというを除いて、まったく順序がないように思われた。

実際、精霊は、どんなものにも立ち止まらずに、いま求められた目的にむかつて急ぐように、まっすぐに、どンドン進んでいった。とうとう、スクルージは、ちよつと待つてください、と嘆願した。

「わたしたちがいま急いで通り抜けておりますこの路地は」
スクルージは言った。

「わたしが商売をしているところで、しかも長いことしている場所でございます。その家が見えます。これからさき、わたしがどんな姿になるのか、見せてください！」

幽霊は、立ちどまったが、その手はべつなところを指している。

「その家は、向うにあります」
スクルージは声を張りあげた。

「なぜ、よそをお指しになるのですか？」
無情な指は、頑として動かなかつた。

スクルージは、急いで自分の事務所の窓のところへ行き、中を覗きこんだ。そこは、やは

り事務所だったが、かれのではなかった。家具類が違っているし、椅子にすわっている姿もかれではなかった。幽霊は、まえと同じ方向を指している。

スクルージは、また精霊のところへ戻った。そして、いったい、なぜ、また、どちらへ、自分は何行ってしまったのか、と不審に思いながら、幽霊に従っていくうちに、鉄門のところへ来た。スクルージは、はいるまえに立ち止まって、あたりを見まわした。

教会の墓地だった。では、ここに、これから名前を知ろうとする哀れな男が、地面の下に横たわっているのだ。あの男にふさわしい場所だ。周囲は、家々に囲まれ、一面に草と雑草が生い茂っている。まさに、植物の生命の成長ではなく、死の成長だった。あまりにも多くのひとを埋めすぎたために息がつまり、飽食したために肥え太っている。まったく、結構な場所だった！

精霊は、墓石のあいだに立って、そのうちのひとつを指さした。スクルージは、震えながら、そのほうへ進んでいった。幽霊は、まえと少しも変わらない姿をしていたが、スクルージは、その厳肅な姿に新しい意味を見いだして、怖くなってきた。

「あなたがいま指さしていらっしやる、あの墓石に近づくまえに」
スクルージは言った。

「ひとつだけ質問にお答えください。これらは、将来きつと起こることがらの幻影でしょうか、それとも、ただ、起こるかもしれないことからの幻影なのでしょうか？」

依然として、幽霊は、指を下にむけて、かたわらの墓をさしている。

「人間の進む道は、その道を固執していれば必ず到着する、ある終着点を予示しています」
スクルージは言った。

「でも、もしもその道を離れてしまえば、終着点も変わるでしょう。あなたがわたしにお示しくくださったものの場合も、そのとおりだとおっしゃってください！」

幽霊は、依然として身じろぎひとつしなかった。

スクルージは、ブルブル震えながら幽霊のほうへ這いよって、指の方向をたどっていった。うっちゃらかされた墓石の上に読んだのは、「エベニーザー・スクルージ」という自分の名前だった。

「あのベッドに横たわっていたあの男は、わたしなのですか？」
スクルージは、膝をついたまま叫んだ。

指は、墓からかれのほうに向けられ、また墓に向けられた。

「いいえ、精霊さま！ ああ、違います、違います！」



指はなおもそのままだった。

「精霊さま！」

スクルージは、幽霊の衣ころもにしつかとしがみつきなから叫んだ。

「わたしの言うことをお聞きください！ わたしは、いままでのわたしとは違います。こうして精霊と交際することがなかったなら、きつとなったにちがいない人間にはわたしはなりません。わたしにあらゆる望みがないのなら、どうしてわたしにこのようなものお見せになるのですか！」

このときはじめて、幽霊の手が震えるように見えた。

「善い精霊さま」

スクルージは、精霊のまえの地面にがばとひれ伏してことばを続けた。

「あなたの本心は、わたしのためにとりなし、わたしをあわれんでくださいます。わたしが生き方を改めるなら、お見せくださった、こういうもろもろの影をまだ変えることもできると保証してください！」

優しい手は、震えた。

「わたしは心のなかでクリスマスを尊び、一年じゅうそれを守ります。わたしは過去、現

在、未来のなかに生きます。この三人の精霊さまは、わたしの裡うちできっと奮発してくださるでしょう。精霊さまがたが、お教えくださった教訓を閉め出したりはいたしません。おお、どうか、この墓石に書いてある文字をぬぐ消すこともできようとおっしゃってくださいまし！

スクルージは、苦悩して、幽霊の手をつかんだ。幽霊は、それを振りきろうとしたが、スクルージは、必死になって懇願し、精霊を引きとめた。が、精霊のほうが一段と力が強くて、スクルージをはねつけてしまった。

自分の運命を逆転させてもらいたくて、スクルージが最後の祈りに両手を差しあげたとき、幽霊のフードと衣に変化が起こるのが見えた。それはちぢみ、へたへたとくずおれ、次第に小さくなって、ベッドの支柱のひとつになってしまった。

第五章　むすび

そうだ！　そして、そのベッドの支柱は、かれのものだった。ベッドも、かれのものだし、部屋も、かれのものだ。何よりもうれしく、幸福なことには、行く手に横たわる（時間）がかれのものであり、そのなかでいろいろと償いをする事ができることだった！

「わたしは、過去と現在と未来のなかに生きよう！」

スクルージは、ベッドからはい出しながら、くりかえして言った。

「三人の精霊さまがたは、わたしの裡できつと奮発してくださいさるだろう。おお、ジェーコブ・マーレイ！　このことのために神もクリスマスの季節も讃えられてあれ！　わたしは、ひざまずいてこう言うのだ、ジーコブ老人、ひざまずいて言うのだ！」

スクルージは、自分の崇高な意向に胸が躍り、興奮してしまったので、声はとぎれとぎれで、なかなか思うように出てこなかった。スクルージは、精霊と揉みあっているときに激しく泣きじゃくっていたので、顔が涙でぬれていた。

「これは引きちぎられてはいない」

と、スクルージは、ベッドのカーテンのひとつを両腕に抱きしめながら叫んだ。

「カーテンは、引きちぎられてはいない、リングも何もかも。ちゃんとここにあるわい——わしもここにいる——こうなっていただろうということがらの影だって、消すこともできるんだ。消せるとも。きつと消せるとも！」

このあいだずっと、かれの両手はせわしげに自分の着物をいじっていた。裏返しにしたり、逆さにしてみたり、引き裂いたり、置き違えたりして、ありとあらゆる途方もないしぐさのお相伴をさせていた。

「どうしたらいいかわかんない」

スクルージは、叫んで、同時に笑ったり、泣いたりした。そして、靴下を相手にラオコーン(29) さながらの恰好をしてみた。

「わしは羽根のように軽くて、天使のように楽しくて、小学生のように愉快だよ。酔っぱらいのように目がまわるぞ。みんなにクリスマスおめでとう！ 世界じゅうの皆さん、新年おめでとう！ おーい、ここだ！ わーい！ やーい！」

スクルージは、跳ねまわりながら居間へはいっていき、いまや、すっかり息を切らして立

っていた。

「あそこに粥を入れておいたシチュー鍋があるぞ！」
スクルージは叫んで、また移動をはじめて、暖炉のまわりを回りだした。

「あそこに、ジェーコブ・マーレイの亡霊がはいつてきたドアがある。あそこに、現在のクリスマスの幽霊がすわっていた隅っこがある。あそこに、さまよえる亡霊たちを見た窓がある。何もかもまちがいない。何もかもほんとうなんだ。何もかもほんとに起こったんだ。ハ、ハ、ハ！」

長い年月、笑ったことのなかったひとにしては、実際、それはすばらしい笑いであった。すこぶる輝かしい笑いであった。これからさき、長く、長く続く晴れやかな笑いたちの先祖となるべき笑いであった！

「きょうが何日かわからんな」
スクルージは言った。

「どのくらいのあいだ、わしは幽霊さんたちといっしょにいたのか、それもわからん。何ひとつわからんわい。わしはすっかり赤んぼうみたいだ。なあに、気にすることはない。かまうものか。いつそ赤んぼうになりたいくらいだ。やーい、わーい、おーい、ここだ！」

そのとき、方々の教会が、これまで聞いたこともないような活発な鐘の音を鳴り響かしはじめたので、有頂天になっていたスクルージは、ハッとわれに返った。カラーン、コロン、カラーン。ガラソ、ゴロン、ガラソ。カラーソ、コロソ、カラーソ！ おお、すばらしい、なんとすばらしい！

窓のところへ駆け寄って、スクルージはそれを開き、頭を突き出した。霧もない、靄もやもない、澄んだ、晴朗な、陽気な、爽快な、冷たい朝。冷たくて、血も合わせて踊り出すようにヒューヒュー風の吹く朝。黄金の日光、神々しい空、ここちよい、さわやか大気、楽しい鐘の音、おお、すばらしい、なんとすばらしい！

「きようは何の日だね？」

スクルージは、晴着を着た少年を見おろしながら声をかけた、少年は、おそらく、あたりをながめようと、ぶらぶらはいって来たものらしかった。

「きようは何の日だね、粋なお兄ちゃん？」

「きようだって！」

少年は答えた。

「だって、クリスマスじゃないか」

「クリスマスか！」

スクルージは、自分に言い寄せた。

「クリスマスを逃さずにすんだんだな。精霊さんがたは、ひと晩であれを全部やつてくださったんだ。あのからたちは、何でも自分の思うようにできるんだ。もちろん、できるさ。

やあ、粋なお兄ちゃん！」

「やあ！」

少年が返事をした。

「ひとつおいた通りの鳥屋を知ってるかい、角かどつこの？」

スクルージが訊いた。

「もちろん、知ってるさ」

少年が答えた。

「賢い子だ！」

スクルージは言った。

「えらい子だ！ あの店にぶら下がっていた、賞をとった七面鳥が売れたかどうか知ってるかい？ 賞をとった小さいほうの七面鳥じゃないよ。大きいほうだよ？」

「何だって、ぼくくらい大きいやつかい？」

少年が聞きかえした。

「なんて愉快な子だろうね！」

スクルージが言った。

「この子と話すのは楽しいよ。そうだよ、お兄ちゃん！」

「いまもあそこにぶら下がっているよ」

少年が答えた。

「そうかい」

スクルージは言った。

「それを買ってきておくれ」

「うそ言ってるなあ！」

少年は叫んだ。

「いや、いや」

スクルージは言った。

「わたしは本気だよ。行って買ってきておくれ。ここへ持って来るように言っておくれ。そ

したら、届け先を指図してやれるからね。その男といっしょに帰っておいで。そしたら、一シリングあげよう。その男を連れて五分以内に帰って来たら、半クラウンあげるよ」

少年は、鉄砲玉のように飛んでいった。この少年の半分の速さで弾丸を打ち出せるひとがいたなら、そのひとは、銃にかけては確かな腕前のもちぬしだ、と言わなければならない。

「ボブ・クラチット一家に贈ってやるんだ！」

スクルージは、両手をこすり合わせ、腹をかかえて笑いながら言った。

「だれが送ったか、知らせちゃいけない。ちっちゃいタイムの二倍もの大きさなんだ。ボブに七面鳥を贈るなんて冗談は、ジョー・ミラー（30）だってやったことがあるまいて」

宛名を書くときの筆跡は、すっかりしたものではなかった。しかし、とにかく書くことは書いた。そして、階下に降りていき、通りに面したドアをあけて、鳥屋の男がくるのを待ちうけた。鳥屋の男の到着を待ちながら、そこに立っているとき、ふとノツカーが目にとまった。

「わしは生きているかぎり、これを大事にするぞ！」
スクルージは、それをパタパタたたきながら言った。

「ノツカーなんて、これまでろくすっぽ見たこともなかったなあ。なんて正直そうな顔つき

をしているんだ。すばらしいノツカーだ！ さあ、七面鳥が来たぞ。おーい！ わーい！
こんにちは！ クリスマスおめでとう！」

それは、たしかに七面鳥だった。こいつは、とても自分の足で立つことはできなかっただろ。よ、この鳥は。たちまち、封蝋ふうろうの軸ねじりみたいになって折れてしまったことだろう。

「これじゃあ、とてもキャムデン・タウンまでかついじゃ行けないね」
スクルージは言った。

「馬車に乗って行かなくちゃだめだよ」

スクルージは、クスクス笑いながら、こう言い、クスクス笑いながら、七面鳥の代金を払い、クスクス笑いながら、馬車代を払い、クスクス笑いながら少年にお駄賃をあたえた。しかし、スクルージが、息も絶え絶えにまた自分の椅子にすわりこんだときのクスクス笑いときたら、これまでのクスクス笑いを一段と上回るものだった。そして、なおもクスクス笑っているうちに、泣きだしてしまった。

ひげを剃るのも、容易なことではなかった。手がいっまでもひどく震えていたからである。それに、ひげ剃りというものは、ひげを剃りながらダンスをしていなくても、注意が必要なのだ。

しかし、スクルージは、たとえ鼻の先を切りおとしたとしても、絆創膏ばんそうこうをペタツとはりつけただけで、すっかり満足していたことだろう。

スクルージは、「上から下まで晴れ着ずくめで」、ついに通りに出ていった。このときには、へ現在のクリスマスの幽霊といっしょに見たとおり、ひとびとはどっと溢れ出ていた。手を背後にまわして歩きながら、スクルージは、だれかれとなく、うれしそうな微笑を浮かべてながめた。要するに、かれがあまりにも楽しそうなので、気だてのよい連中が三、四人、

「おはようございます！ クリスマスおめでとう！」
と、声をかけた。

そして、スクルージがその後もたびたび話したように、これまで聞いたすべての快活な響きのなかでも、これほどかれの耳に快活に響いたものはなかったのだった。

いくらか行かないうちに、向うから恰幅のいい紳士がこちらへやってくるのが目にとまった。きのう、スクルージの事務所にはいつて来て、「スクルージ・アンド・マーレイ商会で、ございますね？」と言った紳士である。

二人が顔を合わせたら、この老紳士が自分のことをどんな顔をして見るだろうかと思うと、

スクルージは、胸をつき刺すような痛みをおぼえた。

しかし、かれは自分のまえにどのような途みちがまつすぐに横たわっているかを知っていた。そこで、その途をとった。

「もしもし、あなた」

スクルージは、足を早めて、老紳士の両手をとって、言った。

「こんにちは。昨日はうまくいきましたでしょうね。ほんとうにありがとうございます。クリスマスおめでとうございます！」

「スクルージさんですね？」

「そうです」

スクルージは言った。

「それがわたしの名前ですが、あなたには感じのいい名前ではないかもしれませんが——どうかお許しください。それから、ひとつお願いがあるので——」

ここで、スクルージは、紳士の耳に何事かささやいた。

「これは驚きましたな！」

紳士は、息がとまったかのような声で、叫んだ。

「まあ、スクルージさん、あなた、本気なんですか？」

「どうぞ、よろしければ」

スクルージは言った。

「それよりびた一文も欠けないようにお願いします。これまでの何回にもわたる不払いの分を含めてあるんですよ、本当です。よろしくお願いできましようか？」

「これは、これは」

紳士は、スクルージと握手しながら言った。

「何と申しあげてよいかわかりませんが、このような過分な——」

「どうか、何もおっしゃらないでください」

スクルージが答えた。

「どうか遊びにきてください。遊びに来ていただけましようか？」

「参りますとも！」

老紳士は叫んだ。本気でそう言っていることは明らかだった。

「ありがとうございます」

スクルージは言った。

「大変お世話になりました。幾重にもお礼を申しあげます。それでは、お大事に！」

スクールジは、教会へ行った。それから、あちこちの通りを歩きまわって、ひとびとが急ぎ足で行き交うのをながめたり、子どもたちの頭を撫でてやったり、乞食にいろいろたずねたり、家々の台所をのぞいたり、窓を見あげたりした。そして、あらゆるものがかれに喜びをあたえるのに気がついた。スクールジは、散歩というものが——いや、散歩にかぎらず何事でも——自分をこんなに幸福にするなんて、いままでついぞ考えたことがなかった。

午後には、甥の家のほうに歩みを向けた。

家まで行って、ドアをノックする勇気が出るまでに、何べんも戸口を通り越した。

しかし、思いきって、ドアをノックした。

「ご主人はいらっしゃるかな？」

スクールジは、出て来たメイドに言った。いい娘だ！ とても。

「はい、いらっしゃいます」

「どこにおいでかね？」

スクールジは言った。

「食堂にいらっしゃいます。奥さまとごいっしょに。どうぞ、お二階にご案内しましょう」

「ありがとうよ。ご主人は、わたしのことを知っておいでだから」

スクルージは、もう食堂の錠に手をかけながら言った。

「ここへは行って行くよ、娘さん」

かれは、そつと錠をまわし、ドアの横あいから、顔をのぞけた。二人は、食卓をながめていているところだった（食卓は、たいそうきちんとして馳走が並べてあった）。というのも、こういう若い主婦というものは、いつもこのような点について気を使って、万事がきちんとしてるようにしておくのが好きだからだ。

「フレッド！」

スクルージは言った。

ああ、びつくりした、甥の妻がなんと驚いたことか！ スクルージは、その瞬間、足台に足をおいて片隅にすわっている彼女のことを忘れていたのだ。そうでなかったら、どんなことがあっても、そんなまねはしなかっただろう。

「ああ、びつくりした！」

フレッドが叫んだ。

「どなたです？」

「わたしだよ。おまえの伯父さんのスクルージだ。ご馳走をよばれに来たんだよ。入れてくれるかい、フレッド？」

入れてくれるかだつて！ 握った手を振りまわされて、スクルージの腕がちぎれなかったのは、もっけの幸いだつた。五分もすると、スクルージは、すっかりくつろいでしまった。これほど真心こもった歓迎ぶりはまたとあるまい。

姪は、幻影で見たのと、まったく同じだつた。トッパが来たとき、かれも同じだつた。ぼつちやりした妹が来たとき、彼女も同じだつた。みんなが来たとき、かれらも同じだつた。すばらしいパーティー、すばらしいゲーム、すばらしい気もちの一致、すばらしい幸福！

しかし、翌朝、スクルージは早ばやと事務所に出ていた。ああ、早ばやとそこに出ていた。自分がさきに事務所に着いて、ボブ・クラチットが遅れてくるのをつかまえることさえできれば！ それこそが、スクルージの熱望していたところだつた。

そして、それをやってのけたのだ。そうだ、ほんとにやってのけたのだ。時計が九時を打った。ボブはまだ来ない。十五分過ぎた。ボブはまだ来ない。ボブは、たつぷり十八分三十秒遅れてやって来た。

ボブが水槽のような小部屋にはいるところが見えるように、スクルージは、自分の部屋のドアをあけっぱなしにしたままですわっていた。

ボブは、ドアを開けるまえに帽子をぬぎ、毛糸のえりまきもとっていた。またたくまにスツールにすわると、九時に追いつこうとするかのように、せつせとペンを走らせはじめた。

「やあ！」

スクルージは、できるだけいつもの口調に似せようと努めながら、がみがみ言った。

「いまごろ、ここへやって来るとは、どういう料見なんだね？」

「まことにすみません」

ボブが言った。

「たしかに、遅刻してしまいました」

「遅刻か！」

スクルージは、くりかえして言った。

「うん、たしかに遅刻している。ちょっと、こっちへ来たまえ」

「一年にたった一度のことでございますから」

ボブは、水槽みたいな小部屋から現れながら弁解した。

「もう二度といたしません。きのうは、だいぶ浮かれ騒いだものですから」

「ところで、話があるんだよ、きみ」

スクールジが言った。

「わしは、これ以上こんなことにはがまんがならんのだ。で、そこでだ」

スクールジは、スツールから飛びあがって、ボブのチョッキのあたりをぐいと小突いたので、ボブは、よろめいて、またまた水槽みたいな部屋のなかへもどってしまった。

「で、そこでだ、わしはきみの給料を上げてやろうと思うんだ」

ボブは、震えあがって、ルーラーのほうににじり寄った。それでもつてスクールジをなぐり倒して、押さえつけて、路地にいるひとびとに助けを求めて、狂人に着せる拘束衣を持つて来てもらおう、と一瞬、考えたのだった。

「クリスマスおめでとう、ボブ！」

スクールジは、ボブの背中を叩きながら、まちがえようのない真剣さをこめて言った。

「この幾年ものあいだ、わしが祝ってあげた、どのクリスマスよりきみもめでたいクリスマスだよ、ねえボブ！ きみの給料を上げて、困窮しているきみの家族も援助して

あげたい。早速、きょうの午後にも、熱くした香料入りのワインでクリスマスを祝いなが



ら、きみのことをいろいろ相談しようじゃないか、ボブ！

火に燃料をつぎ足しなさい。そして、早速、もう一つ石炭入れを買ってきなさい、ボブ・クラチット！」

スクルージは、約束した以上のことを実行した。約束したことは全部したし、それよりも無限に多くのことをした。そして、死んでいなかった、たちっちゃんティムには、第二の父親と なった。

スクルージは、この善い、古い都のロンドンにも、あるいはこの善い、古い世界の、ほかのいかなる善い、古い都にも、町にも、村にも、かつてなかったくらいの善い友となり、善い主人となり、善い人間となった。

ひとによつては、スクルージがひとが変わったようになったのを見て笑う向きもあったが、かれはそういうひとたちを笑うのにまかせて、てんで気にかげなかった。なぜなら、この世界では善い目的をもつどんなことが起こっても、当初は必ずだれかがそれを見て思う存分笑わずにはおかないものだということを、賢明にも承知していたからである。

また、そういう連中は、どのみち、ものが見えていないのだということを知っていたので、かれらがひとをあざわらつて目に皺をよせれば、その見えない目をますます醜くするだけの

ことだから、それもまことに結構ではないかと考えていた。かれ自身の心は晴れやかに笑っていた。かれには、それでじゅうぶんだった。

スクルージは、それ以上精霊たちと交渉しなかった。そして、その後ずっと、絶対禁酒主義を守って暮らした（31）。そして、もし生きている人間でクリスマスの祝い方をよく知っている者があるとすれば、スクルージこそ、そのひとだといつも言われた。

わたしたちについても、本当にそのように言われますように——わたしたちすべてについても！そこで、ちっちゃいタイムが言ったように、神さまがわたしたちを祝福してくださいますように——わたしたちすべてを！

訳注

- (1) 邪眼——こういう目をもっているひとににらまれると災いがくるという。
- (2) イギリスでは、以前、自殺者は心臓に杭をうちこまれて四つ辻に埋められる習慣があった。この習慣は、一八二三年に廃止された。
- (3) 聖ダンスタン（九二四―九八八）は、カンタベリー大司教。イギリスの僧院制度を改革。聖杯を作っているときに人間の姿で現れた悪魔の鼻を焼け火箸でつまんで、三マイル四方に聞こえるようなわめき声を上げさせたと言われる。鍛冶屋の守護聖人。
- (4) コーンヒルは——ロンドン中心部の主要な通り。シティーで一番高い丘になっている。少年たちは、凍てついた坂道を靴のかかとで滑っていたのである。
- (5) キヤムデン・タウン——ロンドン北部の郊外の町。アイルランドからの移民やキプロス系ギリシア人が洋服屋・靴屋・カフェの経営者などとしてここに住みついた。デイケンズは少年時代をここで過ごした。

(6) 古の予言者——アロンが自分の杖をファラオとその家臣のまえに投げると、その杖はへびとなって、エジプトの魔術師の出したへびを呑み込んでしまった(旧約聖書「出エジプト記」第七章十二節)。

(7) 「風の翼に乗って」——旧約聖書「詩編」十八章十節からの引用。

(8) たとえば、ロンドンのビッグ・ベンは、一五分ごとに「カラーン、コローン」と小鐘がなり、正時には「ボーン」と大鐘が鳴る。

(9) 当時のアメリカの有価証券は、ほとんど無価値であった。ディケンズは『マーティン・チャズルウィット』においてもアメリカを半分荒野だと皮肉っている。

(10) アリ・ババ——『アラビヤ夜話』所収の「アリババと四十人の盗賊」の主人公。盗賊の洞窟を開ける「開け、胡麻！」という呪文でよく知られている。

(11) ヴァレンタインとオルソン——フランスの古いロマンスの双子の兄弟。幼児期に森に捨てられ、オルソンはクマに育てられ、ヴァレンタインは発見されて宮廷で育てられる。乱暴者のオルソンは、のちにヴァレンタインに救われて騎士になる。

(12) 何とかさん——『アラビヤ夜話』の中の「ヌーレディンと息子」に出てくるベッドレディン・ハサンという男。

(13) サルトンの馬丁——前述の話に出てくるせむしの馬丁。王女を妻にほしがったため、魔神に罰せられる。

(14) オウム——クルーソーがかわいがっていたポルという名のオウム。このオウムはことばを教えてもらっていたので、クルーソーにこう呼びかけたのである。

(15) フライデー——野蛮人の捕虜になっていたのを救って従僕にした先住民の青年。金曜日に救われたのでフライデーと名づけられた。

(16) ウェールズ風のかつら——老人のつける毛糸のかつら。

(17) あのワーズワスの詩の中の有名な牛たち——ワーズワスの「3月に詠める」という詩の中に「牛たちが草を食^はんでいる／一度も頭をもたげない／四十頭がまるで一頭のよ^うに草を食んでいる」とある。

(18) 自然発火——過度にアルコールを飲んでいると、この現象にかかりやすいと以前信じられていた。ディケンズの『荒涼館』三十二章には、自然発火で死んだとされるクルックの記述がある。

(19) 豊饒の角——幼いゼウスに乳を与えたヤギの角。その所有者がほしい物はなんでも豊富に作り出す。

(20) 「クリスマスのコクマルガラスに心臓をつついてもらう」は、『オセロー』第一幕第

一場六十四―五行の「だが、おれはおれの心臓を袖にのせてクリスマスのコクマルガラスにつつかせてもいい」というイアゴの台詞（せりふ）への引喩。極端な率直さと公明正大な取引を表すことばとして、しばしば引用される。

(21) 当時、貧しい人びとは、オーブンをもっていないので、ご馳走の材料をパン屋へもって行って調理してもらう習慣があった。

(22) 当時、パン屋のオーブンは、しばしば軒下に設置されることが多かったらしい。したがって、火がはいると、上に積もっていた雪が解け、舗道の石まで料理される、というのである。

(23) デイクENZは、日曜日を聖なる日として厳守するキリスト教の教義（安息日厳守主義）に一生反対した。一八三六年には、すでに厳しい日曜日の娯楽をさらに制限しようとする法案に反対するパンフレットを発表した。かれの主張は、日曜日こそは貧しい労働階級が、中流・上流階級が毎日享受している素朴な楽しみを享受できる唯一の日であるというものだった。

(24) ボブは、イギリスの口語で、当時の一シリングを表す。

- (25) すなわち、わざわざマーレイの亡霊の仲介をわずらさなくても、ということ。
- (26) 愛の文句——たとえば、*I love my love with an A, because she is Amiable, I love my love with a B, because she is Beautiful, I love my love with a C, because she is Clever* のように文を作っていく。
- (27) はかない権力を恃んで——シェイクスピアの『しっぺい返し』第二幕第二場一一八行から引用。
- (28) 「マタイ伝」第九章第三十六節からの引用。
- (29) ラオコーン——トロイアのアポロの神官。トロイア戦争の際にギリシア軍の木馬の計略を見破ったため、その子とともにアテーネー女神が送った二匹の海へびに巻き殺された。ラオコーンの群像には、二人の息子とともに海へびに巻き付かれて苦しんでいる様子が大理石に彫刻されている。
- (30) ジョー・ミラー——『ジョー・ミラー笑話集』の著者と想定されている喜劇役者（一六八四—一七三八）
- (31) 絶対禁酒主義——スピリッツ精霊と交渉しないという意味を含ませてある。

解 説

ディケンズについて

チャールズ・ディケンズは、ビクトリア女王から一般大衆にいたるまで、さらに、アメリカの読者層にも熱狂的に愛読され、外国では、ドストエフスキー、プーレスト、カフカなどからも絶賛されている、英国の作家である。十九世紀最大の文豪であったばかりでなく、二十世紀になると真剣な学問的な注目を浴びるようになり、その作品は、各国語に翻訳され、何度も映画、演劇、ミュージカルなど改作されている。

ディケンズは、下級官吏の長男として、一八一二年二月七日にポーツマス海港に近いランドポートに生まれ、三歳のときロンドンに移った。幼年時には父の家の屋根裏部屋で、スモークレット、フィールディング、デフォー、ゴールドスミス、ル・サージュ、セルバンテスなどを耽読した（その影響は、のちの作品にもうかがわれる）。

家計不如意のため、十二歳のときには靴墨工場に働きに出され、父親は借財不払いのため

投獄された。工場生活は一生忘れることのできない屈辱的な経験をデイケンズに味わせた。かれの小説に登場する多くの子どもたちと同様に、デイケンズの幼年時代は、困難な、不幸せなものであった。

十五歳のとき、初等教育を終えたばかりで弁護士事務所の事務員となったが、その仕事になじめず、ジャーナリストを志して、速記術を習得し、国会記者、新聞の報道記者となり、一八三六年、二十四歳のとき、かねて雑誌や新聞に発表していた写生文や短編を集めて「ボズの素描集」と題して出版した。

一八三七年、二十五歳のとき、画家フィズの挿絵を付けて、分冊月刊していた「ピックウイック・ペーパーズ」を出して、一躍、国民的作家になった。続いて、「オリバー・トウイスト」(一八三八)を出版して、当時の新貧民救済法や養育院制度の非人間性を暴露し攻撃した。以後、次々に小説を発表、長編としては『骨董店』(一八四一)、『ドンビー父子』(一八四八)、『デイヴィッド・コッパーフールド』(一八五〇)、『荒涼館』(一八五三)、『リトル・ドリット』(一八五七)、『二都物語』(一八五九)、『大いなる遺産』(一八六一)、中編としては『クリスマス・キャロル』(一八四三)、『炉辺のおおろぎ』(一八四五)などが代表作として知られる。

一八四二年、三十歳のときに、妻とともにアメリカを旅行し、大歓迎をうける。十月、『アメリカ覚え書』を出版、奴隷制度廃止と国際的版權を主張した。あまりに率直な批判のため、アメリカ人の反発を買った。

一八五八年、ディケンズは、自作の公開朗読をはじめた（若いとき俳優を志し、何度も素人芝居を演出し、また、それに出演していたディケンズの朗読は、単なる朗読ではなく、身振り手振りをまじえた一人芝居の趣があったと思われる）。一八六七―八年、アメリカを再訪、各地で自作の公開朗読*をおこなった。

著作のほかに慈善事業、雑誌編集、素人芝居、自作の公開朗読などが重なったため、健康がとみに衰え、ついに、一八七〇年六月九日、『エドウィン・ドルードの謎』を未完成のまま急逝し、国民的文豪としてウエストミンスター寺院に葬られた。享年五十八歳。

ディケンズの卓抜で多彩な性格創造とユーモアの質の高さは、しばしば、シェークスピアのそれと比較される。アメリカの詩人・批評家のウィリアム・ローズ・ベネーは、ディケンズについて、次のように述べている。

* 公開朗読は、『クリスマス・キャロル』、『炉辺のおろぎ』、『鐘の音』など「クリスマス・ブックス」所収の作品を簡約にしたもので、初回は慈善朗読であった。朗読は、聴集の大きなすすり泣きによってたびたび妨げられたという。

「英語の作家のうちで、ディケンズほど、特徴的に残酷な、あるいは苦しんでいる、あるいは滑稽な、あるいは嫌悪感を引き起こす、おびただしい人物を創造したものはいない。十九世紀の大人が子どもに加えた不法行為をかれくらい説得力をもって描いた作家はいない。ディケンズの感傷性や、とかく戯画に傾きがちな点に対する攻撃も、偉大なユーモリスト、キャラクターの創造者としての名声をほとんど減じるものではない」

「クリスマス・ブックス」と『クリスマス・キャロル』について

ヴィクトリア朝の初期には、クリスマスを祝うことは衰退していた。清教主義による規制と産業革命の最盛期のさなかにあつて、労働者はクリスマスを祝う時間はほとんどなかった。折しもディケンズのクリスマスの本、とりわけ、『クリスマス・キャロル』が出版されて、英米両国においてクリスマスの喜びを再びかきたて、ディケンズの名前は、クリスマスの同義語になった。一八七〇年にかれの死を聞いた、ロンドンの行商人の娘の少女は、「ディケンズさんが死んだんですって？ それじゃあ、サンタのおじさんも死んじゃうの？」と訊いたという逸話はよく知られている。

ディケンズは、一八四三年の『クリスマス・キャロル』を第一作として、『鐘の音』（一八四四）、『炉辺のおろぎ』（一八四五）、『人生の戦い』（一八四六）、『憑かれた男』

(一八四年)の五つの中編小説をクリスマスごとに、次々と発表した。そして一八五二年、これらの五篇は「クリスマス・ブックス」として一冊の本にまとめられた。

物語のあらすじは、クリスマスなんてばかばかしいと甥に言い放つような年老いた守銭奴のスクールジのもとに、クリスマスの前夜に、むかしのパートナーであるマーレイの亡霊が出現して、心を改めないと、自分のように死後、鎖に繋がれて世界中をうろつくことになる」と諭すとともに、これから三晩にわたって、過去、現在、未来の精霊が出現すると告げる。

過去のクリスマスの精霊は、スクールジに寄宿学校での孤独な生活、徒弟時代の様子、拝金主義に陥ったスクールジに絶望した婚約者ベルとの別れを見せる。

現在のクリスマスの精霊は、スクールジの甥のフレッドや事務員ボブ・クラチット、さらには世界じゅうの人びとが心の底からクリスマスを祝い楽しんでいる様子を見せる。

未来のクリスマスの精霊は、終始無言のまま、身ははぎ取られ、付きそう者も、嘆き悲しむ者もない、スクールジの惨めな死の姿や、雑草の生い茂ったかれの墓を見せる。

こういう幻影を見せられたスクールジは、これまでの生活態度をすっかり悔い改め、世界じゅうのどこの都にもかつていなかったような善い友となり、善い主人となり、善い人間となる。

『宝島』の作者ロバート・ルイス・ステイヴンソンは、ある友人に次のような手紙を書いている。

「きみは、デイケンズの『クリスマス・ブックス』を読んだことがあるだろうか。（中略）ぼくはまだ、二冊しか読んでいないが、目がつぶれるほど泣いた。そして、嗚咽を抑えるのに苦労した。しかし、ああ神よ、それらはじつにすばらしい——読み終わってから、とても気分がいいのだ——ぼくも善行をしよう、それも早速にだ——外へ出て行って、だれかを慰めてあげたい——ぼくは、きつと、お金をあげるだろう。ああ、人間が、このような本を書いて、ひとびとの心をあわれみでいっぱいにするなんて、なんと愉しいことだろう」

この二冊は、『クリスマス・キャロル』と『鐘の音』だと考えられている。

「デイケンズは、『クリスマス・キャロル』を執筆中、気もちが高ぶって、笑ったり泣いたりした。そして、作品のことを考えながら、ひとびとが寝静まっているロンドンの暗い通りを十五マイルも二〇マイルも歩きまわった、とアメリカの友人に宛てた手紙に書いている。そして、一八四三年十二月十七日に、チャップマン・アンド・ホールから、『パンチ』紙の画家ジョン・リーチの挿絵をつけて出版されるや、批評家たちは、こぞって褒めそやし、作品は驚異的な売れ行きを示した。『クリスマス・キャロル』は、五冊の『クリスマス・ブッ

クス」のなかでもっとも優れたものと評価されている。

本書の翻訳は、*Christmas Books (The Oxford Illustrated Dickens)* 所収の *A Christmas Carol* を
底本としている。リーチの挿絵も、この本から採った。